下月隈C遺跡
Ⅶ

―福岡空港周辺整備事業に伴う
下月隈C遺跡第8次・第9次調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第932集

―本文編―

2007

福岡市教育委員会

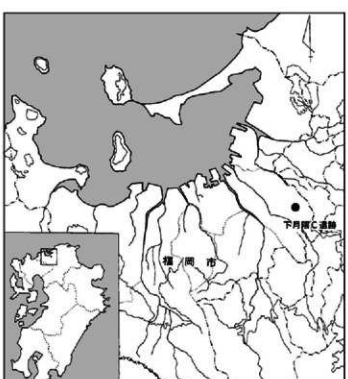
下月隈C遺跡

Ⅶ

―福岡空港周辺整備事業に伴う
下月隈C遺跡第8次・第9次調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第932集

―本文編―



調査番号　0219・0327
調査略号　SHC-8・SHC-9

2007

福岡市教育委員会

図版1　第4～9次調査古代遺構全景

図版2　第4～9次調査古墳時代後期～古代前期遺構全景

図版3　第4～9次調査弥生時代前期～古墳時代前期遺構全景

序

博多湾を抱いてアジア大陸と向かい合う福岡市は、古くから大陸文化の受け入れ口として栄えてきた地域で、各時代の重要な遺跡が数多く分布しています。特に、福岡市の中心部を南北に流れる那珂川・御笠川流域の博多区・南区から南に隣接する春日市にかけては、弥生時代の「奴国」の中心地域であり、博多区の国史跡の板付遺跡・金隈遺跡、那珂遺跡群や比恵遺跡群、南区の井尻B遺跡群など著名な遺跡が集中しています。

同様な遺跡の存在が予想された福岡空港南側に隣接する博多区月隈地区に、空港周辺の洪水対策用の調節池が建設されることになりました。事前調査を行った結果、遺跡が確認され、記録保存の為の発掘調査を平成10年～15年まで実施いたしました。6年にわたる調査の結果、弥生時代前期から中世にかけての各時代の遺構・遺物が出土し、多大な成果を上げることが出来ました。

本書は、平成14・15年度に実施した第8次・第9次調査の報告書で、調節池の報告書としては最終年度のものとなります。今次の調査では古代から中世にかけての条里水田や水路・川跡など、第7次調査から続く弥生時代前期から後期にかけての掘立柱建物を中心とする集落跡を検出しました。

本書が、市民の皆様の文化財保護に対するご理解とご認識を深める一助になり、また研究資料としてご活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで国土交通省九州地方整備局博多港湾・空港整備事業所および大阪航空局福岡空港事務所をはじめ、多くの方々にご理解とご協力を賜りましたことに対し、心から感謝の意を表します。

平成19年3月30日

福岡市教育委員会
教育長　植木　とみ子

例　　言

1．本書は福岡市教育委員会が博多区月隈４丁目地内の月隈漏節池工事予定内において、2002・３年度（平成14・15年度）に実施した下月隈Ｃ遺跡第８次・第９次調査の発掘調査報告書である。
2．発掘調査は14年度が埋蔵文化財課調査第２係主任文化財主事　山崎龍雄と同文化財主事　荒牧宏行（現同係主任文化財主事）、15年度は山崎が担当した。
3．本書の遺構番号は前年度と重ならないように番号を付し、番号の前にＳＢ（建物）、ＳＣ（竪穴住居）、ＳＤ（溝・河川）、ＳＥ（井戸）、ＳＫ（土坑）、ＳＳ（水田）などの遺構の性格を示す記号を付した。またピット・柱穴については調査面毎に付した。
4．遺構実測図に使用した方位は磁北である。また全体図に使用した座標は平面直角座標第Ⅱ系で、磁針方位は西偏約６°30′である。座標は旧日本測地系を使用。
5．本書の執筆は下記のとおりである。

第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章－１・２……山崎龍雄
第Ⅲ章－３……荒牧宏行
第Ⅲ章－４……山崎龍雄
第Ⅳ・Ⅴ章……山崎龍雄
第Ⅵ章－１……森　勇一
第Ⅵ章－２……屠山　洋
第Ⅵ章－３・５……パリノ・サーヴェイ株式会社
第Ⅵ章－４……パレオ・ラボ株式会社
第Ⅵ章－１……日野尚志
第Ⅵ章－２……荒牧宏行・山崎龍雄

6．自然科学分析は、昆虫化石については愛知県立津島東高校教諭の森勇一氏、出土獣骨については埋蔵文化財第１課の屠山洋氏、珪藻・花粉分析、種実、樹種同定についはパリノサーヴェイ株式会社、放射性炭素年代測定を株式会社パレオ・ラボに委託し、第Ⅵ章に収録した。
7．第Ⅵ章のまとめには、佐賀大学名誉教授の日野尚志氏から頂いた玉稿を掲載した。
8．図版編巻頭で使用した福岡空港航空写真は、九州地方整備局博多航空・港湾整備事務所撮影のものを使用した。
9．本書では、遺構の撮影は山崎・荒牧が行い、遺物の撮影についてはフォトハウスOKAに委託した。遺構の実測は各面の遺構全体図を写測エンジニアリング株式会社に委託し、個別遺構などその他については調査担当者と源戸啓治・藤野雅基・兼田ミヤ子・高手よし子・野口リウ子が行い、遺物の実測は土器・石器類は調査担当者の他、上方・渡石正子、和原聡子、山口朱美が行った。木器の実測は第８次調査出土分については、大半を株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託し、残りと第９次調査出土分は、埋蔵文化財第１課山口識治と境聡子が行った。製図は調査担当者と境聡子、相原聡子、岩崎由佳が行った。
10．第１面・第Ⅲ面・第９次調査遺物観察表については調査担当者と境聡子・木藤直子・増永好美が作成した。
11．本文土層の色調や遺物の色調は新版標準土色帖によっている。
12．本書編集は山崎龍雄と荒牧宏行がそれぞれ分担して行った。
13．発掘調査にかかる遺物・記録類の全ては、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。

本 文 目 次

下月隈C遺跡第8次調査

第Ⅰ章　はじめに……1
　1　調査に至る経過……1
　2　調査の組織……1

第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的環境……5
　1　遺跡の位置と立地……5
　2　遺跡の歴史的環境……5

第Ⅲ章　調査の記録……9
　1　調査の概要……9
　2　第Ⅰ面の調査……13
　3　第Ⅱ面の調査……37
　4　第Ⅲ面の調査……57

下月隈C遺跡第9次調査

第Ⅳ章　はじめに……167
　1　調査に至る経過……167
　2　調査の組織……167

第Ⅴ章　調査の記録……169
　1　調査の概要……169
　2　第1区の調査……171
　3　第2区の調査……184
　4　第3区の調査……186

第Ⅵ章　自然科学分析
　1　下月隈C遺跡から産出した昆虫化石群集について……197
　2　第8次調査出土動物遺存体について……202
　3　第8次調査の土壌・自然遺物の分析調査……203
　4　第8次調査出土遺物の放射性炭素年代測定……231
　5　第8次調査出土材の樹種分析……237

第Ⅶ章　総　括
　1　下月隈C遺跡を中心にして条里・河川について考える……249
　2　各面のまとめ……257

挿 図 目 次

Fig.1 下月隈C遺跡の位置（1/100,000）……4
Fig.2 下月隈C遺跡周辺の遺跡（1/50,000）……7
Fig.3 下月隈C遺跡の旧地形図（大正末～昭和初頃 1/10,000）……8
Fig.4 下月隈C遺跡調査地点位置図（1/6,000）……11
Fig.5 下月隈C遺跡調査区配置図（1/2,000）……12
Fig.6 第Ⅰ面西壁土層（1/40）……13
Fig.7 第Ⅰ面遺構全体図（1/400）……折込
Fig.8 SD703・719 出土土器・貨幣（1/3・1/1）……15
Fig.9 SD720 土層（1/60）……16
Fig.10 SD720 出土土器①（1/3）……17
Fig.11 SD720 出土土器②（1/3）……18
Fig.12 SD720 出土石製品（1/3）……19
Fig.13 各遺構出土木製品（1/3・1/4）……20
Fig.14 SX1033（1/60）……22
Fig.15 SX1034（1/60）……23
Fig.16 SK1001・1006～1010（1/40）……25
Fig.17 SK1018・1026・1031（1/40・1/60）……26
Fig.18 各土坑出土土器（1/3）……27
Fig.19 水田面出土土器（1/3）……27
Fig.20 SX1019（1/60）……28
Fig.21 SX1002・1005・1024・1025 出土土器（1/3）……29
Fig.22 各遺構出土木製品①（1/4）……30
Fig.23 各遺構出土木製品②（1/3・1/4）……31
Fig.24 遺構面出土土器（1/3）……31
Fig.25 SD735 土層断面図……37
Fig.26 第Ⅱ面遺構全体図（1/400）……折込
Fig.27 SX1040 実測図（1/20）……39
Fig.28 SX（堰）1047 全体実測図（1/80）……40
Fig.29 SX（堰）1047 平面、断面図（1/40）……41
Fig.30 SX（水口）1050 平面図（1/40）……42
Fig.31 SD735 出土須恵器実測図（1/4）……43
Fig.32 SD735 出土土師器実測図（1/4）……44
Fig.33 SD735 出土木器実測図 1（1/4・1/6）……45
Fig.34 SD735 出土木器実測図 2（1/4）……46
Fig.35 SX（水口）1050 出土人形実測図（1/4）……47
Fig.36 SX（水口）1064、SX1070 周辺実測図（1/80）……48
Fig.37 SX（水口）1064 実測図（1/40）……49
Fig.38 SX（水口）1064 周辺出土木器実測図 1（1/4）……51
Fig.39 SX（水口）1064 周辺出土木器実測図 2（1/4）……52
Fig.40 SX1070 実測図（1/40）……53
Fig.41 第Ⅱ面出土木器実測図（1/4）……54
Fig.42 第Ⅱ面出土弥生土器実測図（1/4）……55
Fig.43 第Ⅱ面出土紡錘車、ガラス玉実測図（1/3・1/1）……55
Fig.44 第Ⅱ面出土石器実測図（1/3・1/1）……56
Fig.45 掘立柱建物配置図（1/500）……58
Fig.46 第Ⅲ面遺構全体図（1/400）……折込
Fig.47 調査区西壁土層（1/60）……折込
Fig.48 台地部遺構配置図（1/400）……折込
Fig.49 掘立柱建物 1（1/80）……59
Fig.50 掘立柱建物 2（1/80）……60
Fig.51 掘立柱建物 3（1/80）……61
Fig.52 掘立柱建物 4（1/80）……62
Fig.53 掘立柱建物 5（1/80）……64
Fig.54 掘立柱建物 6（1/80）……65
Fig.55 掘立柱建物 7（1/80）……66
Fig.56 掘立柱建物 8（1/80）……67
Fig.57 掘立柱建物出土土器（1/4）……69
Fig.58 掘立柱建物柱穴出土柱・礎板 1（1/10）……70
Fig.59 掘立柱建物柱穴出土柱・礎板 2（1/10）……71
Fig.60 掘立柱建物柱穴出土柱・礎板 3（1/10）……72
Fig.61 SB1421 柱穴出土柱と土器（1/4・1/10）……74
Fig.62 SD818・1210（1/150）……78
Fig.63 SD818・1210 北西側下層遺構（1/150）……79
Fig.64 SD818 土層（1/60）……80
Fig.65 SD818 出土土器①（1/4）……81
Fig.66 SD818 出土土器②（1/4）……82
Fig.67 SD818 出土土器③（1/4）……83
Fig.68 SD818 出土土器④（1/4）……84
Fig.69 SD818 出土土器⑤（1/4）……85
Fig.70 SD818 出土土器⑥（1/4）……86
Fig.71 SD818 出土木器（1/4・1/5・1/6・1/12）……87
Fig.72 第７次調査 SD818 出土土器追加土器（1/4）……88
Fig.73 SD818 出土土製品（1/3）……90
Fig.74 SD1210 出土土器①（1/4）……91
Fig.75 SD1210 出土土器②（1/4）……92
Fig.76 SD818・1210 出土石器（1/3・1/4）……93
Fig.77 SD1119・1131・1278 出土石器（1/3・1/1）……94
Fig.78 SD1210 出土石器、鉄器・銅鏃（1/4・1/1・1/3・1/2）……95
Fig.79 SD1210 出土木器（1/5）……96
Fig.80 SD818・1210 内出土 SX1262・1263・1269（1/60）……97
Fig.81 堰 SX1269（1/60）……98
Fig.82 SX1269 出土土器（1/4）……99
Fig.83 SX1262・1263 出土土器（1/4・1/5）……100
Fig.84 SX1185・1262・1263・1269・1275 出土木器（1/5・1/6・1/12）……101
Fig.85 SX1267 出土土器（1/4・1/3）……102
Fig.86 SX1213・1214・1270・1272・1275 出土土器（1/4・1/3）……103
Fig.87 SX1276・1277・1280 出土土器（1/4・1/5）……104
Fig.88 SD1088・1119・1124・1139・1184・1206 土層（1/40）……105
Fig.89 SD1181（1/50・1/40）……106
Fig.90 各溝出土土器①（1/4）……107
Fig.91 各溝出土土器②（1/4）……108
Fig.92 各溝出土土器③（1/4）……109
Fig.93 SD1278出土土器（1/4）……110
Fig.94 SX1156 出土土器（1/4・1/3）……115
Fig.95 SX1186 検出状況（1/100）……116
Fig.96 SX1186 出土土器①（1/4）……117
Fig.97 SX1186 出土土器②（1/4）……118
Fig.98 SX1186 出土土器③（1/4）……119
Fig.99 SX1186 出土土器④（1/4）……120
Fig.100 SX1186 出土土器⑤（1/4・1/2）……121
Fig.101 SX1186 出土土器⑥（1/4）……122
Fig.102 SX1186 出土土器⑦（1/4）……123
Fig.103 SX1186 出土土器⑧（1/4）……124
Fig.104 SX1186 出土土器⑨（1/4）……125

Fig.105 SX1156・1186・1130・1228・1231 出土石器 (1/3・1/1・1/4) …126
Fig.106 土坑 1 (1/30) ……128
Fig.107 土坑 2 (1/30) ……129
Fig.108 土坑 3 (1/30) ……130
Fig.109 土坑 4 (1/30) ……131
Fig.110 土坑 5 (1/30・1/40) ……132
Fig.111 SK1075・1079・1084・1085、SX1091 出土土器 (1/4) ……133
Fig.112 SK1112・1120 出土土器 (1/4) ……134
Fig.113 SK1147① 出土土器 (1/4) ……136
Fig.114 SK1147②・1150 出土土器 (1/4) ……137
Fig.115 SK1150 出土木製品 (1/3) ……138
Fig.116 各土坑出土土器 (1/4) ……139
Fig.117 SK1185 出土土器 (1/4) ……140
Fig.118 SK1075・1215・1216・1264 出土遺物 (1/4・1/3) ……141
Fig.119 各土坑出土石器・玉類 (1/3・1/1) ……142
Fig.120 SK1147・1264 出土木器 (1/4・1/5) ……143
Fig.121 南西側水田遺構検出状況 (1/200) ……145
Fig.122 SK1260 (1/30) ……146
Fig.123 各遺構出土土器 (1/4) ……147
Fig.124 柱穴出土土器① (1/4) ……148
Fig.125 柱穴出土土器② (1/4・1/3) ……149
Fig.126 柱穴出土柱・礎盤 (1/10) ……150
Fig.127 柱穴、遺構面出土石器 (1/3) ……150
Fig.128 杭列 SX1246・1247、遺構面出土木器 (1/5・1/12) ……151
Fig.129 包含層・遺構面出土土器 (1/4・1/1) ……152
Fig.130 各遺構出土石器・玉類 (1/1) ……153

第 9 次調査

Fig.131 下月限C遺跡調査区配置図 (1/2,000) ……170
Fig.132 第 1 区・第 2 区第 I 面遺構全体図 (1/200) ……172
Fig.133 第 1 区東壁土層図 (1/60) ……173
Fig.134 水田水口実測図 (1/80) ……174
Fig.135 各遺構出土土器 (1/3) ……175
Fig.136 第 1 区・第 2 区第 II 面遺構全体図 (1/200) ……176
Fig.137 各遺構出土土器 (1/3・1/4) ……177
Fig.138 SX1317 (1/40) ……177
Fig.139 SX1317 出土木器① (1/4) ……178
Fig.140 SX1317 出土木器② (1/3・1/4) ……179
Fig.141 第 1 区第 III 面遺構全体図 (1/300) ……180
Fig.142 各遺構出土土器 (1/4) ……181
Fig.143 各遺構出土木器 (1/3・1/4) ……181
Fig.144 各遺構出土石器 (1/3) ……181
Fig.145 第 1 区第 IV 面・第 2 区第 III 面遺構全体図 (1/300) ……182
Fig.146 SX1349 (1/60) ……183
Fig.147 第 2 区北壁土層 (1/60) ……184
Fig.148 第 3 区第 I 面遺構全体図 (1/200) ……185
Fig.149 第 3 区第 I 面土層 (1/60) ……186
Fig.150 第 3 区第 II 面遺構全体図・畦断面図 (1/200・1/40) ……187
Fig.151 水田畔下敷き (1/40) ……188
Fig.152 各遺構出土土器・玉類 (1/1・1/3・1/4) ……189
Fig.153 各遺構出土木器 (1/4・1/6) ……189
Fig.154 第 3 区第 III 面遺構全体図 (1/200) ……191
Fig.155 北壁土層 (1/60) ……192
Fig.156 各遺構出土土器 (1/3・1/4) ……194
第 1 図 席田郡の条里地割（南部は除く）……折り込み
第 2 図 御笠川下流の旧村名……折り込み
第 3 図 御笠川下流域の小字名の位置……折り込み
第 4 図 小字名の分類……折り込み
第 5 図 観世音寺の寺田・係争地と小字名との関係……折り込み
第 6 図 席田郡の条里地割（南部は除く）……255
第 7 図 憶測御笠川下流域の流路 ……256
Fig.157 第 4 ～ 9 次中世遺構面 (1/1,500) ……259
Fig.158 第 4 ～ 9 次古代遺構面 (1/1,500) ……260
Fig.159 第 4 ～ 9 次古墳時代後期から古代前期遺構面(1/1,500) …261
Fig.160 第 4 ～ 9 次弥生時代前期から古墳時代前期構面(1/1,500) 262
Fig.161 第 6 ～ 8 次調査出土墨書土器 (1/4) ……263
Fig.162 第 6 ～ 8 次調査出土祭祀木器と木簡 (1/8) ……264

表　目　次

Tab.1 下月限C遺跡第 1 次～第 9 次調査概要 ……3
Tab.2 第 I 面遺物観察表……33
Tab.3 第 III 面掘立柱建物一覧表……75
Tab.4 第 III 面遺物観察表 ……153
Tab.5 第 9 次調査遺物観察表 ……195

本文編巻頭図版目次

図版 1 第 4 ～ 9 次調査古代遺構全景
図版 2 第 4 ～ 9 次調査古墳時代後期～古代前期遺構全景
図版 3 第 4 ～ 9 次調査弥生時代前期～古墳時代前期遺構全景

第Ⅵ章　自然科学分析目次

1　下月隈C遺跡から産出した昆虫化石群集について

表1　下月隈C遺跡から産出した昆虫化石 ……199
図版1　下月隈C遺跡から産出した昆虫化石の顕微鏡写真 ……201

2　第8次調査出土動物遺存体について

表1　出土動物遺存体一覧 ……202
図版　出土獣骨写真 ……202

3　第8次調査の珪藻分析・花粉分析

表1　(1)～(5) 珪藻分析結果 ……205
表2　花粉分析結果 ……212
表3　単体種実の同定結果 ……217
表4　土壌試料の種実分析結果 ……218
図1　主要珪藻化石群集 ……210
図2　各遺構における主要花粉化石群集 ……213
図版1　珪藻化石 ……227
図版2　花粉化石 ……228
図版3　種実遺体 (1) ……229
図版4　種実遺体 (2) ……230
図版6　植物遺体組織光学顕微鏡写真 ……248

4　放射性炭素年代測定

表1　測定試料及び処理 ……232
表2　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果 ……233
図1　①～④暦年較正結果 ……233

5　第8次調査出土木材の樹種

表1　第Ⅱ面柱材・礎板の遺構別種類構成 ……240
表2　第Ⅲ面木製品の種類構成 ……241
表3　第Ⅱ面木製品の器種別種類構成 ……242
表4　第Ⅰ面木製品の器種別種類構成 ……243
表5　自然木・杭の層位別種類構成 ……243
図版1　出土材・木材組織光学顕微鏡写真1 ……244
図版2　出土材・木材組織光学顕微鏡写真2 ……245
図版3　出土材・木材組織光学顕微鏡写真3 ……246
図版4　出土材・木材組織光学顕微鏡写真4 ……247
図版5　出土材・木材組織光学顕微鏡写真5 ……248

図版編巻頭図版目次

図版1　調査地と福岡空港周辺（2006年撮影）
図版2　第8次調査第Ⅰ面全景
図版3　第8次調査第Ⅱ面全景
図版4　第8次調査第Ⅱ面北側
図版5　第8次調査第Ⅲ面全景
図版6　第8次調査第Ⅲ面北側
図版7　第8次調査第Ⅲ面南側
図版8　(1) 第9次調査第1・2区第Ⅰ面全景
　(2) 同 第1区第Ⅲ面全景
図版9　(1) 第Ⅰ面調査区北側水田（北から）
　(2) 同 SX1019 木製品出土状況
図版10　(1) 第Ⅱ面SD735（北東から）(2) 同 SD735（南西から）
図版11　(1) 第Ⅲ面SD818（北から）
　(2) SX1186 遺物出土状況（南から）
図版12　(1) 第Ⅲ面調査区中央部（北西から）
　(2) 同 掘立柱建物検出状況（南から）
　(3) 柱痕検出状況
図版13　(1) 第Ⅰ面出土木器 (2) 第Ⅲ面出土木器
図版14　(1) 第Ⅲ面出土柱・礎板 (2) 同 SD818 出土鉄斧
　(3) 同 各遺構出土玉類 (4) 同 水田面出土銅鏡
図版15　(1) SD735 出土人面土器 (2) SX1050 出土人形
　(3) SD735 出土遺物
図版16　SD735 出土墨書土器

遺構図版

PL1　1937年（昭和4年）の調査地と周辺
PL2　1947年（昭和22年）の調査地と周辺
PL3　1948年（昭和23年）の調査地と周辺
PL4　1960年（昭和35年）の調査地と周辺
PL5　1969年（昭和44年）の調査地と周辺
PL6　1993年（平成5年）の調査地と周辺
PL7　敢 第1面調査区南側水田（南東から）
　　柑 第1面調査区南側水田（南から）
PL8　敢 第1面調査区北側水田（北から）　柑 SX1034（北から）
PL9　敢 SD20（北西から）　柑 SD20（南東から）
PL10　敢 SD20 護岸杭列（北西から）
　　柑 SD20 内 SX0033（南西から）
PL11　敢 SD20-1 号土層（南から）
　　柑 SD20-2 号土層・SK1026（南から）
　　柩 SD20 内出土獣骨
PL12　敢 SD19、SX1034（北西から）
　　柑 SD19、SX1034（西から）
PL13　敢 杭列 SX0024（西から）
　　柑 水田 SS004 畔杭列（南東から）
　　柩 SS004 畔（西から）
PL14　敢 SK1001（南から）　柑 SK1006（北から）
　　柩 SK1007（北から）　棺 SK1009（南西から）
　　欅 SK1010（西から）　歓 SK1031（西から）
PL15　敢 SK1018（南東から）　柑 SK1025（北から）
PL16　敢 SX1019 畔、SD1027・1032（西から）
　　柑 SX1024 発掘状況（東から）
PL17　敢 SX1019、SD1027（東から）
　　柑 SX1019、SD1027（西から）
PL18　敢 SX1019 東側（北から）　柑 SX1019 西側（北から）
　　柩 SX1024 土層断面（西から）
　　棺 SX1019 木製品出土状況　歓 SX1019 木製品出土状況
PL19　敢 SD03・720-①出土土器
PL20　敢 SD20 出土土器-②出土土器
PL21　各遺構出土土器、SD20 出土石器・石製品
PL22　各遺構出土木製品①
PL23　各遺構出土木製品②
PL24　各遺構出土木製品③
PL25　敢 第II面北半全景（北から）　柑 第II面南半全景（北から）
PL26　敢 SD35、SD041 検出状況（南から）
　　柑 SD35 砂層除去後（南から）
PL27　敢 SD35 完掘状況（南から）
　　柑 SD35、SD041 完掘状況（南から）
PL28　敢 SD35 東側縁辺土層（南から）
　　柑 SD35 西側縁辺土層（南から）
　　柩 SD35 東側縁辺土層（南から）
PL29　敢 SX（畦畔修復）1040 検出状況（北から）
　　柑 SX1040 杭柵 近接
PL30　敢 SX（堰）1047 検出状況（北から）
　　柑 SX（堰）1047 水路検出状況（北西から）
PL31　敢 SX（堰）1047 全景（南から）
　　柑 SX（堰）1048 検出状況（南東から）
PL32　敢 SX（堰）1047 樹皮状検出（南から）
　　柑 SX（堰）1048 完掘（西から）
PL33　敢 SD35 遺物（曲物底板、杭）出土状況
　　柑 SD35 遺物（鍬）出土状況
PL34　敢 SD35、水路、SD1045 完掘状況（北西から）
　　柑 SX（水口）1050 検出状況（南から）
PL35　敢 SX（水口）1050 人形出土状況
　　柑 木器集中（調査区南端）
PL36　敢 SX（水口）1054、SX1070 発掘状況（北から）
　　柑 SX1054、SD1061（水路）全景（南から）
PL37　敢 SX（水口）1054 近接（北東から）
　　柑 SX（水口）1054 近接（南西から）
PL38　敢 SX1070 検出状況（西から）
　　柑 調査区北西部畦畔検出（北西から）
PL39　敢 SD35 出土墨書土器
PL40　敢 SD35 出土須恵器
PL41　敢 SD35、SX1047 出土遺物
PL42　敢 SD35、SX1047、SX1050 出土木器
PL43　第II面出土木器
PL44　第II面出土弥生時代遺物
PL45　敢 第II面調査区北側（北から）
　　柑 第II面調査区北側（北から）
PL46　敢 第II面調査区中央部遺構検出状況（北西から）
　　柑 第II面調査区南側遺構検出状況（南から）
PL47　敢 調査区北西部溝検出状況（北から）
　　柑 調査区北西側遺構検出状況（南から）
PL48　敢 SD35 西壁土層（東から）
　　柑 SD18・1210 西壁土層（北から）
　　柩 調査区北西側土層（東から）
PL49　敢 調査区中央建物群（北西から）
　　柑 SB248・1402（北東から）
PL50　敢 SB249（北から）　柑 SB250（西から）
　　柩 SB251（北から）　棺 SB252（西から）
　　欅 SB253（東から）　歓 SB254（北東から）
PL51　敢 SB260・1274（北から）　柑 SB259・1260（南から）
PL52　敢 SB255（東から）　柑 SB257（北から）
　　柩 SB258（北から）　棺 SB401（東から）
　　欅 SB259（東から）
PL53　敢 SB248 柱穴 SP181 柱根　柑 同 柱穴 SP184 礎板
　　柩 同 柱穴 SP183 礎板　棺 SB1249 柱穴 SP238 柱根
　　欅 SB251 柱穴 SP01 礎板　歓 同 柱穴 SP02 礎板
　　汗 同 SP03 礎板　漢 同 柱穴 SP04 礎板
PL54　敢 SB251 柱穴 SP05 礎板　柑 同 柱穴 SP06 礎板
　　柩 SB254 柱穴 SP871 礎板　棺 SB1255 柱穴 SP897 礎板
　　欅 SB258 柱穴 SP892 礎板　歓 SB1259 柱穴 SP885 柱根
　　汗 同 柱穴 SP885 柱根　漢 同 柱穴 SP08 礎板
PL55　敢 SB259 柱穴 SP13 礎板　柑 同 柱穴 SP247 柱根
　　柩 SB260 柱穴 SP10 礎板　棺 SB1274 柱穴 SP18 礎板
　　欅 同 柱穴 SP132 柱根　歓 SB1401 柱穴 SP318 柱根
　　汗 SB402 柱穴 SP595 柱根　漢 同 柱穴 SP598 柱根
PL56　敢 SB403 柱穴 SP728 柱根　柑 同 柱穴 SP730 柱根
　　柩 同 柱穴 SP734 柱根　棺 SB404 柱穴 SP742 柱根
　　欅 SB406 柱穴 SP1107 礎板　歓 SB408 柱穴 SP895 柱根
　　汗 SB409 柱穴 SP103 礎板　漢 同 柱穴 SP116 礎板
PL57　敢 SB410 柱穴 SP19 礎板　柑 同 柱穴礎板

(3) SB1411 柱穴 SP231 礎板 (4) 同 柱穴 SP669 礎板
(5) SB1414 柱穴 SP621 礎板 (6) SB1418 柱穴 SP670 柱根
(7) SB1421 柱穴 SP1161 柱根

PL.58 (1) SD818（北から） (2) SD818 完掘状況（南から）

PL.59 (1) SD818-11区 木器出土状況（南から）
(2) SD818-1号土層（南から）

PL.60 (1) SD818・1210 近景（南から）
(2) SD818 木器出土状況
(3) 同-10区遺物出土状況（東から）
(4) SD1210-2区 鉄斧出土状況

PL.61 (1) SD1119・1134・1135（南から）
(2) SD1119-3 区遺物出土状況（北から）
(3) SD1119-3 区遺物出土状況（北西から）
(4) SD1088（南西から） (5) SD1088 土層（南西から）

PL.62 (1) SD1124～1126（南東から） (2) SD1139（北西から）
(3) SD1181（西から）

PL.63 (1) SD818 北側内道構検出状況（南西から）
(2) SX1269 壁（南西から）

PL.64 (1) SX1269（南東から） (2) 同（南東から）

PL.65 (1) SX1263（南西から） (2) SX1263 完掘状況（南西から）

PL.66 (1) 調査区北西隅下層道構検出状況（北から）
(2) 北西隅完掘状況（南西から）

PL.67 (1) SX1263 土堤 (2) 同土堤下薫検出状況（西から）

PL.68 (1) SD818-2号土層（西から）
(2) SX1263 土層断面（西から）
(3) 同 木器出土状況（北西から）
(4) SX1267 杭列（北東から）

PL.69 (1) SX1186 土器群出土状況（北から）
(2) SX1186 出土状況（南から）

PL.70 (1) SX1156 土器群出土状況（北から） (2) 同（北から）

PL.71 (1) SX1188 土器出土状況（南から）
(2) 同 D・E群土器出土状況（西から）

PL.72 (1) SX1186-A群土器出土状況（西から）
(2) 同 床面出土状況（西から）
(3) 同 B群土器出土状況（西から）
(4) 同 B群下層土器出土状況（南西から）
(5) 同 B群床面出土状況（東北から）
(6) 同 B群床面出土状況（北東から）

PL.73 (1) SX1186 C群土器出土状況（西から）
(2) SX1186 C群土器出土状況（東から）
(3) 同 C群土器鉢出土状況
(4) 同 D群炭化物と遺物出土状況（北東から）
(5) 同 E群土器出土状況（西から）
(6) 同 E群土器集中部（北から）

PL.74 (1) SK1075（東から） (2) SK1079（西から）
(3) SK1084（南西から） (4) SK1112（西から）
(5) SK1085（西から） (6) 同 遺物出土状況

PL.75 (1) SK1120（東から） (2) 同 完掘（南東から）
(3) SK1146（北西から） (4) SK1150（北西から）
(5) SK1150 遺物出土状況

PL.76 (1) SK1147 下層遺物出土状況（南から）
(2) 同 檜出土状況（南から） (3) SK1152 土層（東から）
(4) SK1152 完掘（東から） (5) SK1157（東から）
(6) SK1177（西から）

PL.77 (1) SK1185（東から） (2) SK1185 土層（東から）
(3) SK1216（南東から）

PL.78 (1) SS1261（北西から） (2) SS1261 近景（南東から）

PL.79 (1) SX1246 杭列（南西から） (2) SX1247 杭列（南西から）

PL.80 (1) SK1264（北から） (2) SX1246 杭列断面（南から）
(3) SS1261 銅鏃出土状況

PL.81 掘立柱建物、SD818-① 出土土器

PL.82 SD818-② 出土土器

PL.83 SD818-③・1210・1201 出土土器

PL.84 各溝出土土器

PL.85 (1) 各溝出土土器 (2) SX1156・1186-① 出土土器

PL.86 SX1186-② 出土土器

PL.87 SX1186-③ 出土土器

PL.88 SX1186-④ 出土土器

PL.89 SX1186-⑤ 出土土器

PL.90 各土坑出土土器

PL.91 各道構出土土器

PL.92 柱穴、道構面、包含層出土土器

PL.93 各溝出土石器

PL.94 各道構出土石器

PL.95 (1) 各道構出土石器 (2) 各道構出土鉄器、青銅器
(3) 各道構出土玉類

PL.96 掘立柱建物出土柱・礎板-①

PL.97 掘立柱建物出土柱・礎板-②

PL.98 掘立柱建物出土柱・礎板-③

PL.99 掘立柱建物出土柱・礎板-④、SD818 出土木器

PL.100 各道構出土木器

PL.101 各道構出土木器、出土柱・礎板

PL.102 道構面出土木器、柱穴出土柱・礎板

第9次調査

PL.103 (1) 第1区第Ⅰ面調査区西側水田（北から）
(2) 同 SS1301 水田中央部（北から）

PL.104 (1) SS1301 東側（北から） (2) SS1301 西側（北東から）

PL.105 (1) 第1区第Ⅱ面 SX1317（南から）
(2) SX1317 木器出土状況

PL.106 (1) 第1区第Ⅲ面北東側（東から）
(2) SX1343・1335（南東から）

PL.107 (1) (1) 第1区第Ⅳ面全景（北から）
(2) (1) 第1区第Ⅳ面全景（南西から）

PL.108 (1) SX1349・1351（東から）
(2) SX1349 矢板西側状況（南西から）

PL.109 (1) 第2区第Ⅰ面調査区全景（東から）
(2) 同 第Ⅱ面全景（西から） (3) 同 第Ⅲ面全景（西から）

PL.110 (1) 第3区第Ⅰ面調査区全景（東から）
(2) 同 調査区東側水田畔検出状況（南から）

PL.111 (1) 第3区第Ⅱ面調査区全景（東から）
(2) 同 調査区東半部（東から）

PL.112 (1) 第3区第Ⅱ面調査区西側（西から）
(2) 同 SS1311 水田と SS1311 畔（南から）

PL.113 (1) SS1311 畔下下敷き（南西から）
(1) 同 木製品出土状況

PL.114 (1) 第3区第Ⅲ面全景（東から）
(2) 第3区第Ⅲ面全景（西から）

PL.115 (1) 第3区第Ⅲ面 SD1314（東から）
(2) 同 SD1316（南西から）

PL.116 (1) SD1314 北壁土層（南から）
(2) 同 中央部土器出土状況

PL.117 第1区・第3区出土土器

PL.118 (1) 第3区出土土器・ガラス玉
(2) 第1区第Ⅱ面 SX1317 出土木器

PL.119 第1区第Ⅱ面 SX1317、道構面出土木器

PL.120 第3区第Ⅲ面、第3区出土木器

第Ⅰ章　はじめに

1．調査に至る経過

1994年（平成６年）３月31日付（四港建博第159号）で、運輸省第四港湾建設局博多港工事事務所長（現・国土交通省九州地方整備局博多港湾・空港整備事務所）より、福岡市博多区月隈４丁目７地内における月隈調節池建設事業の埋蔵文化財事前審査願が福岡市教育委員会に提出された。申請地周辺は御笠川東側の低地部の、水害を受けやすい地域であったため、その対策事業の一環として計画されたものであった。

申請地は福岡空港南側に南隣する約 8万㎡の空地で、埋蔵文化財包蔵地域の「下月隈C遺跡」として登録されている地域であり、過去に行われた周辺の調査では、弥生時代から中世にかけての集落跡や水田跡などが検出されているので、申請地においても遺跡の存在が予想された。このことから埋蔵文化財課としては、申請地において試掘調査を実施した。試掘調査は1994年５月19日～６月17日にかけて申請地全域に63か所の試掘坑を設定し実施した。試掘調査では、申請地全域に重層する弥生時代から中世にかけての遺構や遺物を検出した。

試掘結果では申請地全域に遺構が存在し、開発工事によってそれらの遺構が破壊されることが予想されたので、試掘調査の結果を平成６年７月６日付（福市教埋第52号）文書で依頼者に回答し、今後の取り扱いについて協議を行った。協議の結果、月隈調節池建設工事に先立って記録保存の為の埋蔵文化財調査を実施することとし、第四港湾建設局長（現・九州整備局長）を委託者、福岡市長を受託者とする契約が締結された。発掘調査、資料整理及び発掘調査報告書作成費用については第四港湾建設局が全額負担し、調査を福岡市教育委員会が実施することとなった。当初の事業計画では、事業地全面を対象とした発掘調査を、平成10年度から４年計画で実施することとなっていた。しかし初年度（平成10年度）の調査により遺構濃度が試掘調査で想定されていた以上に高いことが判明したため、原局側と協議を行い、調査計画を５年間に変更した。第５年度を終了した時点で、調査事務所部分が残っていたのと、新たに調節池に伴う通水管部分の調査が必要となった為、再度原局側と調査についての協議を行い、平成15年10月迄調査を行うこととなった。

本書は第５年度（平成14年度調査、平成16年度から18年度整理）に実施した第８次調査の報告である。

調査・整理作業に当たっては九州地方整備局の皆様をはじめ、地元の皆様にご理解とご協力を得ました。この場を借りてお礼申し上げます。

2．調査の組織

紙面上の都合から、第８次調査の調査組織について述べる。下月隈C遺跡第１次～第９次の調査概要についてはTab.1のとおりである。

(1)　委　託　者

運輸省第四港湾建設局博多港湾空港工事事務所
国土交通省九州地方整備局博多港湾空港工事事務所

《平成６年度》	第四港湾建設局長	石田省三	博多港工事事務所長	鹿籠雅純
《平成12年度》	第四港湾建設局長	江頭和彦	博多港湾空港工事事務所長	古市正彦
《平成14年度》	九州地方整備局長	渡辺茂樹	博多港湾空港工事事務所長	角　浩美

《平成15年度》	九州地方整備局長	岡山和生	博多港湾・空港整備事務所長	酒井洋一
《平成16年度》	九州地方整備局長	岡山和生	博多港湾・空港整備事務所長	元野一生
《平成17年度》	九州地方整備局長	宮田年耕	博多港湾・空港整備事務所長	元野一生
《平成18年度》	九州地方整備局長	小原恒平	博多港湾・空港整備事務所長	杉野浩茂

(2) 調査主体

福岡市教育委員会

《平成6年度》……試掘調査

	教育長	尾花　剛
	文化財部長	後藤　直
	埋蔵文化財課長	折尾　学
事前審査	主任文化財主事	濱石哲也
試掘調査	文化財主事	長家　伸
経理担当	事務吏員	内野保基

《平成14年度》……発掘調査

	教育長	生田征生
	文化財部長	堺　徹
	埋蔵文化財課長	山崎純男
	調査第2係長	力武卓治
調査担当	主任文化財主事	山崎龍雄
	文化財主事	荒牧宏行
整理担当	文化財主事	瀧本正志
経理担当	文化財整備課	中岳　圭

《平成16年度》……整理作業

	教育長	植木とみ子
	文化財部長	山崎純男
	埋蔵文化財課長	山口譲治
	調査第2係長	池崎譲二
整理担当	主任文化財主事	山崎龍雄
	文化財主事	荒牧宏行
経理担当	文化財整備課	鈴木由喜

《平成17年度》……整理作業

	教育長	植木とみ子
	文化財部長	山崎純男
	埋蔵文化財課長	山口譲治
	調査第2係長	池崎譲二
整理担当	調査第1係長	山崎龍雄
	主任文化財主事	荒牧宏行
経理担当	文化財整備課	鳥越由紀子

《平成18年度》……整理作業

	教　育　長	植 木 とみ子
	文 化 財 部 長	山 崎 純 男
	埋蔵文化財第１課長	山 口 譲 治
	調 査 係 長	山 崎 龍 雄
整理担当	調 査 係 長	山 崎 龍 雄
	主任文化財主事	荒 牧 宏 行
経理担当	文 化 財管理課	鳥 越 由紀子

《調査指導》　日野尚志（佐賀大学名誉教授）

《調査・整理協力者》

調査・整理補助　上方高弘、河野麻耶（慶応大学大学院）、境 聡子、瀬戸啓治、所 一男（東京大学大学院）、藤野雅基、相原聡子、濱石正子、濱田美紀、大石奈美子、大賀順子、木薛直子、小金丸昌代、清永啓子、澤 玲子、西島奈美、平ノ内 武、平山景将、松尾信子、増永好美、宮坂環、村上信子、持原良子、本村幸代

調査協力　荒牧テルオ、揚野 浩、井出 昇、井上一雄、井上利弘、井上英子、井上佳子、岩崎良隆、植松雅子、内山和子、榎田信一、大賀 一、大橋由美子、大村順一、岡部安正、沖 正芳、奥田弘子、小野千佳、甲斐康完、兼田ミヤ子、河野一一、北原由紀子、久保登喜子、黒瀬千鶴、小島キサエ、後藤クミ子、酒井次憲、坂本久幸、里崎直子、佐藤アイ子、真田弘二、渋谷留雄、関 哲也、高手興志子、武田潤子、田中茂孝、田上智雄、谷 辰巳、知花繁代、堤 正子、豊丸秀二、富田輝子、永田八重子、二宮白人、野口リュウ子、野崎賢治、野村道夫、畠中千恵美、濱フミコ、原 勝輝、廣永隆子、別府俊美、松井一美、松永七朗、松葉祐輝、丸山勝江、宗像正勝、本山 啓、森下初美、安高邦晴、安高精一、安成恵美、山下嘉人、吉野悌二

Tab.1　下月隈C遺跡第１次～第９次調査概要

調査次数	調査番号	調査地番	調査面積	調査原因	調査期間	調査担当	報告書
1次	9404	福岡市博多区下月隈地内	885㎡	道路拡張	1994.4.8～1994.5.27	白井克也	市報第457集
2次	9515	博多区大字上月隈地内	8,500㎡	空港湾近整備	1995.5.5～1996.3.21	宮井善朗	市報第566集
3次	9610	博多区大字上月隈地内	3,575㎡	空港湾近整備	1996.5.7～1996.10.18	久住猛雄	〃
4次	9826	博多区月隈４丁目	6,500㎡	月隈調節池建設	1998.9.2～1999.3.25	池本正志・田上勇一郎	市報第750集
5次	9922	〃　〃	10,000㎡	〃	1999.4.8～2000.3.25	池本・山崎龍雄	市報第795集
6次	0018	〃　〃	10,710㎡	〃	2000.4.11～2001.3.30	山崎・上角智希	市報第839集
7次	0115	〃　〃	9,139㎡	〃	2001.4.1～2002.3.29	山崎・荒牧宏行	市報第881集
8次	0219	〃　〃	7,400㎡	〃	2002.4.1～2003.3.31	山崎・荒牧	市報第932集
9次	0327	〃　〃	2,000㎡	〃	2003.4.1～2003.10.31	山崎	市報第932集

Fig.1　下月隈C遺跡の位置（1/100,000）

第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的環境

１．遺跡の位置と立地（Fig.1）

下月隈Ｃ遺跡は、福岡市の中央部を北流して博多湾に注ぐ、那珂川・御笠川の沖積作用によって形成された福岡平野の南東部に位置する。この平野は北東側を糟屋郡境となる席田・志免丘陵（標高50～200m）で限定され、西から南側を油山（標高569.4m）と片縄山（標高293.0m）とそれから北側に派生する低平な丘陵・台地に限定される。市内の位置的環境としては中心部の天神より約６km離れた位置にある。遺跡は福岡空港の南側に隣接する場所にあり、御笠川の東岸の沖積地に立地する。現地の標高は10m前後を測る。遺跡の東側は席田丘陵となる。御笠川西側の板付地区は春日市から続く低平な丘陵部である。

２．遺跡の歴史的環境（Fig.2～4）

下月隈Ｃ遺跡周辺の歴史的環境について述べる。周辺には席田丘陵や西側の板付の低丘陵を中心に弥生時代前期から古代・中世に亘る各時期の遺跡が分布しているが、それらについては第５次調査報告書などで既に詳細に記述されているので、本章では遺跡の継続時期に関わる、遺跡周辺の特に御笠川東岸席田地区の中世に至る迄の概要について述べる。

旧石器・縄文時代については、御笠川東岸部では今のところ明確な遺跡は確認されていなが、西岸部では諸岡遺跡や板付遺跡、那珂遺跡群などで確認されている。ただ本調査区で縄文時代早期早水台式土器が出土しているので、周囲に遺跡が存在する可能性がある。遺跡が明瞭に確認されるのは、縄文時代晩期末～弥生時代前期頃からである。この頃の遺跡としては、低地部に雀居遺跡、下月隈Ｃ遺跡がある。席田丘陵部には甕棺墓や土坑墓・木棺墓などからなる墳墓遺跡として宝満尾遺跡、天神森遺跡、金隈遺跡（国史跡）、上月隈遺跡、席田青木遺跡があり、集落遺跡としては大型建物などを検出した久保園遺跡、銅鐸鋳型が出土した赤穂ノ浦遺跡など弥生時代前期から後期にかけての遺跡が点在している。特に、遺跡東側丘陵部の上月隈遺跡は、道路建設の調査で甕棺墓群が見つかり、中期後半の甕棺墓内には細形銅剣１口とガラス製管玉20数点などが副葬されていた。また平成13年度に調査された上月隈Ｂ遺跡では弥生時代前期後半期の貯蔵穴群や柱穴などが検出されている。

古墳時代には首長墓の前方後円墳は存在しないが、丘陵部には直径34m、高さ９mを測る墳丘を持ち、全長11.2mの長大な横穴式石室を持つ後期円墳の今里不動古墳（市史跡）や、持田浦古墳群、堤ケ浦古墳群など後期の大規模な群集墳が分布している。集落遺跡としては御笠川東岸沿いの低地部に立花寺Ｂ遺跡があり、微高地上に５～６世紀にかけての竪穴住居群が30棟確認されている。この遺跡からは市内でも出土例が少ない子持ち勾玉が５点出土している。

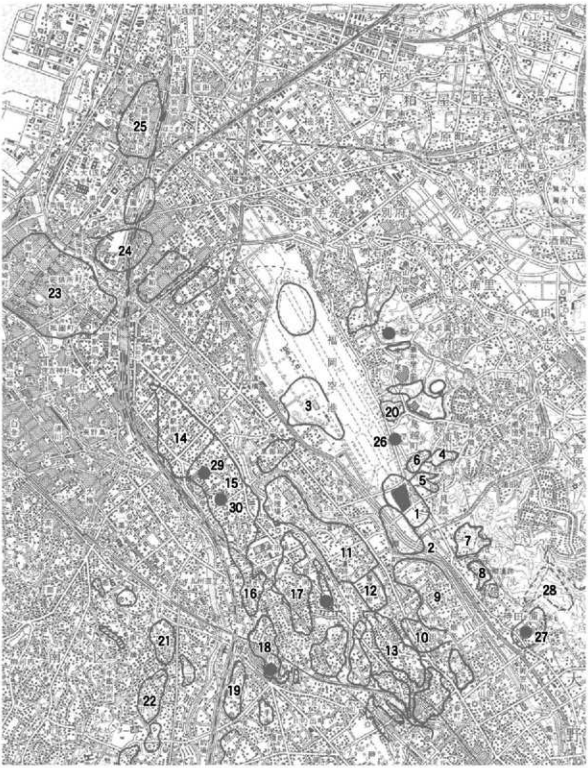
古代律令期は席田郡となる。席田郡は『和名類聚抄』によれば石田・大国・新居（にひい）の３郷からなる郡であり、那珂郡から分離した郡であると言われる。郡の規模としては小さく、同名の郡は他に美濃国に１か所存在する。郡内の西側には大宰府水城東門に続く西海道の官道が通り、郡内には『延喜式兵部省』によると久爾駅が置かれている。久爾駅には伝馬十疋が置かれている。久爾駅の所在地については確定していないが、駅家については大国郷にあったといわれている。大国郷は現在の席田村の月隈あたりと推定されている。鎌倉時代中期の説話集『古今著門集』（1254年）によれば、平安時代の寛治８年（1094）に太宰府権帥に任じられて下向中の源経信卿が、８月15日夜に筑前国庭田驛について観月の宴を開いた時に、館の前の大きな槻の木があり枝葉が生い茂げり観月の邪魔に

なっていたので、人を集めて木を切り払わせたとあり、そこから月隈の地名が起こったといわれている。この蓬田驛は久爾駅のことと考えられる。『平安遺文158・160・162』の中に貞観10年席田郡にある太宰府観世音寺一切経料田中で故高子内親王寄進の博多荘が混在しているとして観世音寺と内蔵寮との間に相論がおこっているとして係争地を太宰府田文所は仁寿2年の席田郡班図について検田している。このことから席田郡が中央権門と何らかの関わりがあったことが考えられる。該期の遺跡としては、周辺に立花寺B遺跡や井相田遺跡（大野城市の仲島遺跡）、立花寺遺跡（平成12・13年度の調査では飛鳥～奈良時代の柵や大型建物などが検出されている）、雀居遺跡などが存在する。官道跡と思われる道路状遺構が御笠川西側の高畑遺跡、那珂君休遺跡などで確認されている。

中世の席田は南北朝時代～室町期には席田荘となる。席田荘は太宰府安楽寺の所領である。東側の志免町には吉原荘がある。室町から戦国時代は守護の少弐氏が衰退して後、福岡地方は一部博多の沖の濱部が大友氏で、その他の地域は大内氏の支配下になり、席田は大内氏の支配下に入る。天文20年大内義隆が陶晴賢によって滅ぼされた後は大友氏の支配に入る。席田郡内には現在2か所の山城の存在が知られている。1か所は『筑前国続風土記』にある稲居塚城、1か所は席田青木遺跡で検出された山城である。立花氏の旧家臣筥崎座主城戸清種が記した『豊前覚書』によれば、「天正八年、蓬田郡月隈村一貴古野山に、立花城主の立花道雪が自ら出向いて、切寄せを造る」とある。これは月隈地区が、古来の官道沿いの交通の要衝であったため、博多や立花城防衛の備えとして当地に出城が築かれたことが考えられる。

参考文献
① 福岡県地名大辞典　1988年　角川書店
② 立花寺B遺跡2　福岡市埋蔵文化財調査報告書第702集　2002
③ 立花寺5　福岡市埋蔵文化財調査報告書第779集　2003
④ 上月隈B遺跡　福岡市埋蔵文化財調査報告書第742集　2003

調査区上空から太宰府市方面を見る（北西から）



1．下月隈Ｃ遺跡　2．立花寺Ｂ遺跡　3．雀居遺跡　4．下月隈Ａ遺跡　5．下月隈Ｂ遺跡
6．天神森遺跡　7．立花寺遺跡　8．金隈遺跡　9．仲島遺跡　10．井相田遺跡
11．板付遺跡　12．高畑遺跡　13．麦野Ａ遺跡　14．比恵遺跡　15．那珂遺跡
16．五十川遺跡　17．諸岡Ａ遺跡　18．諸岡Ｂ遺跡　19．横手遺跡　20．宝満尾遺跡
21．大橋Ｅ遺跡　22．三宅Ｂ遺跡　23．博多遺跡　24．堅粕遺跡　25．福崎遺跡
26．鳥越遺跡　27．今里不動古墳　28．持田ヶ浦古墳群　29．剣塚古墳　30．那珂八幡古墳

Fig.2　下月隈Ｃ遺跡周辺の遺跡（1/50,000）

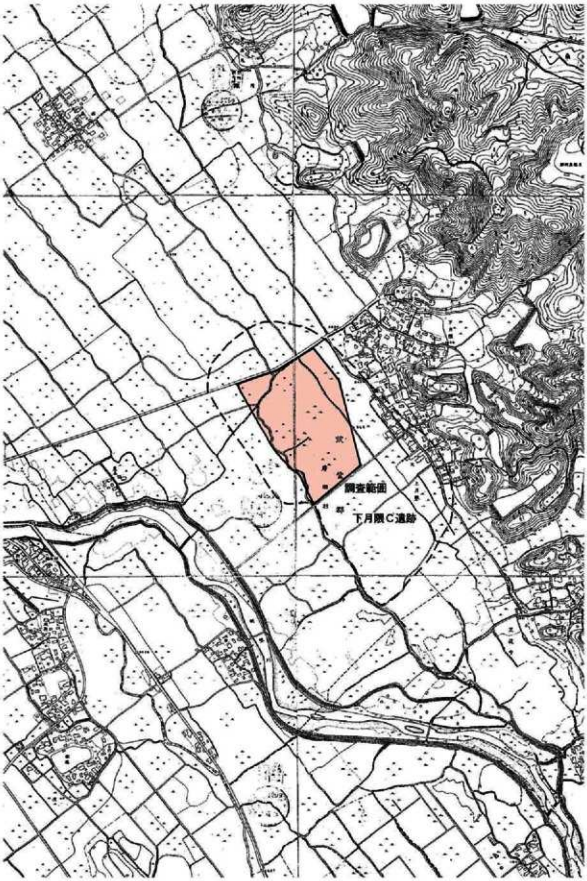


Fig.3　下月隈C遺跡の旧地形図（大正末～昭和初め頃 1/10,000）

第Ⅲ章　調査の記録

1．調査の概要 (Fig.5)

第８次調査区は調節池建設予定地の東側部分で、第７次調査区の南側に位置する細長い調査区である。調査は第７次調査と同様に第Ⅰ面、古代末から中世（平安時代後期～鎌倉時代）、第Ⅱ面、古墳時代後期から古代前半、第Ⅲ面、弥生時代から古墳時代前半の３面の調査を行った。

第Ⅰ面までの掘削は調査区北側に掘削排土を置くと、空港周辺の高度規制の関係から、重機による掘削と排土の運搬が昼間に出来ないことから、予定地の南西隅、第４次調査区部分を排土置き場とした。ただその後の調査による排土は調査区北側部分に置くこととした。第Ⅰ面までの表土除去と調査終了後の埋め戻しについては、昨年同様業者に委託して行った。また全体の遺構図や写真撮影は時間的な都合からセスナ機による空中写真測量を業者に委託して行った。

調査区の基準は第４次調査で設定した基準に準じて、申請地の長軸に沿って東西南北10ｍの方眼グリッドを組み、東西は東からＡ～Ｚ迄、南北は南から１～32区迄グリッド番号を設定し、10ｍグリッドの番号は右下隅の杭番号とした。第８次調査は杭番号としてⅠ区東西はＣ～Ｈ、南北は７～22ラインの範囲である。

1）調査日誌抄

第８次調査は平成14（2002）年４月１日に着手し、
平成15（2003）年３月31日に終了した。
以下調査の経緯を述べる。

2002年

５月　９日から今年度の現場での準備作業、草刈りなど安全衛生管理作業や、試掘調査などを開始。
21日、重機によるⅠ面表土掘削開始。

６月　３日に表土掘削終了。５日作業員とユンボーを投入し、遺構の検出と、表土の撹り残しを除去する。全面を覆う砂の下に水田面を検出したが、残りはあまり良くない。東側では南北を貫流する、第７次から続く水路を検出した。
10日梅雨入り
19～20日大雨、現場がプールになり、水揚げで作業が数日中断する。SD720 の掘下げを行う。

７月　第Ⅰ面の調査。梅雨時ではあるが、比較的天候に恵まれ、作業は順調に進む。
19日梅雨明け。暑い日々が続く。
24日第Ⅰ面遺構の空中写真測量を行う。その後、実測作業と補足調査を行う。

８月　６日から重機で第Ⅱ面の遺構面検出作業に入る。
27日、作業員を導入し、遺構検出作業を開始する。

９月　第Ⅱ面、古墳時代後期～古代の水田面遺構検出作業。
北側には第７次から続く巨河川（SD735）がある。水田は主に北側で検出された。

第Ⅰ面　溝と水田掘削風景（南東から）

第Ⅱ面　SD735 掘削風景

10月　第Ⅱ面の調査を行う。
　　16日に第Ⅱ面空中写真測量。その後実測と補足調査。
　　23日、今日から第Ⅲ面の表土除去作業を開始。
11月　12日で重機による表土除去が終了し、第Ⅲ面の調査を人力で開始する。北側台地部で、弥生時代前期から後期のピットや土坑を多数検出する。
12月　第Ⅲ面、弥生時代から古墳時代前期の調査。北東隅の第7次から続く SD818 溝の調査を行う。

2003年
1月　第Ⅲ面の遺構掘下げ、実測などの調査を行う。
　　31日に第Ⅲ面の空中写真測量を行う。
2月　撮影後、第Ⅲ面の作業を引き続き行う。建物柱穴には、柱が良好に残る。
3月　第Ⅲ面の補足実測とだめ押し調査。
　　19日で現場作業を終え、埋め戻し作業を開始する。
　　31日　埋め戻し終了、今年度作業全て終了する。

第Ⅲ面　台地部作業風景

多数訪ずれた見学者の状況

第8次調査作業員一同

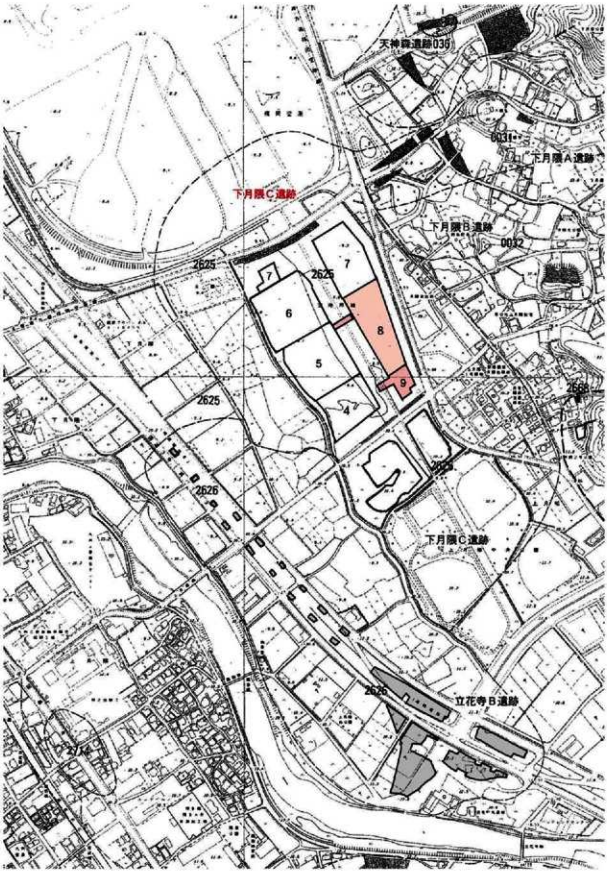


Fig.4　下月隈C遺跡調査地点位置図（1/6,000）

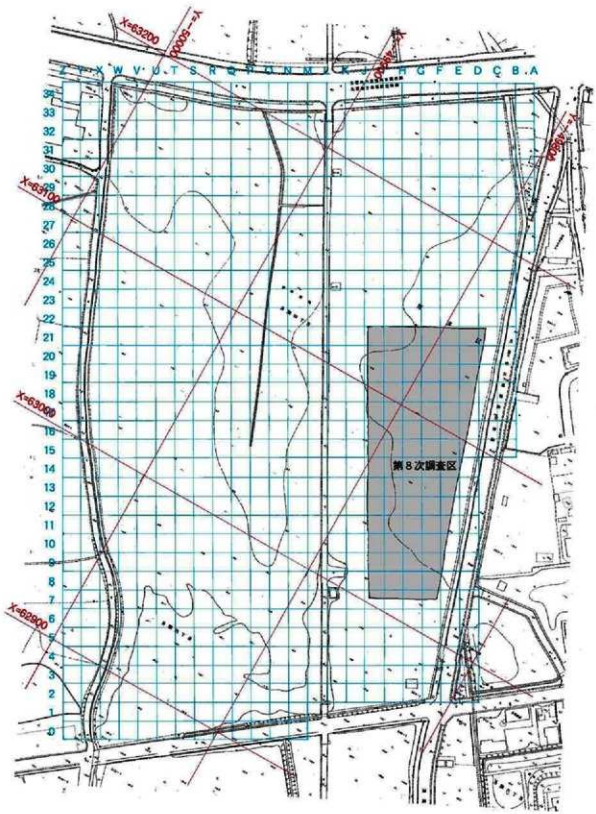


Fig.5　下月隈Ｃ遺跡調査区配置図（1/2,000）

2．第Ⅰ面の調査

1）調査の概要

第Ⅰ面は古代末から中世後期の時期である。遺構面は地表下－0.7～－1.1mの深さ、標高8.15～8.6mの高さで検出した。遺構面の高さは調査区の東から南側が高く、北西側が深くなる。東から南側はもともと地形的に高かったようである。遺構の残りは南東側が不良で、主に西側から北側にかけて検出された。検出した遺構は溝状遺構、土坑、水田面、堰跡などである。北から西側には厚い洪水砂が堆積していたが、南側では砂の堆積は薄かった。

2）遺構と遺物

① 溝状遺構（SD）

SD703

調査区北東側、SD720の東に並行する。第７次調査区から続く近世から近代の水路である。調査区北側で南東方向から別の水路が合流し、合流部にはコンクリートで作られた堰があった。昭和初期の地図には認められるので、それ以前には存在していたものである。条里基準に沿うSD720と並行するので、近代までその基準を踏襲していたのであろう。

出土遺物（Fig.8、PL.19）弥生土器から近代までの遺物を含む。土器・陶磁器以外に土管や煉瓦、鉄鎌、寛永通宝、昭和24年鋳造の１円などが出土している。

１・２は肥前磁器碗底部２/３片で復元底径4.2cmを測る。外面に菊花、高台内に文様が入る。18世紀代のもの。２は白磁の小杯で底径4.2cmを測る。外面鎬が入る。肥前磁器Ⅱ－１期17世紀中頃のもの。３～８は肥前陶器。３・４は碗。３は小碗で底径3.5cmを測る。４は底径4.1cmを測る。高台部はケズリで、いずれも外面に黒褐色の鉄釉をかけるが、３は畳付、４は外底から高台部が露胎。４は肥前陶器のⅣ期、17世紀末～18世紀のものか。５～７は皿。５・６はいずれも見込みに砂目痕がある。高台部はケズリ、露胎である。底径は4.4cm・3.5cmを測る。肥前陶器Ⅱ期で17世紀前半のもの。７は底部

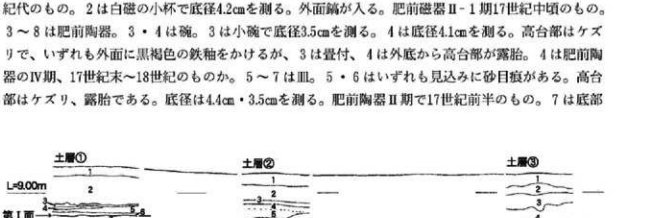


Fig.6 第Ⅰ面西壁土層（1/40）

が小さく、復元底径4.3cmを測る。灰オリーブ釉がかかり、細かい貫入が入る、見込みは蛇の目状に釉を掻き取る。肥前陶器Ⅴ期のものか。8は体部が筒状を呈す火入れ。底径5.3cmを測る。高台はケズリで露胎。体部は不透明の灰色釉がかかる。9・10は灯火具。9は灯明皿の受皿。復元底径5.3cmを測る。上皿部は剥離する。内面から外面一部に外面鉄釉と、内面薄灰釉がかかり、体部下半から外底部は露胎。10はヒョウソク。受け皿部に芯立てを持つ。底径は4.0cmを測り、外底は回転糸切り。光沢を持つ薄い暗灰黄色釉がかかるが、外底部は露胎。11は白磁碗底部1/2片で底径6.6cmを測る。内面に灰白色の半透明釉がかかり、表面はわずかに発泡するが、見込みは蛇の目状に釉を掻き取る。外面ケズリで露胎。Ⅳ類かⅥ類。12は青磁碗1/4片。復元底径6.0cm、器高5.9cmを測る。全面緑灰色釉が厚めにかかるが、高台内面は輪状に釉を掻き取るが、鉄分で発色する。見込みには印花がある。15～16世紀のもの。13は土師器の坏1/6片。復元口径15.6cm、器高2.7cmを測る。外底回転糸切り、調整は回転ヨコナデ。14～16は瓦器椀。いずれも復元で底径7.2cm、7.5cmを測る。いずれも高台は貼り付け、14は調整ナデ、15はナデで外面指押さえ痕が残る。胎土はいずれも精良で、15は金雲母を含む。17は須恵器の坏底部片で底径8.4cmを測る。底部はヘラ切り後ナデ、調整な回転ナデ。外底部には「許」？と思われる墨書がある。8世紀代のものか。18は弥生土器の鉢、口縁から底部小片で復元口径15.4cm、器高13.5cmを測る。体部に三角突帯を持ち、調整は、体部外面突帯下はハケ目、上半から内面はナデ。内底部には指押さえ痕が残る。

M1は銅銭の寛永通宝、背面は無文である。直径2.3cmを測る。古寛永（1636～1659年）のものである。M2は昭和24年の1円硬貨。直径は1.9cmを測る。

SD719（Fig.7、PL.12）

SD720の西側で検出した浅い流路、SD720西岸から水を分岐して流し、第7区で再び合流させる機能を持つ。溝幅は6mと広いわりには、深さは0.1～0.2mと浅い。この溝の東側には、水の流れを調節したと思われる杭列SX1033がある。

出土遺物（Fig.8） 中世の土師器、瓦器、白磁の細片が少量出土している。

16は瓦器椀。復元底径6.8cmを測る。高台部は貼付け。調整は摩滅するが、胎土は精良で、金雲母を含む。

SD720（Fig.9、PL.9～12）

第7次調査区から続く溝で、調査区中央部をやや東側寄りに流れ、E-10区東壁で、調査区外になる。この溝は第7次調査区と合わせて確認長225mを測り、西に湾曲するものの南北に貫流し、ほぼ南北の条里坪境に沿うものである。規模は溝幅4～8m、深さは南東壁で0.5m（標高7.8m）、北側で0.6m（標高7.7m）を測り、北側にかけて若干深くなる。埋土は粗砂を中心とする。この溝の両側には第7次調査と同様に護岸用の杭が密に打ち込まれているが、特に東側に杭が密に打ち込まれている。西側岸と東側には3基の土坑が上部から切り込んでいる。また溝の西側には東西杭12・13ラインと、18ラインに東西方向の条里方向に沿う2条の畔がある。畔間距離は56mを測る。溝の南側底面には、遺存状況は不良であるが、堰と思われる溝を横断して打ち込まれた杭列が2条SX1011、SX1033が確認された。両堰間距離は14mを測る。また溝北部で、西岸から水を分岐して流す水路と思われる遺構SD719を検出した。この遺構は北に流れて、第7次調査区のSD720に再び合流する。

出土遺物（Fig.10～13、PL.19～22） 弥生土器から古墳・古代の土師器・須恵器、中世の土師器、陶磁器、瓦器などと、木製品が出土している。

19～26は上層出土。19～22は土師器。19は小皿1/10片で復元口径8.2cm、器高1.0cmを測る。摩滅し調整は不明。調整はやや不良。20～22は坏。20・21は復元口径11.2cm、12.6cm、器高2.6cm、2.65cmを測

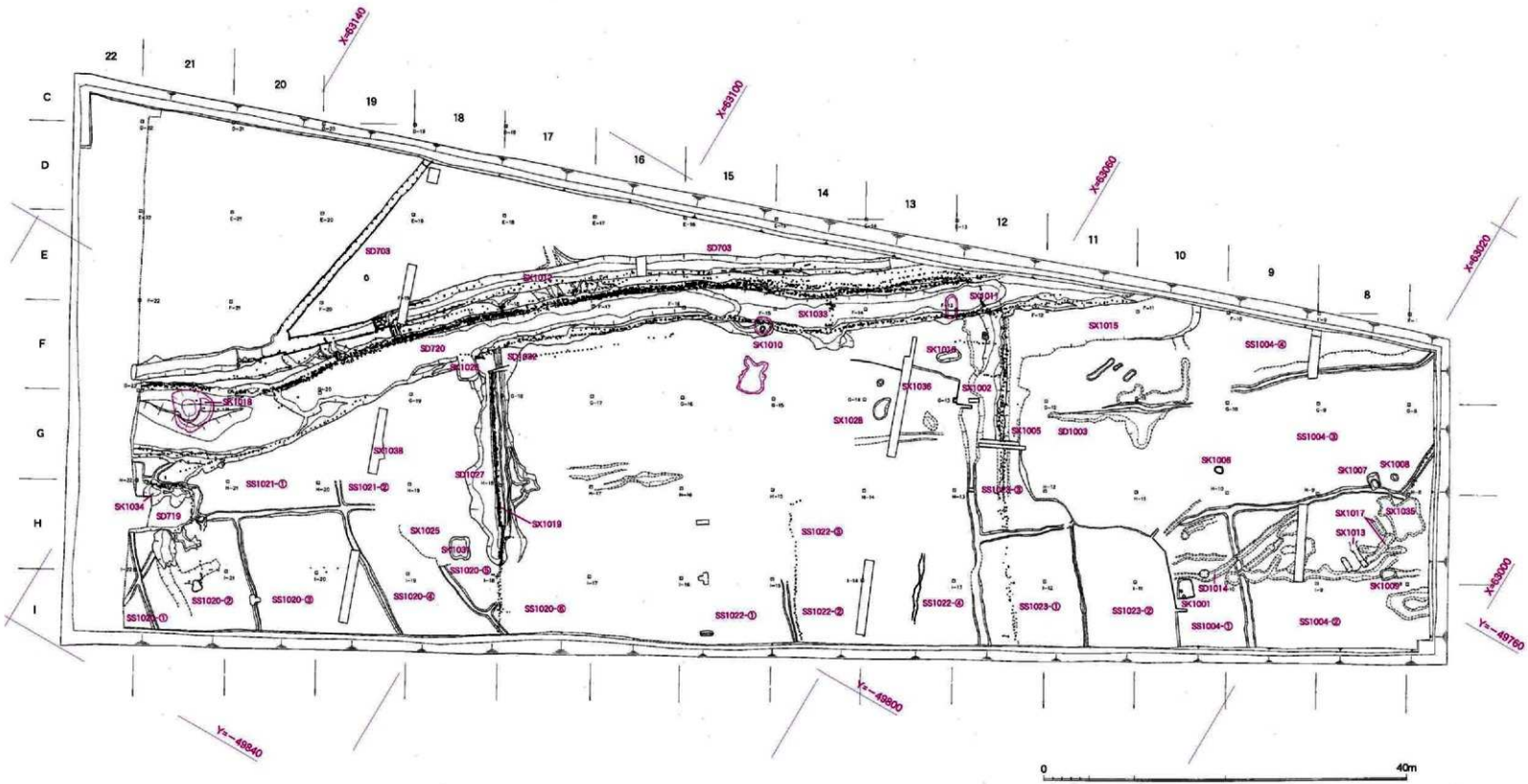


Fig.7　第Ⅰ面遺構全体図（1/400）

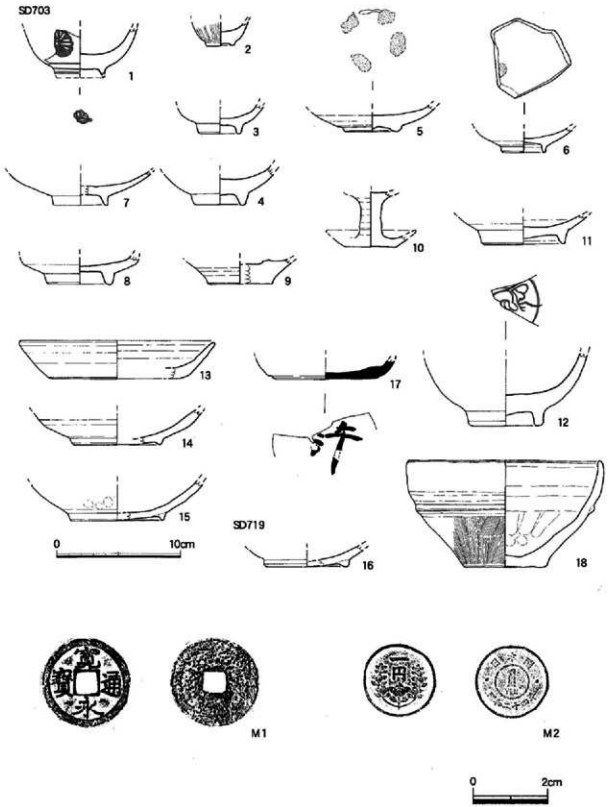


Fig.8 SD703・719出土土器・貨幣（1/3・1/1）

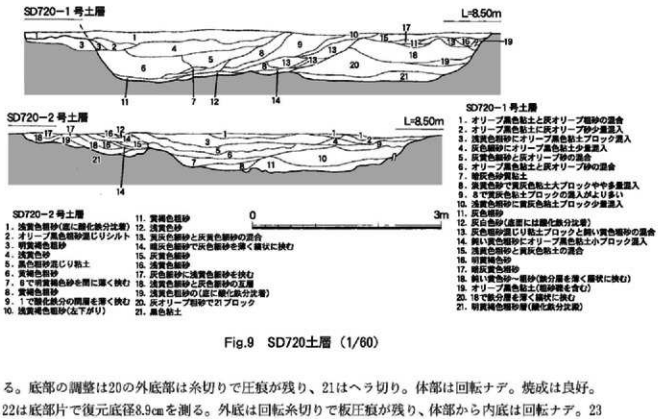


Fig.9 SD720土層（1/60）

る。底部の調整は20の外底部は糸切りで圧痕が残り、21はヘラ切り。体部は回転ナデ。焼成は良好。22は底部片で復元底径8.9cmを測る。外底は回転糸切りで板圧痕が残り、体部から内底は回転ナデ。23～26は白磁。23・24は白磁碗Ⅳ類。1／8片と1/12片の小片で復元口径15.6cm、14.8cmを測る。調整は23が外面下半はケズリ、その他は回転ナデ、24は外面ケズリ、内面は回転ナデ。口縁部直下は釉たれがある。25は白磁Ⅴ類の碗の細片。灰黄色の透明釉がかかる。26は底部1／4片で、復元底径6.0cmを測る。体部から内面は灰白色の半透明釉がかかり、内面は貫入が入る。高台部はケズリで露胎。内底部は蛇の目状に釉を掻き取る。

27～39は下層出土。27・28は土師器。27は小皿1／4片で復元口径8.1cm、器高0.7cmを測る。器表は摩滅し、調整は不明。色調は酸化鉄分が付着し黄橙色を呈す。28は坏。口縁部1／8片で復元口径は15.4cmを測る。調整は回転ヨコナデ。29は瓦器碗。口縁部1／10片で復元口径17.2cmを測る。横ナデ又はヘラミガキ。色調は暗灰色を呈す。胎土は精良、焼成は良好。30は黒色土器B底部1／4片。復元底径7.0cmを測る。摩滅がひどいが、高台部はヨコナデかも。色調は黒褐色を呈す。31は黒色土器A類碗。底部1／5片で復元底径7.5cmを測る。摩滅がひどいが、高台部はヨコナデかも。32～35は白磁。32・33はⅣ類碗。32は口縁部1／10片で、復元口径16.5cmを測る。体部外面はケズリ、その他は回転ヨコナデ。灰白色の透明釉がかかる。内面釉たれがある。33は底部1／4片で復元底径7.2cmを測る。外面は回転ケズリで、高台部はケズリ出し。透明の灰白色釉がかかるが、外面は露胎。34・35はⅥ類の高台。34は1／8片で復元底径5.8cmを測る。高台は細くケズリ出す。体部内外面は灰白色釉がかかるが、摩滅し光沢をなくす。35は畳付きを欠損。外面はケズリで、内面は透明の灰白色釉がかかる。36・37は青磁碗底部。36は1／4片で復元底径5.2cmを測る。畳付きは釉を掻き取るが、他は半透明の暗灰黄色釉がかかる。37は1／2片で復元底径5.4cmを測る。高台部はケズリ出し。オリーブ黄色釉がかかるが、高台部は露胎。38は青白磁合子蓋。1／4片で復元口径4.0cmを測る。文様は型押しか。39は陶器の壺底部1／2片。底径6.3cmを測る。底部はケズリで上げ底状に仕上げる。体部は回転ヨコナデ。40～44は出土層が不明。40～42は土師器。40・41は小皿。1／5・1／7片で復元口径8.8cm、8.6cm、器高1.1cm

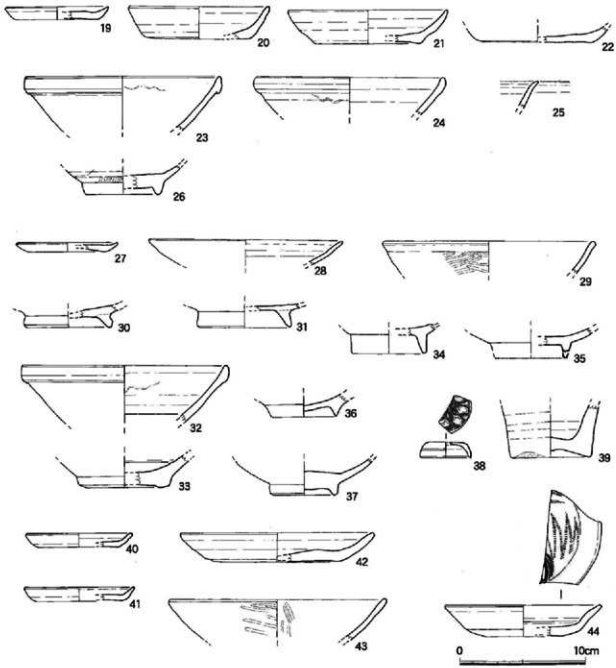


Fig.10　SD720出土土器①（1/3）

を測る。調整は40が底部ヘラ切り後ナデ、41は回転糸切りで、体部から内面は回転ナデ。42は坏1/8片で復元口径15.4cm、器高2.35cmを測る。底部ヘラ切り後ナデか、口縁は回転ナデ、内面はナデ。色調は40～42いずれも黄橙色を呈し、胎土は砂粒、金雲母をわずかに含み、焼成は良好。43は瓦器椀口縁部1/10片で復元口径17.2cmを測る。調整はヨコナデ後ミガキ。色調暗灰色を呈し、胎土は精良。焼成良好。44は青磁皿1/8片で復元口径12.4cm、器高6.0cmを測る。内面施文は櫛歯とヘラ切りで、同安窯系の平底皿。透明釉が施釉されるが、外底部は釉を掻き取る。45～58は溝の時期から大きくはずれる時期の遺物。45～54は須恵器。45は坏底部1/8片で復元底径9.0cmを測る。外底部ヘラ切り後ナデ、

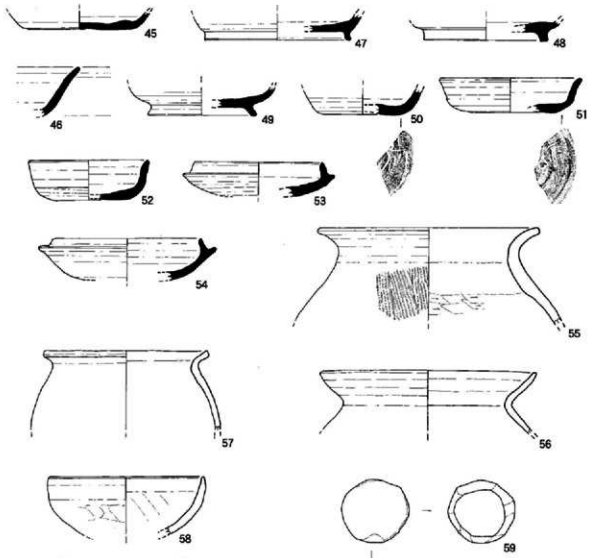


Fig.11　SD720出土土器②（1/3）

体部は回転ヨコナデ。46～49は貼付け高台を持つ坏。7世紀後半～8世紀代のもの。46は高台を持つと思われる口縁小片。調整は回転ヨコナデ。47は1/5片で復元底径11.6cmを測る。調整は底部ヘラケズリ、体部は回転ヨコナデ。48は1/3片で復元底径9.8cmを測る。調整は回転ヨコナデ。49は高台が外に開く形態。1/5片で復元底径8.6cmを測る。高台はヨコナデ、外底部はケズリ、内面は回転ヨコナデ。50～52は底部が丸みを持つ7世紀後半のもの。口径は復元で51が11.2cm、52が9.6cmを測る。調整は外底部が回転ケズリで、50・52はナデを加える。体部から内底部は回転ヨコナデ。50・51の外底部には、ヘラ記号がある。53・54は坏身小田氏の須恵器九州編年のⅢB期のもの。口径は復元で53が10.1cm、54が11.7cmを測る。器高は53が2.7cm、54が3.4cmを測る。体外面は53が4/5部分、54が1/2部分が回転ケズリ、調整は受部から内面は回転ヨコナデで、内底はナデ。55～58は土師器。55から57は甕。55は1/4片で復元口径17.6cmを測る。調整は胴部外面が粗いハケ目、口縁部はヨコナデ、内面はケズリである。6世紀のもの。56は布留式系の甕口縁部1/5片。復元口径17.1cmを測る。調整は胴部外面ハケ目後ナデ、口縁部は回転ヨコナデ、胴内面はケズリ。57は弥生土器甕口縁部1/6片で

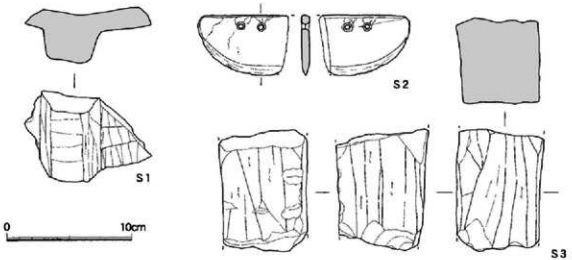


Fig.12　SD720出土石製品（1/3）

復元口径は13.2cmを測る。調整は外面やや摩滅するが、胴部はハケ目、口縁部から胴部内面はナデ。胎土には金雲母を多く含む。58は土師器の鉢1/6片で復元口径は12.4cmを測る。調整は体外面ケズり後ナデ、口縁部ヨコナデ、体内面はナデ上げ。古墳時代後期のもの。

S1は滑石製石鍋破片の転用品。縦長の把手が着くもので、外面ケズリ後擦りで、ススが付着する。S2は半月形の石包丁2/3片。残存長7.2cm、最大幅4.7cm、厚さ0.65cmを測る。背部に紐孔が2カ所ある。孔形は0.7cmを測り、2孔間隔は中心で1.7cmを測る。刃部は両側から研ぎ出している。2孔中間から見ると、刃部裏側がかなり磨り減っている。表面はザラザラし、剥離している。S3は断面方柱状を呈す砥石片。残存幅9.8cm、幅7.0cm、厚さ6.0cmを測る。3面が砥石として使用し、磨り減っている。石材は砂岩である。

W1～W5は木製品。W1は玩具の毬。やや楕円形のボールを呈す。長軸長5.4cm、短軸幅5.0cm、厚さ4.4cmを測る。上下両端にはケズリ加工痕を残すが、全体に丁寧な作りである。W2は箸と思われる。全長22.0cm、幅0.9cm、厚み0.3cmを測る。全体に丁寧なケズリ仕上げであるが、一方の先端部が尖り、曲がる。W3は鉾状の木製品か、鉾先端はつぶれる。柄部もつぶれる。全長41.2cm、幅2.9cm、厚み2.3cmを測る。鉾先から10cmで段を付け茎部としている。全体の大まかなケズリ仕上げである。W4は差し歯下駄の台である。台裏には歯を差し込む切り込みがある。全長23.9cm、最大幅10.7cm、最大厚3.7cmを測る。表面は平滑な仕上げである。横緒孔には楔が残る。W5は杭。残存長85.0cm、幅3.5cm、最大厚3.0cmを測る。下端は削って尖らす。表面には樹皮が残る。W13は高台を持つ挽物の皿。口径9.1cmを測る。表面には黒漆を塗布する。W14は樹皮を使用したかごなどの製品の一部。円孔を持つ。

SD1014

H-9・10区で検出した自然流路。溝幅0.6～1.0m、深さは1～10cmを測る。溝埋土は粗砂である。

出土遺物　古代以前の須恵器、古代から中世にかけての土師器、中世の青磁の細片が少量出土。

SD1027・1032

東西18ラインの条里方向の畔に沿って両側で検出した溝。水田の項で詳細は述べる。

②　堰状遺構

SX1011（Fig.14）

E-12区で検出した、SD720溝を横断する杭列。杭自体まばらにしか残っていないが、杭列は北側に

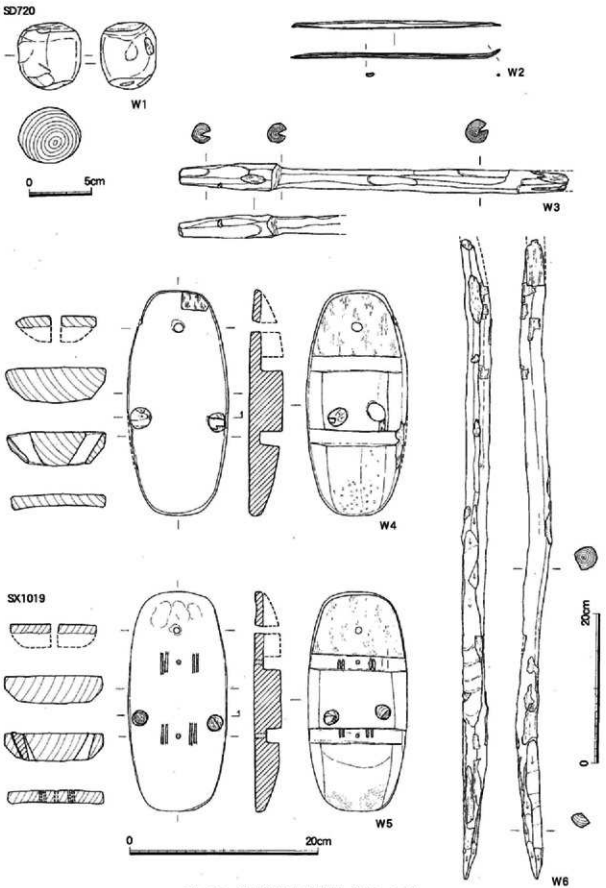


Fig.13 各遺構出土木製品（1/3・1/4）

凸状を呈し、条里基準に沿った東西方向の畔の近くであり、この遺構の西側水田面には水が流れた流路を検出していることなどから、水を取水するための堰と考える。

出土遺物　古代頃と思われる土師器・須恵器の細片が少量出土した。

SX1033（Fig.14、PL.10）

SD720内のF・E-14区で検出したもので、SX1011から17m北側に位置する。SX1011以上に遺存状況は不良。西側は水の流れによるのか、不定形の土坑状に浅く落ち込む。杭列は西側は残っていないが、東側は一部根元部分が残り、横木と南側の落ち込みに径15～30cmの石があった。杭は北側に倒れる状況を示すことから、南からの流れを受けたものと思われる。**出土遺物**はなかった。

SX1034（Fig.15、PL.12）

H-21区で検出したSD720から水を分流して、SD719に流す為の堰である。全長3m程で、南側は°で折れ、幅1.5m延びる。杭列はそれ程密に打ち込まれてはいないが、東側のSD720から水が流すために、SD720の西側護岸杭もSX1034に向けて西側が若干開き、水を導くような杭列も延びている。また堰自体も東側から水を受けたように、西側に膨らみ倒れている。また底面の高さも東側が西側より0.1m程は低く、水の流れで抉られたような窪みもあった。埋土は粗砂を主体していた。

出土遺物はなかった。

③　土坑（SK）

番号を付したものは、11基あるが、ここでは、図示したものを中心に述べる。

SK1001（Fig.16、PL.14）

I-10区の水田面で検出した平面形がやや台形状を呈す土坑。規模は長軸長が2.26m、短軸長西側1.90m、東側が1.50mで、断面形は逆台形を呈し、深さは0.24mを測る。底面はほぼ平坦で、北西隅にはピット状の落ち込みがあった。埋土は灰黄褐色シルトと黄灰色シルトが主体で、粗砂を含む。

出土遺物　図示できるものはないが、中世の土師器、瓦質土器、瓦器の細片をわずかに含む。

SK1006（Fig.16、PL.14）

G-10区の水田面で検出した平面形が不整円形状を呈す土坑。規模は長軸長1.00m、短軸長0.88m深さ0.20mを測る。埋土は黄灰色シルトと粗砂を主体とする。**出土遺物**はなかった。

SK1007（Fig.16、PL.14）

G-8区で検出した畔を切る土坑。平面形は羽子板状を呈す。規模は長軸長1.75m、短軸長は北側が1.33m、南東側が0.98mを測る。底面は凹凸があり、南東側が一段深くなる。深さは北東側で0.13m、南西側が0.30mを測る。埋土は上層が黄灰色粗砂混じりシルト、下層には暗灰色粘土ブロック、粗砂が混ざる。

出土遺物　中国産白磁碗細片が1点出土した。

SK1008（Fig.16、PL.14）

G-8区で検出した平面形が楕円形状を呈す土坑。規模は長軸長0.92m、短軸長0.69m、最大深さ0.23mを測る。埋土は灰色シルト粘土で下層に粗砂を含む。**出土遺物**はない。

SK1009（Fig.16、PL.14）

H-8区で検出した平面形が隅丸長方形を呈す土坑。規模は長軸長1.66m、短軸長1.18m、最大深さ0.23mを測る。底面の南側小口部はテラス状を呈す。埋土は上層が暗灰黄色粗砂混じり砂質シルト、下層が暗灰黄色粘質砂である。

出土遺物（Fig.18）　中世のものと思われる白磁碗、土師器細片が少量出土。

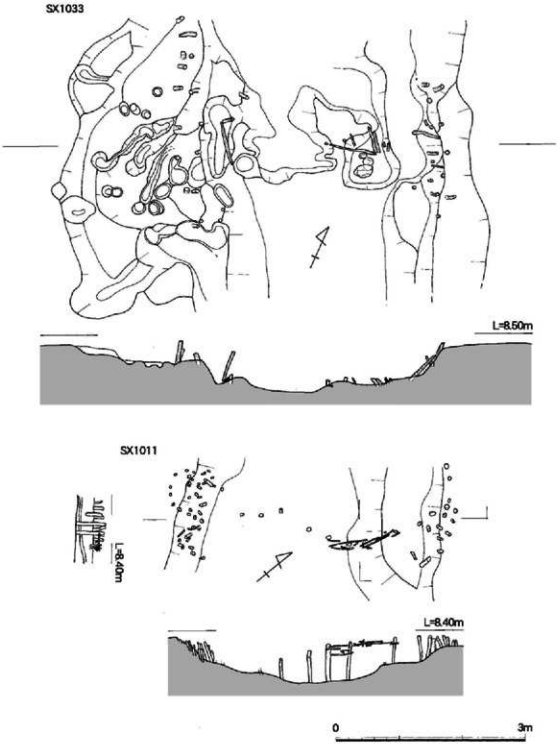


Fig.14　SX1011・1033（1/60）

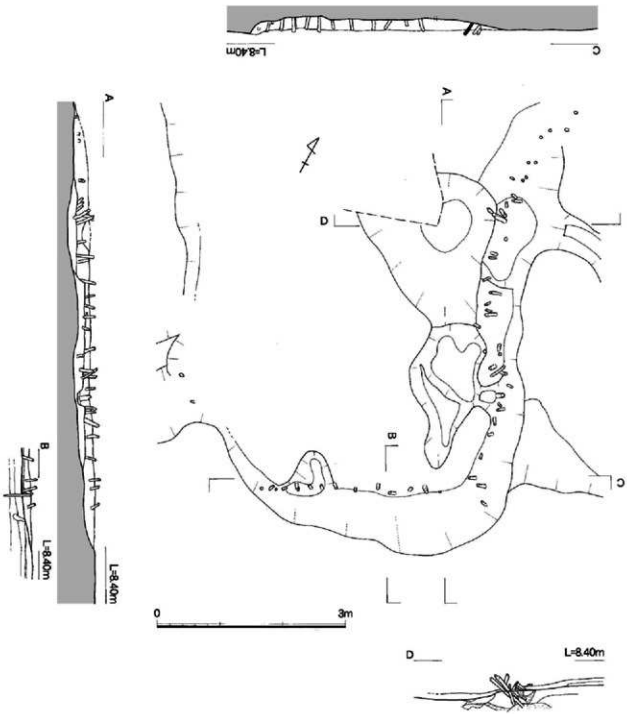


Fig.15 SX1034 (1/60)

60は白磁碗底部1/4片で復元底径は7.2cmを測る。高台部はケズリで露胎、その他は灰白色釉がかかるが発泡している。内底部は蛇の目状に釉を掻き取る。

SK1010（Fig.16、PL.14）

F-15区で検出したSD720を切る、平面形が不整円形状を呈す土坑。規模は直径2.08m、最大深さは0.30mを測る。SD720を切っているため、土層図から見ると壁際に掘り過ぎており、溝の底面は中央部が深くなる形状を示すものと思われる。埋土は上層が灰色粗砂混じり粘質シルト、下層がオリーブ黒色粘土、暗灰色粘質砂である。

出土遺物（Fig.18） 中世の土師器細片と黒色土器A類が少量出土している。

61は黒色土器A類椀底部1/6片で復元底径は6.6cmを測る。全体に摩滅がひどいが、調整はナデと思われる。胎土に細砂、雲母細片をわずかに含み、精良。

SK1018（Fig.17、PL.15）

G-21区、SD720の上面で検出した平面形が不整円形を呈す土坑。規模は長軸長4.8m、短軸長4.4m、最大深さは0.46mを測る。土層では底部は浅い丸底を呈す。埋土は上層が灰色粘土を主体とし、下層は灰白色砂や浅黄色砂を主体とする。

出土遺物（Fig.18、PL.21・22） 古代の土師器・須恵器、中世の土師器、瓦器、青磁・白磁などの細片が少量出土している。

62は青白磁の壺？底部1/2片で復元底径4.5cmを測る。調整は内面、底部はロクロナデ。外面明緑灰色の透明釉がかかり、外底部は露胎である。内面無釉であることから袋物であろう。

SK1026（Fig.17、PL.15）

F-18区で検出したSD720を切る、平面形が長方形状を呈す土坑。溝と切り合うため底面の深さ、規模については明確に確認出来なかったが、土層から推定して長軸長4.7m、短軸長2.36m、最大深さは0.8mを測る。底面はほぼ平坦で壁面の立ち上がりは緩い。埋土は暗灰色粘土や灰色粗砂、灰黄色細砂、オリーブ黒色粘土などである。

出土遺物 中世土師器の細片が2点出土した。

SK1031（Fig.17、PL.14）

H-18区で検出した不整方形の土坑。規模は長軸長2.52m、短軸長2.20m、最大深さ0.24mを測る。底面は平坦からやや中央が深くなる。埋土は暗灰黄褐色砂質土から下層は黒褐色粗砂混じり土である。

出土遺物 中世土師器の細片が2点出土した。

④ 水田遺構（SS）

水田の区画はSD720西側で主に検出した。東側は洪水砂が被り、酸化鉄分が沈着するものの、畔などは確認出来なかった。西側で検出した水田は大きく3区画の水田に分けた。南側の水田は中世後半で、この水田面は本来調査区西側全域を覆っていたが、畔なども南側で確認したのみで、第7次調査区の上面での検出であるため、南側の畔が確認出来た部分を残して、一段下げた下の水田面の検出を行った。したがって北側と中央部で確認した水田は南側水田より古く、中世前半から古代の時期のものである。

SS1004（PL.7・13）

7～12区ラインで検出した水田、本来は北側まで水田は延びていたが、畔が確認出来なかったため、畔を検出し、区画が有る程度確認できた南側を精査した。水田面で確認した小区画は畔によって4区に分割した。水田面上には粗砂が覆い、粗砂が詰まった足跡などの窪みが水田面上では多数確認出来

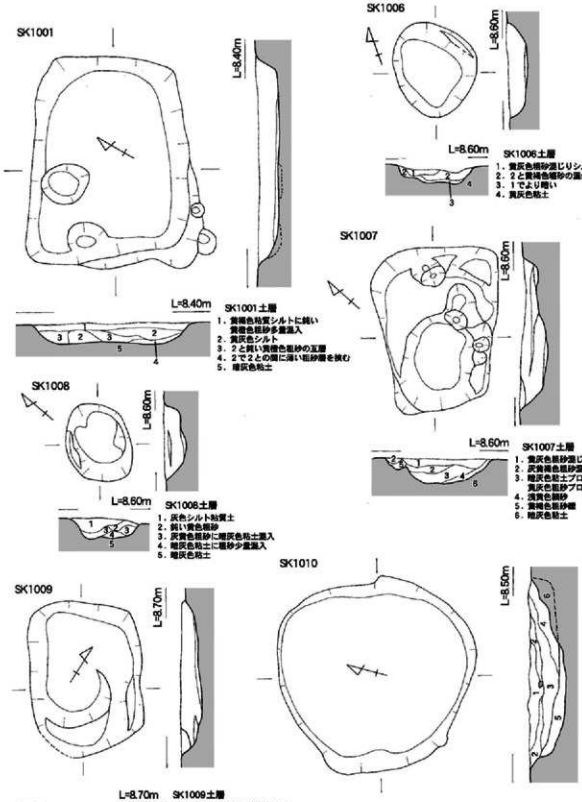


Fig.16 SK1001・1006～1010 (1/40)

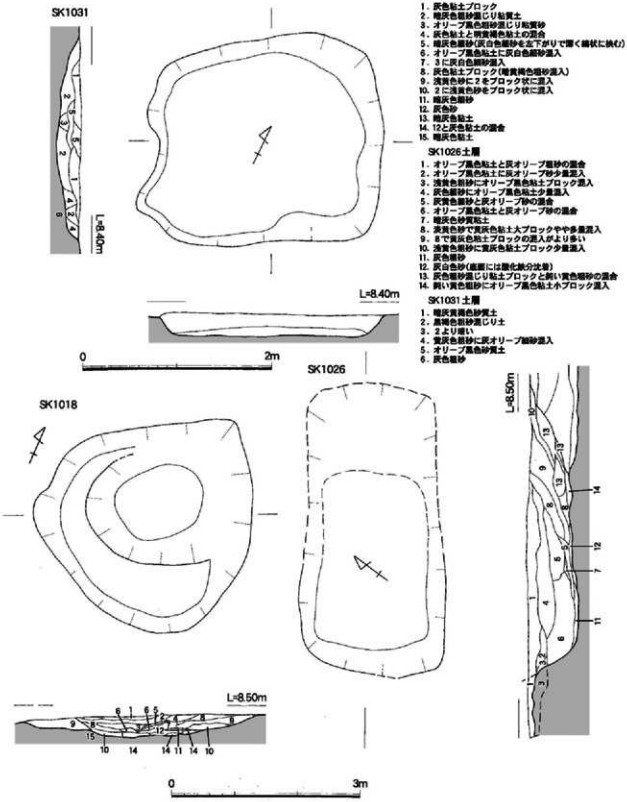


Fig.17　SK1018・1026・1031（1/40・1/60）

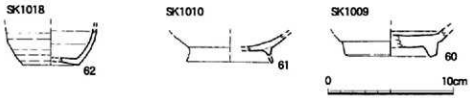


Fig.18 各土坑出土土器（1/3）

た。確認した南北の畔は条里基準に沿っているが、蛇行するなどして、区画はかなり崩れ、残りも余り良くない。西側の水田面には水が流れた痕跡が見られた。また東側SD720の西側にも水があふれて流れた痕跡が確認された。また4基の土坑を確認したが、水田に伴うものと考える。畔は幅0.4～0.8m、高さは最高で5cm程で、水田面を削り出して作り出したものでなく、基本的にはオリーブ黒色粘土の水田面に灰黄褐色シルトを盛上げている。

出土遺物（Fig.22、PL.23） 中世の土師器や瓦器、陶器の細片が少量と下駄の歯が出土した。

W7は台形を呈す、下駄の歯である。下端は使用によりつぶれが激しく、表面には文様のような凹線がある。歯の上部には楔がある。

SS721（Fig.22、PL.7・8）

北西側で検出した水田面で、第7次調査から続く水田である。調査時は別の番号を付した（SS1020・SS1021）が、第7次報告の番号に統一して報告する。この水田は条里方向の南北畔に斜行する東西畔が付くもので、その南北畔の両側に広がるものである。畔は18区ラインまで確認出来た。水田の東側は溝SD720が流れて狭く、また溝からあふれた水で流されたのか、畔の残りは不良であった。各小区画水田の東西の畔間隔は不規則であり、条里区画は崩れている。確認した水田区画は8区画で、いずれも全体を確認出来るものはなかった。北西側水田面上には灰白色細砂が薄く堆積し、足跡はそれ程多くなかった。その南側は水田面が弱く、灰白色細砂、暗灰色粘質シルトとなる。畔はオリーブ黒色粘土の水田面に暗灰黄色粘質シルトを盛上げている。

出土遺物 古墳時代須恵器、古代の土師器・須恵器、中世の土師器の細片が少量出土しているが図示出来るものはなかった。

SS1022

調査区中央部で検出した、東西13区ラインの南側で検出した最大幅1.2m程の大畔①北側に広がる水田である。水田面の残りは良くない。大畔①の北側15区杭ライン南側に東西方向の畔②がわずかに残り、その南側には杭列SX1030が長さ20m程延びる。畔②と大畔①につながると思われる南北畔③が断続的に残る。東側G区でも、南北方向の畔状のわずかな高まりがあったが、畔とは確認出来なかった。またH・I-13区で東西方向に粘土を貼付けた畔状の高まりが確認できたが、確認した水田面より

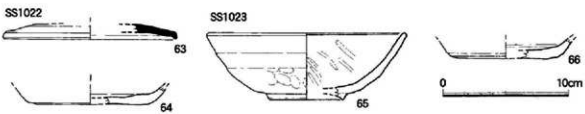


Fig.19 水田面出土土器（1/3）

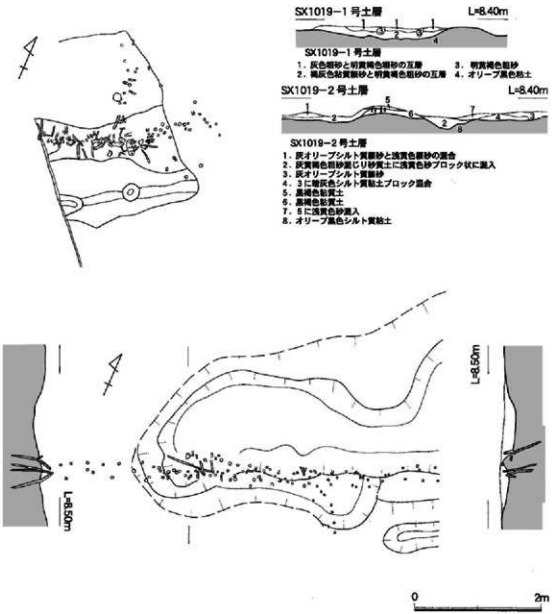


Fig.20　SX1019（1/60）

上面であり、しかも下に砂を挟んでいたことから、畔としても、新しい時期のものと考えるので、この水田からは除外する。従ってこの水田内の区画は残る畔から３区画とする。水田面上には灰白色細砂が薄く堆積していた。畔の規模は畔②で0.6m程、高さは５cm程である。畔は水田面と同じオリーブ黒色粘土である。

出土遺物（Fig.19）　古墳時代から古代の土師器・須恵器の細片がわずかに出土している。

63は須恵器で、口縁部が直に屈曲する形態の蓋１/12片。復元口径13.5cmを測る。天井部は回転ケズリ、口縁から内面は回転ナデである。64は土師器の坏底部１/４片。復元底径は9.8cmを測る。外底部はケズリ、体部は回転ナデ、内底はナデである。

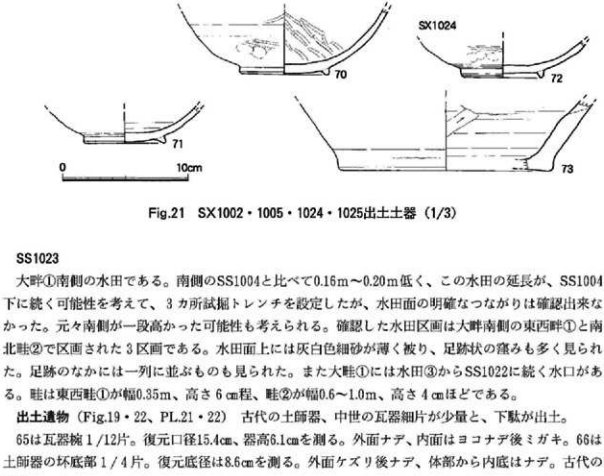


Fig.21 SX1002・1005・1024・1025出土土器（1/3）

SS1023

大畔①南側の水田である。南側のSS1004と比べて0.16m～0.20m低く、この水田の延長が、SS1004下に続く可能性を考えて、3カ所試掘トレンチを設定したが、水田面の明確なつながりは確認出来なかった。元々南側が一段高かった可能性も考えられる。確認した水田区画は大畔南側の東西畔①と南北畦②で区画された3区画である。水田面上には灰白色細砂が薄く被り、足跡状の窪みも多く見られた。足跡のなかには一列に並ぶものも見られた。また大畦①には水田③からSS1022に続く水口がある。畦は東西畦①が幅0.35m、高さ6㎝程、畦②が幅0.6～1.0m、高さ4㎝ほどである。

出土遺物（Fig.19・22、PL.21・22） 古代の土師器、中世の瓦器細片が少量と、下駄が出土。

65は瓦器椀1/12片。復元口径15.4㎝、器高6.1㎝を測る。外面ナデ、内面はヨコナデ後ミガキ。66は土師器の坏底部1/4片。復元底径は8.6㎝を測る。外面ケズリ後ナデ、体部から内底はナデ。古代のもの。

W8は連歯下駄である。全長15.7㎝、最大幅10.5㎝、最大厚3.0㎝を測る。大きさから子供用である。全体に使用による摩滅が著しい。

SX1019・1024（Fig.20、PL.16）

いずれも条里区画に沿った、杭列を伴う畔である。南側SX1024が坪堺に合うもので、SX1019とSX102の間は56mを測る。南側のSS1004水田に関連する畦の可能性もあるが、間を区画する畦は確認出来なかった。

SX1019（(Fig.20、PL.16～20） 18ラインに沿って検出した畦と杭列である。杭は直径5㎝前後、長さ50～70㎝程の比較的小さな杭を、確認出来る部分では、畦の北側に打ち込んでいる。この遺構は西側では、水田SS721の畦に打ち込まれており、SS721より新しいことが分かる。調査区南のSS1004に伴うものの可能性がある。SX1019の両側は水が流れた浅い流路SD1027、1032があり、流路がSD720へ流れ込むが、北側のSD1027はH-18区で、杭列の南側に広がる。この部分は特に杭が密に打ち込まれ、下駄など木製品が出土していることなどから、この部分は畦が途切れ、水の流し口であったと考える。畦はオリーブ黒色粘土の基盤又は、その上に黒褐色粘質土を盛上げている。南北両側の溝の埋土は細砂又は粗砂混じり砂質土が主体である。溝底面は水の流れで、凹凸がある。またSD720に接する部分

でも水の流れによるのか杭内に下駄などの木製品が絡んでいた。

出土遺物（(Fig.13・22・23、PL.23・24) 古墳時代～古代の土師器や須恵器、中世の土師器、瓦器の細片や、木製品が少量出土している。

W５は連歯下駄の台部。全長23.3cm、最大幅10,5cm、最大厚3.0cmを測る。表面丁寧なケズリ仕上げで、差し歯の切り込み部には楔と、横緒孔には鼻緒が残る。上部左側が大きく窪んでおり、右足用と思われる。W９～W12は下駄。W９は歯。台形を呈し下部で11.5cm、厚さ1.73cmを測る。表面は面取りケズリ仕上げで、上面には楔が２カ所残る。下底は使用によりつぶれる。W10～12は同一下駄の台部と歯であるが、樹種は異なっている。W10は連歯下駄の台部。全長22.1cmを測る。右足用か。丁寧な仕上げであるが、表面は傷みが激しい。W11・W12は下駄の歯。かなり磨り減る。W15～W18は挽物の椀。W15は復元口径13.5cmを測る。表面には黒漆が塗られている。W16は僅かな高台を持つ底部。見込みに挽物の目痕が残る。W17は口径14.6cmを測る。内面に目痕痕が残る。漆の塗布はない。W18は底部片。僅かに高台付く。

SX1024（PL.13・16・18） 12区で検出したもので、杭列東側は畦の高まりが残る。西側ではSS1023の畦からずれており、この遺構もSS1023より新しいものである。この畦の両側にも水が流れた流路SX1002、SX1005がある。畦は幅１ｍ程で、高さ10cm弱、畦土は黒色粘土の基盤に、オリーブ黒色粗砂混じり粘質土を盛上げ、両側の溝はオリーブ黒色粗砂混じり細砂や砂質土で、粗砂を交えている。

出土遺物（Fig.21、PL.21） SX1002・1005を含めた中で、中世の土師器、黒色土器、瓦器、陶器などが少量出土している。

67は黒色土器A類の椀底部１／３片。復元底径8.4cmを測る。調整は摩滅で不明。68～71は瓦器椀。68・69は口縁部１／８片で、復元口径16.1・15.4cmを測る。68の表面はやや摩滅するが、調整はナデ。69は内外面ヨコナデで、ミガキを加える。70～72は小さな高台が付く底部で、71は１／２片である。底径は7.1cm、8.4cm、6.6cmを測る。調整は、70は体部内外面ナデ後ミガキ。71は回転ナデ後ナデ、72

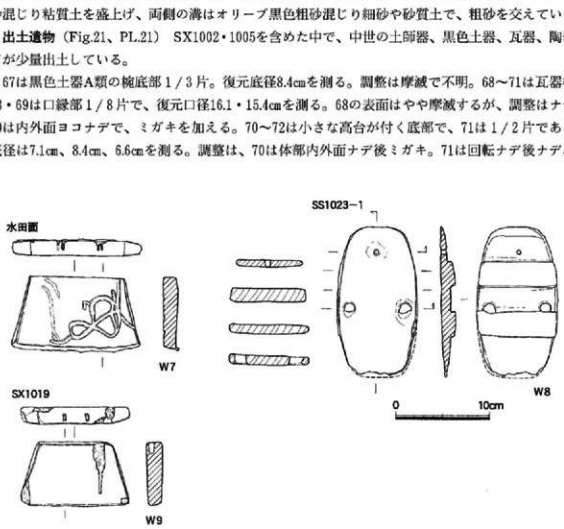


Fig.22 各遺構出土木製品①（1/4）

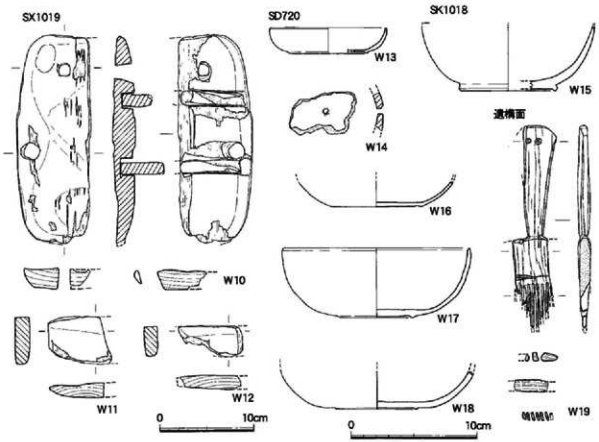


Fig.23　各遺構出土木製品②（1/3・1/4）

は体部外面下はケズリで、上半はミガキ、内面上半は回転ナデ、内底はナデである。73は陶器の甕底部1/9片。復元底径17.0cmを測る。胴部内外面は回転ナデ。67はSX1002、68・69はSX1005、70～73はSX1024出土。

⑤　遺構面出土遺物（Fig.23・24、PL.21・24）

74・75は龍泉窯系青磁碗。74は口縁部1/12片。復元口径17.6cmを測る。見込みはヘラ切りと櫛による施文がある。オリーブ黄色の透明釉がかかり、内外面表面には氷裂が入る。75はⅠ類の底部から体部片。底径6.6cmを測る。器表面には灰オリーブ色透明釉がかかるが、高台部は露胎。内面は無文であ

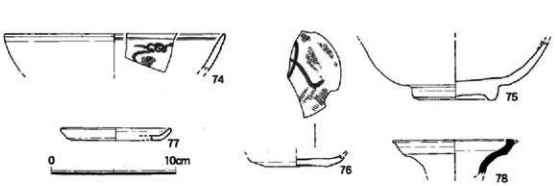


Fig.24　遺構面出土土器（1/3）

る。76は同安窯系青磁。平底皿底部 1/2片で、底径4.9cmを測る。器表面には灰オリーブ色の透明釉がかかるが、外底はケズリで露胎。内底見込みは櫛のジグザグ紋がある。77は土師器小皿1/5片。復元口径8.8cm、器高1.0cmを測る。体部は回転ナデ、外底は摩滅し調整は不明。78は須恵器の甑と思われる口縁部1/4片で、復元口径8.2cmを測る。調整は回転ナデ。それぞれ74はE-19区遺構面、75はE-12区SD720東壁隣接地と2号土層ベルト、76はE-21区遺構面、77はG-21区SD720・SD719間遺構面、78はE-21区遺構面出土である。

W19は梳櫛。残存長16.5cmを測る。頂部には円孔が2か所空く、表面は丁寧に仕上げる。樹種はイスノキで板目取りである。

土器・土製品観察表

Tab.2 第Ⅰ面遺物観察表

掲載番号	Fig.	PL.	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位:cm)/括弧記載は推定値 口径・長さ	底部・幅	器高・厚さ	胎土	色調	焼成	残存状況	備考
1	8		SD703 12E		肥前陶付焙烙・高台付椀		基部径(4.3)	3.0	灰白色、精良	釉：灰色透明	良好	底部1/3	2次試料、大きく歪
2	8		SD703 12E		肥前白磁・紅皿?		4.2	1.9	灰白色、精良	釉：灰白色（半透明）	良好	底～胴部	高台
3	8		SD703 12E		肥前陶器・高台付椀		3.5	2.35	灰白色、やや砂っぽい	釉：黒褐色（鉄釉）	良好	底部	
4	8	19	SD703	下層 黄灰色粘土	肥前陶器・高台付椀		4.1	2.3	にぶい橙色、ややザラつく	釉：黒褐色（鉄釉） 素地：にぶい橙色淘色	良好	底部	
5	8	19	SD703	黄灰色粘土	肥前陶器・高台付椀		4.4	2.2	明褐灰色、ややザラつく	釉：半透明釉	良好	底部	水製
6	8		SD703 12E		肥前陶器・高台付椀		3.5	2.0	灰白色、ややザラつく	釉：にぶい黄色	良好	底部	緻かな水面
7	8		SD703 12E		肥前陶器・高台付椀		(4.3)	2.7	灰白色、やや砂っぽい	釉：灰オリーブ色	やや不良	底部1/4	緻かな水面
8	8		SD703 12E		肥前陶器・火入		5.3	2.3	灰白色、精良	釉：明赤褐色、鉄シャク 素地：灰褐色	良好	底部	高台
9	8		SD703	下層 黄灰色粘土	陶器・灯火具		(5.2)	2.05	にぶい橙色、精良	褐釉赤褐色	良好	底部1/3	
10	8		SD703 12E		陶器・ひょうそく		4.1	4.3	灰黄色、精良（やや軟質）	淡黄～暗灰黄色	良好	下端口縁部・上段欠損	
11	8	19	SD703 12E		白磁・椀		(5.6)	2.3	灰白色、精良（やや気泡多）	釉：灰白色（半透明）	良好	底部1/2～高台1/4	
12	8	19	SD703 12E		瓶類系青磁・高台付椀		(5.0)	3.9	灰白色、精良（気泡あり）	釉：緑灰色 素地：明赤褐色	良好	底部1/4	
13	8		SD703 12E		土師器・坏	(15.6)	(13.7)	2.9	1mm以下砂粒少量混入	灰黄褐～灰黄褐色	良好	底部1/6～口縁1/15	
14	8		SD703 12E		瓦器・高台付椀		(7.2)	2.2	精良	黒～黒褐色	良好	底部1/8	
15	8	19	SD703 12E		瓦器・高台付椀		(7.8)	2.35	精良	灰黄褐～黄灰色	良好	底部1/8	
16	8		SD719		瓦器・椀		(6.8)	1.7	精良	灰色	良好	底部1/3～高台1/6	
17	8	19	SD703 12E		愚書須恵器・坏		8.4	1.5	精良	灰白色	良好	底部1/2強	「詐」と思われる墨書あり
18	8	19	SD703	弥生土器・鉢		(15.4)	8.6	13.5	1mm以下砂粒少量混入	にぶい橙～にぶい黄橙色、黒褐色	良好	体部3/4～口縁1/8欠損	
19	19		SD703	上層	土師器・皿	(8.2)	(6.5)	1.0	精良	灰白色	やや不良	1/12	
20	19		SD703	上砂	土師器・坏	(11.2)	(8.6)	2.6	1mm前後砂粒少量混入	にぶい黄橙～褐灰色	良好	1/9	
21	19		SD703	上層砂	土師器・坏	(12.6)	(8.4)	2.85	1mm以下砂粒少量混入	にぶい橙色	良好	口縁1/7～底部1/4	
22	19		SD703	上層砂	土師器・坏		(8.8)	1.3	2mm以下砂粒少量混入	にぶい橙色	良好	底部1/4	
23	19	19	SD703	上層	白磁・椀	(15.6)		4.4	灰白色、精良（気泡あり）	釉：灰白色（半透明）	やや不良	1/6 残存	
24	19		SD703	上層砂	白磁・椀	(14.8)		3.0	灰白色、精良（気泡あり）	釉：灰白色（半透明）	やや不良	口縁1/12	水製
25	19		SD703	上層砂	白磁・椀			2.2	灰白色、精良	釉：灰黄色	良好	口縁部破片	
26	19	19	SD703	上層砂	白磁・高台付椀		(6.6)	2.35	灰白色、精良	釉：灰白色（半透明）	やや不良	底部1/4	内面水製
27	19	19	SD703	下層	土師器・皿	(8.1)	(6.3)	0.7	精良	にぶい黄橙～褐色	良好	1/4	酸化鉄分付着
28	19		SD703	下層砂	土師器・坏	(15.4)		1.35	精良	にぶい橙色	良好	口縁1/8	
29	19		SD703	下層	瓦器・椀	(16.8)		2.6	精良	暗灰色	良好	口縁1/12	
30	19	20	SD703	下層砂	黒色土器・高台付椀		(7.6)	1.75	0.5～1mm石砂粒多量混入	黒褐色	良好	底部1/4	
31	19	19	SD703	下層砂	黒色土器・高台付椀		(7.8)	1.85	精良	灰白色	良好	底部1/5	
32	19		SD703	川砂下層 2号ベット	白磁・椀	(16.5)		4.65	灰白色、精良	釉：灰白色	良好	口縁1/10	
33	19	19	SD703	下層砂層	白磁・椀		(7.2)	2.6	灰白色、精良（気泡あり）	釉：灰白色	良好	底部1/4	

報告番号	F区	PL.	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量単位(cm)（※は欠損値）口径・長さ	底径・幅	器高・厚さ	胎土	色調	焼成	残存状況	備考
34	10	20	SD703	下層砂	台付鉢・高台付鉢		(5.8)	2.35	灰白色、精良（緻密）	釉：灰白色	良好	底部1/6	摩擦により光沢なくす
35	10		SD703	下層砂	台付鉢・高台付鉢		基準径(6.4)	2.05	灰白色、精良	釉：灰白色	良好	底部1/5	
36	10		SD703	下層砂	青磁・高台付鉢底部		(5.3)	1.85	灰白色、精良	釉：褐灰黄色(半透明)	良好	底部1/4	水裂
37	10	20	SD703	下層砂	龍泉系青磁・高台付鉢		5.4	3.9	灰白色、精良	釉：オリーブ黄色	良好	底部1/3	大きく水裂
38	10	20	SD703	下層砂	青白磁・合子蓋	(4.0)		1.25	灰白色、精良	釉：明緑灰色	良好	1/4	
39	10	20	SD703	下層砂	中国産陶器・壺		6.3	4.3	灰白色、精良	釉：にぶい赤褐色（不透明）	良好	底部1/2	
40	10		SD703		土師器・皿	(8.6)	(8.4)	1.1	1mm以下砂粒少量混入	にぶい黄橙～褐灰色	良好	1/7	
41	10	20	SD703		土師器・皿	(8.8)	(7.1)	1.1	砂粒少量混入	にぶい黄橙色、橙色	良好	1/5	酸化鉄分付着
42	10		SD703		土師器・坏	(15.4)	(11.2)	3.35	1mm以下砂粒少量混入	にぶい黄橙色	良好	底部1/8～口縁一部	
43	10		SD703	東壁	瓦器・鍋	(17.2)		3.2	精良	暗灰色	良好	口縁1/12	
44	10	20	SD703	東側乾SD	同安系青磁・平底皿	(12.4)	6.0	2.5	灰白色、精良（微用あり）	釉：灰白色	良好	約1/8	
45	11	20	SD703	上層	須恵器・坏		(9.0)	1.35	精良	灰色	良好	底部1/8	
46	11		SD703	上層砂	須恵器・坏			3.9	精良	灰～赤褐色	良好	口縁～体部小破片	
47	11		SD703	上層砂	須恵器・高台付坏		(11.6)	3.0	精良	灰色	良好	底部1/5	
48	11		SD703	下層砂	須恵器・高台付坏		(9.8)	1.6	精良	灰色	良好	底部1/3	
49	11		SD703	下層砂	須恵器・高台付坏		(8.6)	2.3	精良	灰色	良好	底部1/5	
50	11		SD703	上層	須恵器・鍋		(7.2)	2.1	精良	黄灰～灰色	良好	底部1/4	
51	11	20	SD703	下層砂	須恵器・鍋	(11.2)	(8.4)	2.7	1～2mm砂粒少量混入	灰色	良好	1/6	
52	11	20	SD703	上層砂	須恵器・鍋	(9.6)	(8.6)	3.15	0.5～2mm砂粒多量混入	灰～灰白色	良好	1/4	
53	11	20	SD703	上層砂	須恵器・坏身	(10.1)	受部径(12.1)	2.7	精良	灰白～灰色	良好	口縁1/6	
54	11	20	SD703	下層砂	須恵器・坏蓋	(11.7)	受部径(14.1)	3.3	0.5～3mm砂粒少量混入	黄～灰色	良好	口縁1/5	
55	11	20	SD703	上層砂	土師器・鍋	(17.4)		7.7	1～4mm砂粒少量混入	橙色	良好	口縁～胴部1/4	酸化鉄分付着
56	11		SD703	上層砂	土師器・鍋	(17.1)		5.0	1mm以下砂粒多量混入	にぶい橙色	良好	口縁1/5	
57	11		SD703	下層 1号ベルト	弥生土器・甕	(13.2)		6.3	1mm以下砂粒多量混入	黄褐色	良好	口縁～胴部上半1/6	
58	11		SD703	下層砂	土師器・鉢	(13.4)		4.65	1mm以下砂粒少量混入	にぶい橙色	良好	口縁～体部1/8	
59	11	20	SD703	下層	土製品・鉢	5.3		0.8	1～5mm内外砂粒少量混入	にぶい赤褐色	良好		土師器底部破片を利用した円板
60	16		SK1603		台付鉢・高台付鉢		(7.2)	2.3	灰白～淡黄橙色、精良	釉：灰白色（飛沫し不透明）	良好	底部1/4	被熱により釉・物変色
61	16		SK1603		黒色土器・高台付鉢		基準径(5.6)	1.75	精良	にぶい橙色	良好	底部1/6	
62	16	21	SK1603	ベルトXD	青白磁・浜入小鉢		(4.8)	3.0	灰白色、精良	釉：灰色～明緑灰色	良好	底部1/3	
63	19		SS4003 1区	水田面	須恵器・蓋	(13.8)		1.25	精良	灰～黄灰色	良好	口縁1/12	
64	19		SS4003 1区	水田面	土師器・坏		(9.8)	1.4	精良	灰白色	良好	底部1/4	
65	19	21	SS4003 3区	水田畦上＋SX1504除去	瓦器・高台付鉢	(15.4)	(8.1)	5.3	精良	暗灰～灰白色	良好	1/12	
66	19		SS4003 3区		土師器・坏		(9.6)	1.6	精良	にぶい黄橙～明褐色	良好	底部1/4	酸化鉄分付着
67	21		SX1603 1区	＋SX1603	黒色土器・鉢		(6.4)	3.65	1.5mm以下砂粒少量混入	にぶい黄橙色	良好	底部1/3～高台1/5	

報告番号	Fig.	PL.	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位:cm)(※は推定値) 口径・長さ	底径・幅	器高・厚さ	粘土	色調	焼成	残存状況	備考
68	21	21	SX1603	覆砂上	瓦器・椀	(13.1)		4.0	精良	暗灰色～灰白色	良好	口縁1/3	
69	21	21	SX1603		瓦器・椀	(15.4)		3.9	灰白色、精良	黄灰～暗灰色、一部褐化	良好	口縁1/8	
70	21	21	SX1604	覆砂上	瓦器・高台付椀		7.1	5.2	精良	灰白色	良好	底部	
71	21	21	SX1604		瓦器・高台付椀		6.6	2.35	精良	灰～灰白色	良好	底部	
72	21	21	SX1604	机列内	瓦器・高台付椀		6.4	3.6	精良	暗灰色	良好	底部1/2	
73	21		SX1604		陶器・甕		(17.6)	5.45	にぶい橙色、1mm以下砂粒混入	黄灰色	良好	底部1/9	胴部、底面休耕?
74	24		第1面遺構面		龍泉窯青磁・碗	(17.6)		3.0	灰白色、精良(緻密)	釉：オリーブ黄色	良好	口縁1/12	小裂
75	24	21	SD710周辺	1号ベルト+第2区ベルト東壁調査箇所	龍泉窯青磁・高台付碗		6.6	4.7	灰白色、精良	釉：灰オリーブ色	良好	底部	小裂
76	24	21	第1面遺構面		同安窯青磁・平椀底		(4.8)	3.6	灰白色、精良	釉：灰オリーブ色	良好	底部1/3	
77	24		第1面遺構面	SD719とSD720の間	土師器・皿	(8.8)	(7.2)	1.0	精良	灰黄色	良好	1/5	
78	24		第1面遺構面		須恵器・坩?	(8.2)		3.6	精良	灰褐～灰色、一部灰白色の灰をかぶる	良好	口縁1/4	

石器・石製品・金属観察表

報告番号	Fig.	PL.	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位:cm)(※は残存 長	幅	厚	材質	色調	備考
S1	12	21	SD720	下層砂	石錐転用	10	6.8		摩石		破片
S2	12	21	SD720	下層砂	石製丁	7.2	4.7	0.65	頁岩	暗青灰色	2/3片
S3	12	21	SD720	東壁ベルト	砥石	9.8	7	6	砂岩	灰～浅黄橙色	破片
M1	8		SD710		寛永通宝	2.3	2.3	0.14	銅		古寛永（1636～1659年）
M2	8		SD710		1円硬貨	1.9	1.9	0.17			昭和24年

木器観察表

報告番号	Fig.	PL.	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位:cm)(※は残存 長さ・口径・幅径	幅・高さ・幅径	厚さ・底径	その他	木取り	樹種	備考
W1	13	23	SD720		祝膳	5.4	5.0	4.4		芯持ち	広葉樹（散孔材）	
W2	13		SD710		箸？（工具かす）	22	0.9	0.3		板目（クヌギ材）	ヌギ	
W3	13	23	SD720	W 65	杭？	41.3	2.9	2.3		芯持ち	シキミ	
W4	13	23	SD720	W 61	下駄の台（遺存下駒）	23.9	10.7	3.7		板目（クヌギ材）	ヒノキ科	台としてほぼ完存
W5	13	23	SX1603	W 65	下駄の台（遺存下駒）	23.3	10.5	3.0		板目（クヌギ材）	ヌギ	台としてほぼ完存
W6	13		SD710	南側下層岸杭下層	杭	(85.0)	3.5	3.0		芯持ち	シキミ	
W7	22	23	水田面	W 1	下駄の歯（遺存下駒）	8.1	13.6	1.6		柾目	ヒノキ科	歯としてはほぼ完存
W8	22	23	SX1603 1区	縦ヨ側面	下駄（遺存下駒）	15.7	8.6	1.8		板目（クヌギ材）	ヌギ	完存
W9	22	23	SX1603	落ち込み	下駄の台（遺存下駒）	4.9	11.5	1.75		柾目	ヒノキ科	歯としてはほぼ完存
W10	22	23	SX1603		下駄の台（遺存下駒）	(22.1)	(7.8)	2.3		板目	ヒノキ科	W11・12をともなう下駄の台
W11	23		SX1603		下駄の歯（遺存下駒）	5.1	(5.7)	1.6		板目	ヒノキ科	W10にともなう下駄の歯
W12	23		SX1603	W 61	下駄の歯（遺存下駒）	3.3	(5.5)	1.5		板目	ヒノキ科	W10にともなう下駄の歯

報告番号	Fig.	PL.	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位:cm)(※残存)				水取り	色調	備考
						長さ・口径・横径	幅・高さ・縦径	厚さ・底径	その他			
W13	23	22	SD720	W 62	磨製品（馬台付鉢）	(3.1)	2.2	(8.18)		刷毛		黒色金属質有
W14	23		SD720		磨製品（鉢？）	(3.4)	5.3	8.6			橙灰	穿孔あり、火を受け変化、黒色帯り？
W15	23	22	SK1068		磨製品（馬台付鉢）	(12.5)	(5.4)	(7.5)		刷毛	ケヤキ？	内面黒色金属質有、内面黒色に炭化物付着
W16	23	24	SX1069	W 66	磨製品（馬台付鉢）		(2.2)	(7.0)		刷毛	ケヤキ	内面黒色金属質、内面も金属？
W17	23	24	SX1069	W 63	磨製品（馬台付鉢）	(14.4)	8.5	(8.6)		刷毛		内面に被熱痕あり、炭の使用なし
W18	23	24	SX1069	W 60	磨製品（馬台付鉢）		(3.1)	(8.8)		刷毛		研磨面の痕跡なく黒本塗り？
W19	23	24	第1調査横断	W 61	鉢	(16.5)	(3.53)	1.0		沈目		刃先を欠く

3．第Ⅱ面の調査

1）調査の概要

7次調査で木簡や墨書土器を出土したSD735の南側延長が検出した。今次の範囲からは墨書土器のほか人面土器や取水口からは人形が出土した。また、SD735内からはアーチ式に構築された堰を1箇所、確認した。

畦畔や水路は北西部で砂層に覆われ良好な状態で検出された。水路SD1061と両岸の土堤は7次調査のSD734の延長である。調査区南側には砂層の堆積が無く、畦畔等の水田施設は検出されなかった。

2）地形と層位

第Ⅰ面より20～30㎝下げた標高7.9～8.3mを検出面に設定した。この検出面は調査区北部に堆積する砂層上面に合わせたレベルである。砂層は厚さ10㎝程度で北西方向に向かって厚く堆積する。従って、砂層が堆積するSD735以北では遺構面を容易に確認することができるが、以南は同レベルの黒灰色粘土層の上面近くを遺構面としたので時期や地形を同一時期のものとして捉えてはいない。おそらく南側は幾分高くなっていたものと考えられる。

3）遺構と遺物

①　旧河川

SD735

第7次調査で検出されたSD735の延長である。調査区北側で灰白色砂で埋め尽くされた流路が曲折し、調査区西際で分岐している。

検出された流路幅は約7mを測る。基底部は検出面からの深さ約150㎝前後で、北側にやや深くなり、調査区内では約20㎝比高差がみられる。

SD735の北岸は氾濫により段状となり、南側に分岐した流路SX1041は深さ約40㎝を測り、SD735の本流と同様に砂層で埋まっている。SX1041からSD735の南岸に沿って堰SX1047までは氾濫によるシルト層の堆積が幅約5mに及んで検出された。この範囲では護岸等の杭列は無く堤防の堆積もみられなかったのに対し堰SX1047以北では護岸杭列が検出された。

検出された流路のほぼ中央に位置し、方向変換点にアーチ形の堰SX1047が構築されている。SX1047の北岸には取水路の水口SX1050とそこから発した水路が検出された。

SX1040

調査区西際でSD735の北岸に構築された施設である。SX735の北岸は氾濫によって度重なり洗い流されたように段状となっている。SD735の北岸に沿った方向に径3～5㎝、長さ2.3m以上の2本の横木を据え、その間に小枝を間隔を置いて立て並べている。小枝は下層の黒色粘土に突き刺さったものがあるが、大半は黒色粘土が洗い流されて堆積した粗砂層中に下端が止まる。 小枝の間には萱状もしくは樹皮を小枝と同方向に挟み込んでいる。横木と護岸杭列が近くで平行しているが、一連のものか、前後関係がある別々の施設か判然としないが、後者の可能性が高いと思われ、堤が決壊した後に用いられた水防施設とみられる。

7次調査でも類似の水防施設がみられた。数本の横木に粗朶と萱状もしくは樹皮を縫い込むように立て並べ、その上に土や粘土を踏み固めて堤を構築したものと考えられる。縦に打ち込まれた粗朶は細いので異なるが、7次調査では近世の堤の修復法でいわゆる「屏風返し」とよばれる、下敷きが検

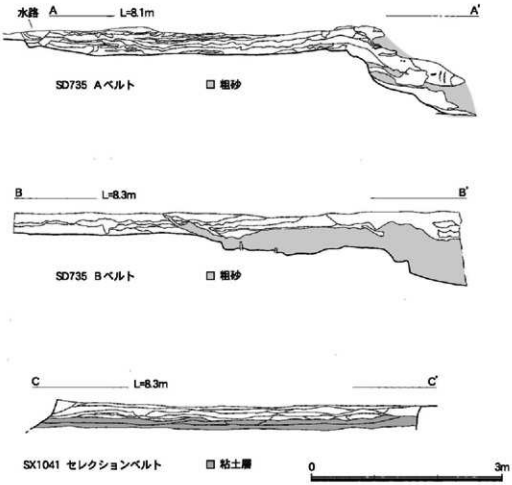


Fig.25　SD735土層断面図

出された（SX773）。これらの水防に関した技法は「図録　農民生活史辞典」柏書房株式会社　1979に拠る。

②　堰

SX1047

7次調査で検出された堰SX744の南側約12mに位置する。SD735が北側へ向きを変えていく変換点に構築され、その前面はSD720と切り合っている。

流路がカーブし南側に広がった幅約12mにわたってアーチ状に竪杭を打ち込み構築している。流路幅が広がった南岸にはSX1047の延長でSX1049が築造され、その前面に約4mの延長でSX1048が検出された。SX1048は水流の攻撃面となる南岸を補強したもの、もしくは時期的に古い堰の残骸等の可能性が考えられる。この範囲は横木として渡した粗朶が流路中央部より良く残っていることから南岸の補強や修築を重ねたことが窺える。また、背後のSX1059は延長2mに及んで細い杭に粗朶を渡したものであるが、規模や岸際に位置していることから堤の欠所を修築したものと思われる。

この南岸のSX1049の北端から護岸の杭列が北側へ延長していく。護岸杭列に渡した粗朶は堰SX1047に接した部分のみ残っている。

北岸は取水が行われたものと考えられ、水口周辺には水流が巻き込み削りだした不整形の落ち込み

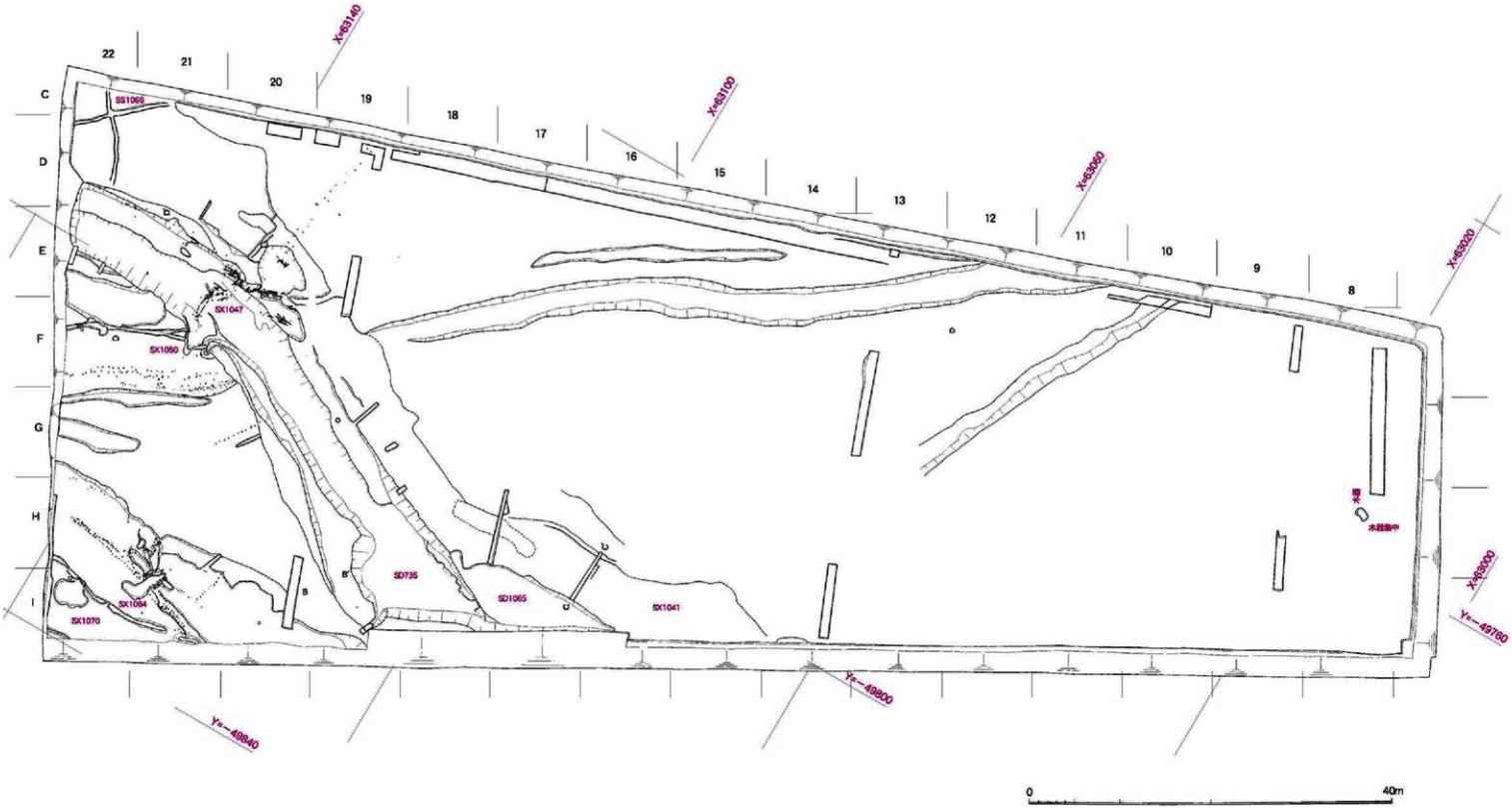


Fig.26 第Ⅱ面遺構全体図（1/400）

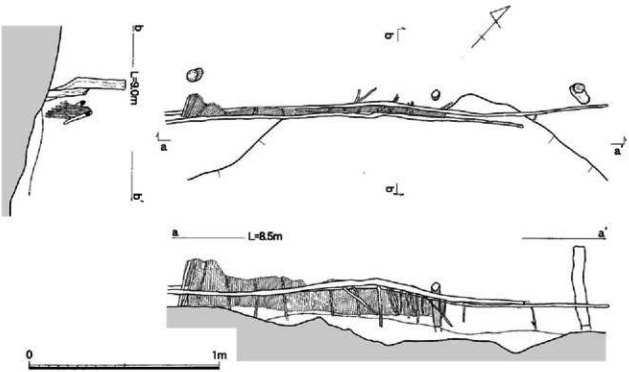


Fig.27　SX1040実測図（1/20）

が検出された。水口前面の落ち込みとみられるSX1050の上端に接して水路の溝も検出された。

堰の構造は２列の竪杭を櫓状に組み、間に長目の横木や粗朶をわたし、前面には樹皮状のものが敷かれている。竪杭の下端は深さ約1.5mまで達しているが、SD735の埋土である粗砂層の下面とほぼ同レベルである。従って、粗砂がある程度埋まった後打ち込まれたものと考えられ、以前の堰は流された可能性もあるが、現況では７次調査の堰SX743のように修築、補強を重ねた状況はみられない。

SX1050

堰1047の北岸への延長に接して検出された略円形プランの落ち込みである。その位置や形状から水口前面に水流によって形成された落ち込みとみられ、周辺にも不整形に削り込まれた痕が残る。

SX1050の深さ約40㎝内には細かい粗朶が多量に埋まり、その中に木器や人形が含まれていた。

SX1050から二股に分岐した幅30㎝の水路が合流し北側へ延びている。分岐した水路は切り合っている可能性もあるが、深さは４～６㎝程度で浅い。その方向は７次調査の中央部で検出された畦畔の方向とほぼ同じである。

Fig.28 SX（堰）1047全体実測図（1/80）

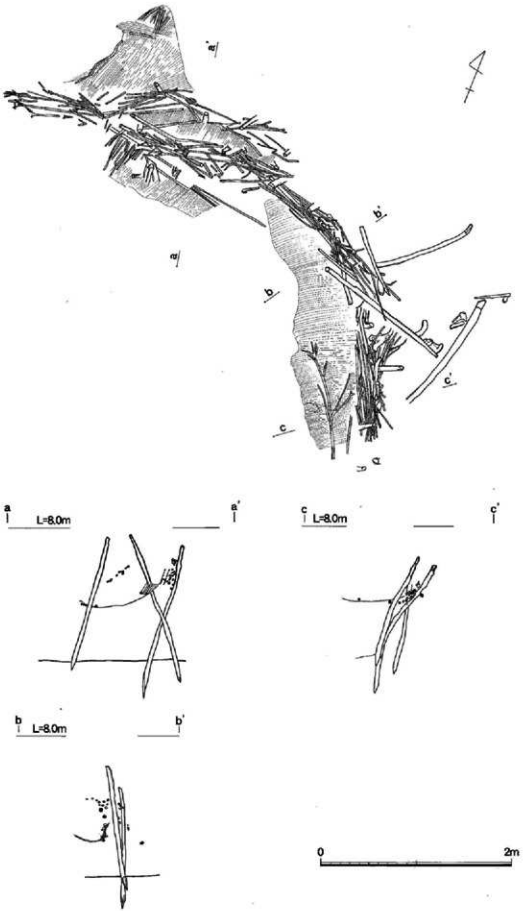


Fig.29 SX（壕）1047平面、断面図（1/40）

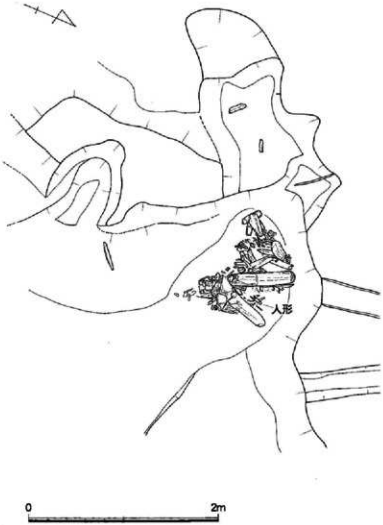


Fig.30 SX（水口）1050平面図（1/40）

出土遺物

1～10は須恵器坏身である。6～10は高台が付く。6、7は完形で、他は5が半分遺存する以外は完形に近い。1は堰SX1047の南岸寄りの前面（上流側）から出土。体部外面に「香」の細字による墨書がある。底部にはハケメ調整を施す。2も1の近くから出土。外底のほぼ中央に「依」の墨書がある。体部が比較的開いて立ち上がる。5は大型の坏で、底部と体部の境の屈曲が鋭い。6はSD735の調査区西際寄りから出土。外底部の端に「香」の墨書がある。7の底部は丸みをもつ。8の底部と体部の境の屈曲は鋭く、高台はその境より内側に付く。9は堰SX1047の前面、北岸際から出土。外底部の端寄りに「美」の文字が墨書されている。11は堰1047の前面から出土した須恵器長頸壺である。約半分が遺存する。

12～15は土師器甕である。13は堰SX1047より下流の比較的上部の砂層から出土した。ハケメが明瞭に残る外面体部の上位に人面を描く。14は取手、15は堰SX1047の背後（上流側）から出土し、完形である。内外面に煤が付着している。

16～19は堰SX1047、1048の柵に絡んで出土した。16は約半分の遺存である。底部に丸みをもつ。

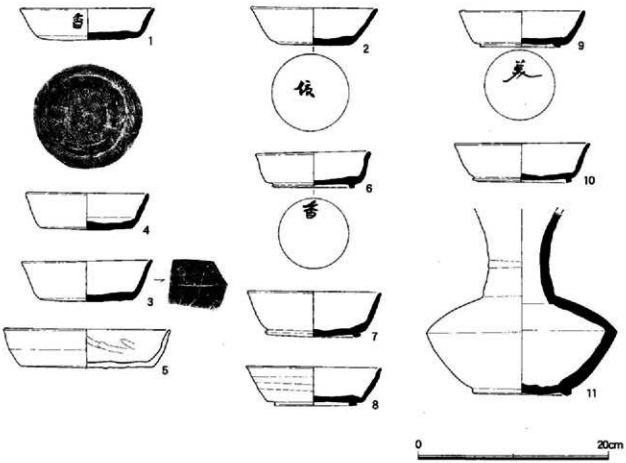


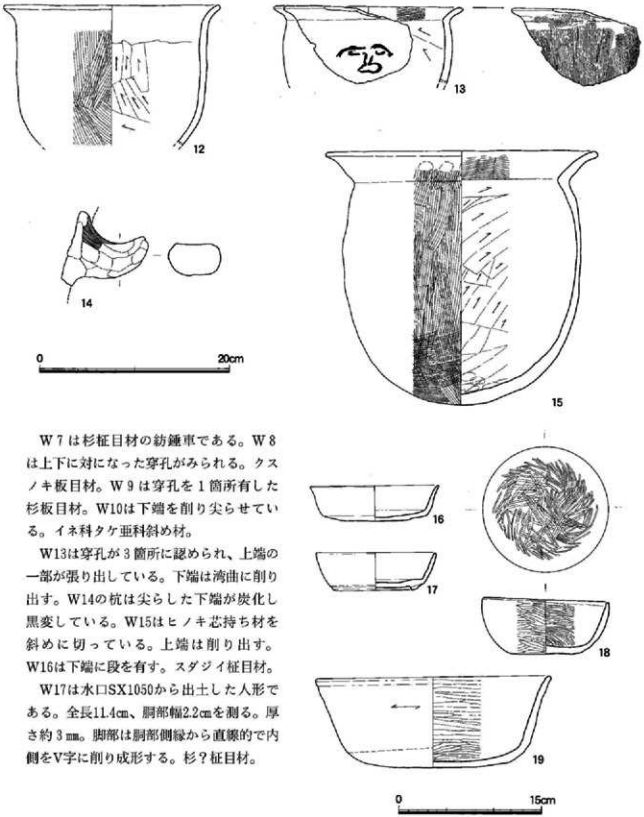
Fig.31 SD735出土須恵器実測図（1/4）

17は完形の須恵器である。18は完形に近い内黒土器である。内底部は概ね螺旋状にミガキを施し、体部は下から上に向かって斜位から横位に変わる。外面は砂粒が多く浮き出て、ミガキによる擦痕が著しい。外底部は不規則に、体部は内面同様に斜位から横位に磨いている。外面淡黄褐色を呈す。19は内外面にヨコナデを施す。内面の体部下位はヘラ状のものを当て擦痕がミガキ状に擦痕がみられる。内底部は部分的に黒変し、体部は淡赤色をおびた灰白色を呈す。外面は器面が剥落し、白色に近い。

木器

W１～W６はSD735の流路内、W７～W12は堰SX1047、1048、W13～W16は水口SX1050から出土した。

W１は曲物を綴じる榊と思われる。W２は曲物底板である。周縁に綴じ孔がみられる。ヒノキ板目材。W３は上下端に各２箇所、穿孔がみられる。表面に十字状の刻み有り。杉板目材。W４も杉板目材である。W５の杭はウツギ属の芯持ち材。W９は樹皮が付いた材の上下端に削った痕跡がみられる。裏面は剥落している。材質はコナラ属クヌギ節。



W７は杉柾目材の紡錘車である。W８は上下に対になった穿孔がみられる。クスノキ板目材。W９は穿孔を１箇所有した杉板目材。W10は下端を削り尖らせている。イネ科タケ亜科斜め材。

W13は穿孔が３箇所に認められ、上端の一部が張り出している。下端は湾曲に削り出す。W14の杭は尖らした下端が炭化し黒変している。W15はヒノキ芯持ち材を斜めに切っている。上端は削り出す。W16は下端に段を有す。スダジイ柾目材。

W17は水口SX1050から出土した人形である。全長11.4cm、胴部幅2.2cmを測る。厚さ約３mm。脚部は胴部側縁から直線的で内側をV字に削り成形する。杉？柾目材。

Fig.32　SD735出土土師器実測図（1/4）

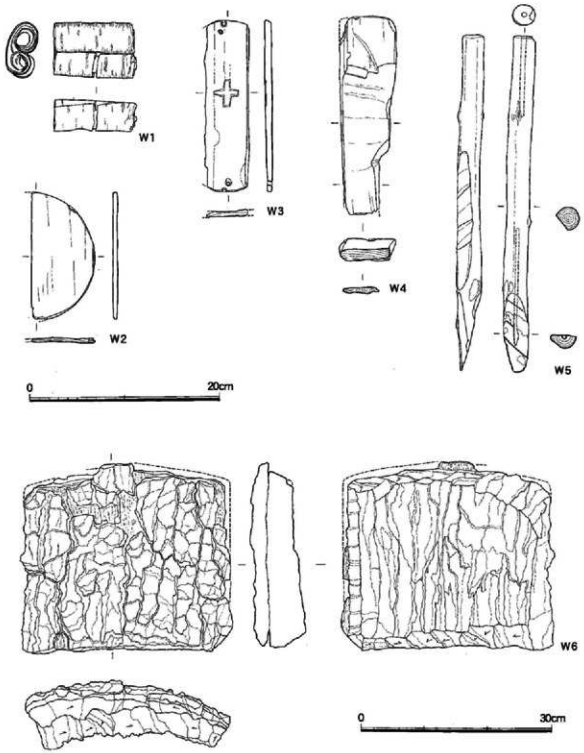


Fig.33 SD735出土木器実測図1 (1/4・1/6)

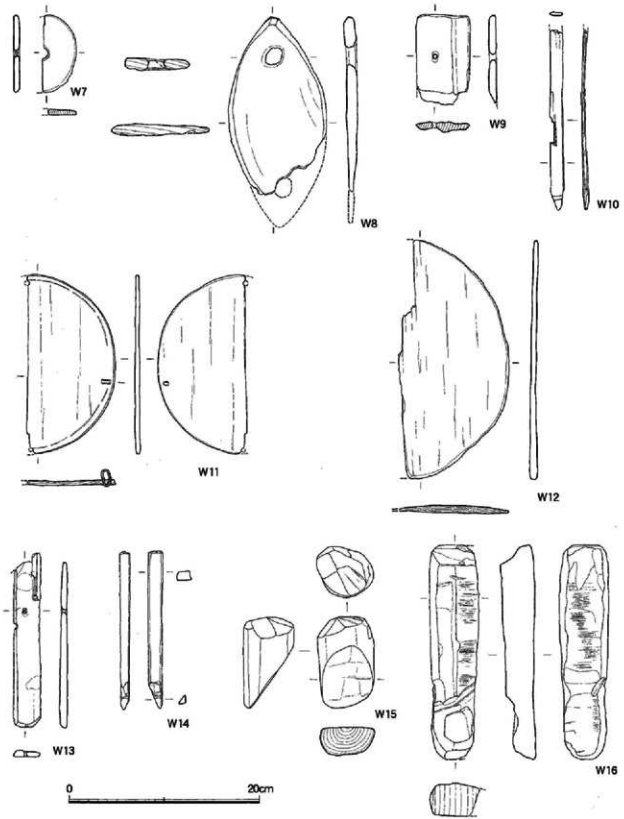


Fig.34　SD735出土木器実測図２（1/4）

SD1061、SX1064

調査区北西部の低くなり砂が厚く堆積した位置で検出された。7次調査で検出されたSD734の南側延長と考えられる。

幅約1mの土手が両岸に築かれているが、南岸は流され、杭列も不明瞭となっている。土堤の盛土はほとんど残らず、水路SD734の下底から土堤上端まで10cm程度の高さである。土堤には径5cm以下の丸杭のほか水口には大きめの割材が2、3列打ち込まれ、土堤の方向に沿って、粗朶や樹皮が敷かれていた。粗朶は杭列に絡ませた近世の「杭柵」に類似している。

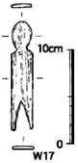


Fig.35 SX（水口）1050出土人形実測図（1/4）

この水路SD734を堰き止め用水を北西方向へ流した水口SX1064が検出された。SD734に直交して長さ約1mの板材が出土し、これによって堰止めたものと考えられる。北側は板材の他、長さ130cm以上の杭材も平行して出土した。板材の間隔は約1.7mあるが、端部の杭から水口幅90cm程度とみられる。堰き止められた用水は北西から北側へ流水した痕跡が認められた。

水口周辺の南岸は土堤が流され切られた状況で南側田面から流水してきた痕跡がみられた。用水もしくは氾濫した水を落としたとも考えられる。その位置から南岸の土堤と杭列は北岸と平行せず、東側へ湾曲して延長していく。補強によって幅を拡張したことも考えられるが、杭列は洪水によって流されたと考えられ断続的になっている。

水口から約4m南西側にSD1061に直交した杭列を検出し、畦畔に伴うものとみられる。

出土遺物

W18はSD1061の流された土堤の杭に絡み出土した。二股鍬で全長47.6cmを測る。方形孔を有し、着柄角度は45°もしくは51°程度である。W19も土堤から出土した全長51cmの杭である。W20は土堤1062から出土。上半部が形状を保っている可能性があり、又鍬の刃部か。W21～W29も土堤から出土。W21は下端を削りだし半裁している。材質はアワブキ属芯持ち材。W22～W27は杭である。W25はスダジイ芯持ち材、W26はイヌガヤ芯持ち材、W27はガマヅミ属芯持ち材、W25はスダジイ割り材、W26はシキミ芯持ち材、W27はスダジイ芯持ち材である。W28は全長54cmの完形に近い角材である。ツブラジイ材。W29はツブラジイ芯持ち材の杭である。

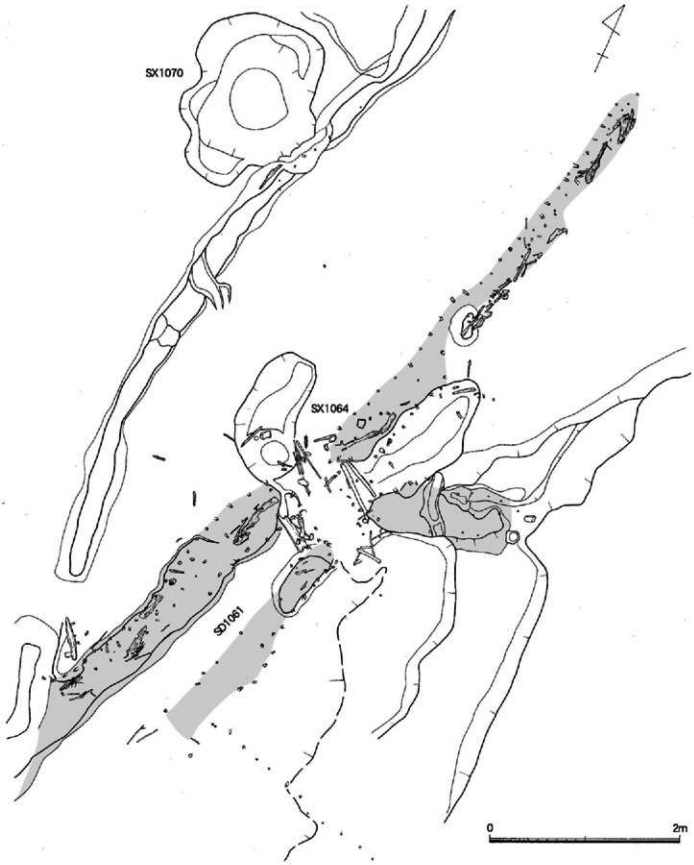


Fig.36 SX（水口）1064、SX1070周辺実測図（1/80）

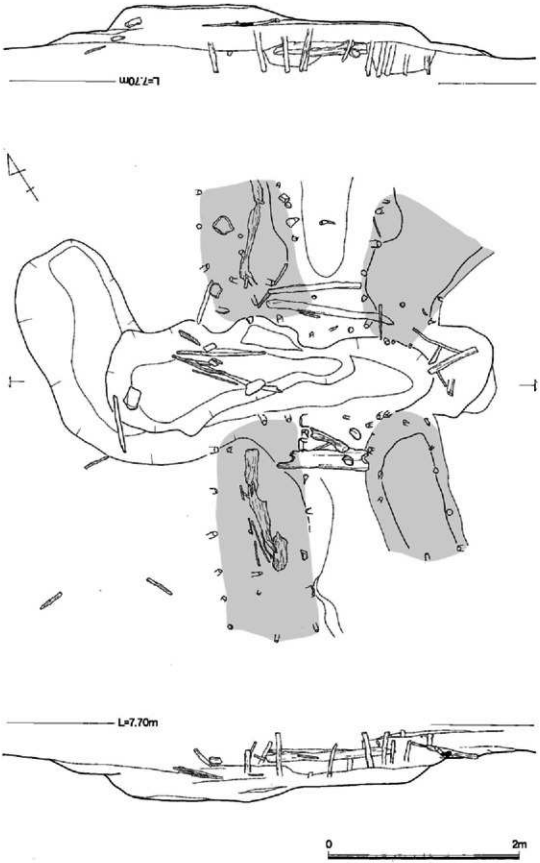


Fig.37 SX（水口）1064実測図（1/40）

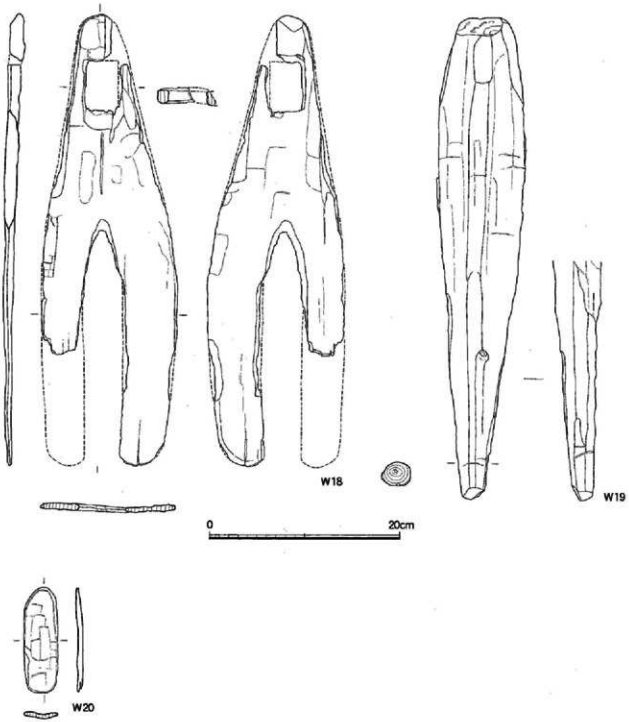


Fig.38　SX（水口）1064周辺出土木器実測図１（1/4）

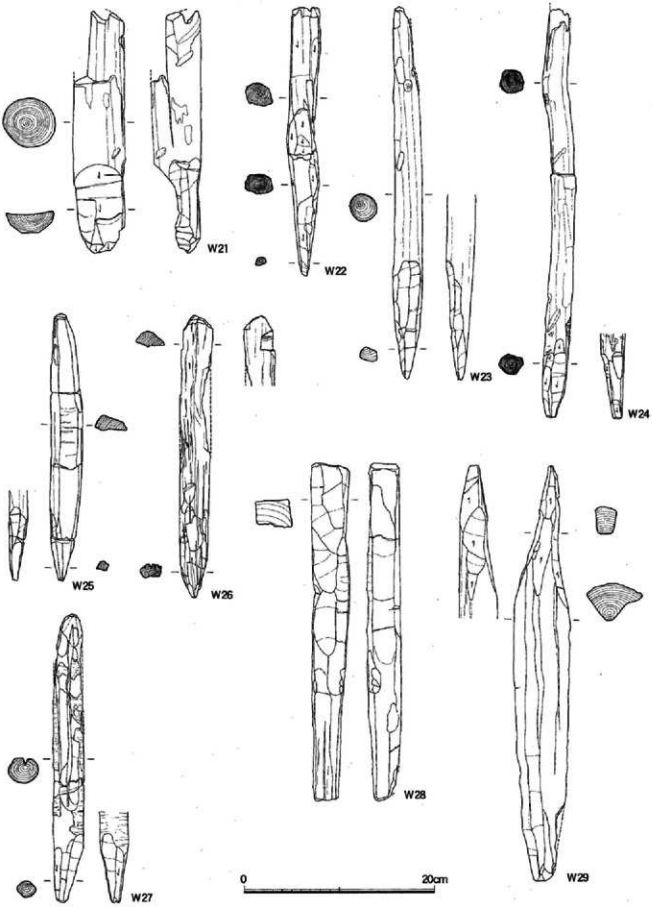


Fig.39 SX（水口）1064周辺出土木器実測図２（1/4）

SX1070

調査区北西部のSD1061に平行した畦畔を崩し田面に流れ込んだ流路の痕跡である。径3.0～3.8mの楕円形プランを呈し、深さは30cm程度である。当初７次調査で検出されたSX737のような「置簀」とも考えられたが、浅く、水路からの流水ではないことから、洪水によって一部崩れた「欠所」から流れ込んだ痕跡と考えられた。また、その欠所を修復した杭列も検出された。

畦畔はその方向や形状から７次の南西部で検出された畦畔23、25と一連のものとみられる。これらの畦畔は７次のSD734やその延長とみられる８次のSD1061に概ね平行しながらも蛇行がみられる。SX1070に伴う畦畔１も湾曲しSD1061に接する。

調査区南際　木器集積遺構

調査区南半の遺構検出中に黒灰粘土中からW33を含む木器が５点程出土した。掘方は検出できなかった。

調査区南際木器集積遺構

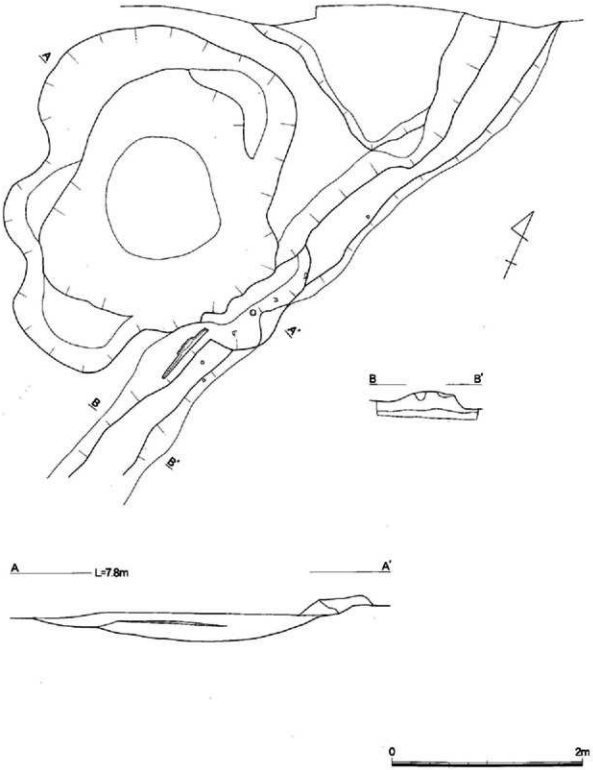


Fig.40 SX1070実測図（1/40）

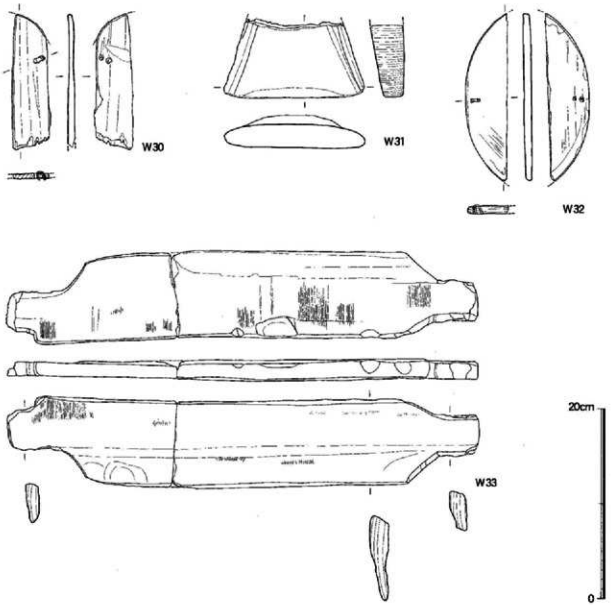
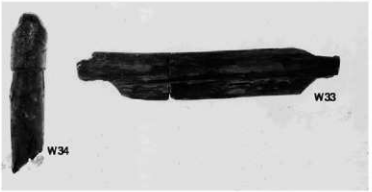


Fig.41　第Ⅱ面出土木器実測図（1/4）



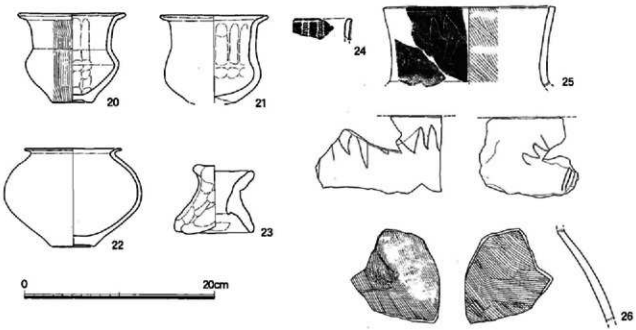


Fig.42 第Ⅱ面出土弥生土器実測図（1/4）

その他の出土遺物

W30はSD735の北側から出土した曲物底板である。ヒノキ斜め材。W31は1面のSD720下部が2面に残ったSD1045から出土した下駄の歯である。サワラ柾目材。W32は調査区東際の水抜き用の測溝から出土した曲物底板である。綴じ紐が残る。ヒノキ板目材。W36は調査区南際で加工材が集まっていた中から出土した。遺存長50cm、最大幅9cmを測る。両端を削りだし取手もしくは縄掛け状の突起を造り出す。縦に細かい条線がみられる。織機の可能性があり、断面が刃部状であることから筬とも思われる。

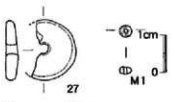


Fig.43 第Ⅱ面出土紡錘車、ガラス玉実測図（1/3・1/1）

7次調査のSD746からも同様の木器が出土している。スダジイ板目材。W34は堰1047北側の水路付近から出土した。括れを削りだし、下端は炭化している。径2.7cm、サカキ芯持ち材。

その他弥生、古墳遺物

下層の遺物が混入したものである。20～22は調査区東際の排水用の側溝を掘った時に出土。23の器台はSD735内から出土。24は縦位の貼り付けた突帯に細かい横線の刻みを施す。手焙形土器の可能性がある。25は調査区北西部の土堤1058から出土。古墳初頭の精製土器である直口壺に線刻を描いている。①はジグザク状に右上がりの細い線刻を描き、②は右下の頸部近くに4本の平行線、中央に短いジグザク、左際に蛇行した1条の線を描いている。龍のデフォルメされた線刻とも思われる線刻は焼成前とみられる。内面は左上がりのハケメを残す。26も近くの土堤SX1062から出土。壺の体部に比較的太い3条の、鳥の三足に似た線刻が描かれている。 27は3面までの堆積土中から出土した土製紡錘車である。M1はSD735出土のガラス玉。

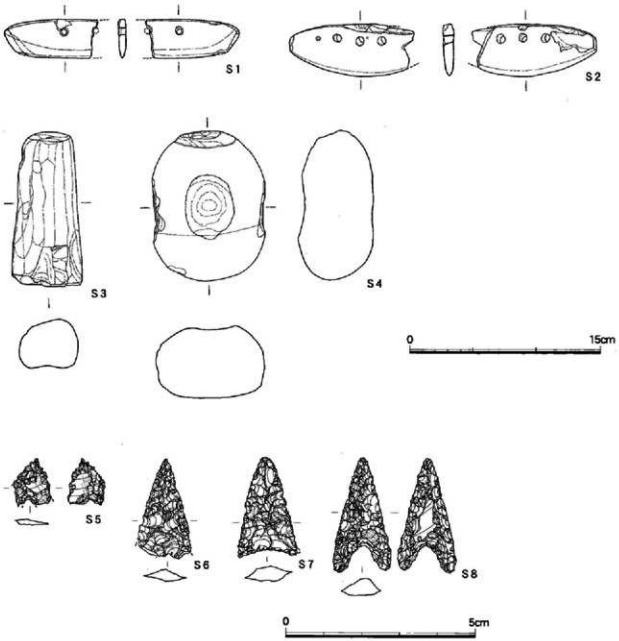


Fig.44　第Ⅱ面出土石器実測図（1/3・1/1）

（石器）

2面の古代より以前の石器の混入である。S1はアズキ色の輝緑安山岩製、S2も安山岩製の石包丁である。S3は上端に敲打痕を残し、下端は折れて欠損している。右側面が滑らかに磨かれているが、他はアバタ状の荒れた面となっている。S4は中央部が剥落したように凹み、上端及び、左右側縁に敲打痕がみられ、側縁は抉れている。安山岩製。S5～S7は黒曜石製の石鏃である。

4．第Ⅲ面の調査

1）調査の概要

第Ⅲ面は弥生時代から古墳時代前期の時期である。遺構面は地表下－1.8m～－2.5mの深さ、標高6.95m～7.7mで検出した。北側第7次調査区から続く微高地が南東から北側に広がり、遺構面の高さは調査区の北側から東側が高く、南西側は浅い谷部となる。遺構面は微高地部では明灰黄色粘質シルトである。遺構は微高地上を中心に集落遺構を確認したが、南側低地部では水田面らしき遺構と、杭列などを確認した。また東側は高所部ではあるが、後世の地形改変を受けたのか、風倒木痕など以外には、明確な遺構は確認出来なかった。検出した主な遺構は掘立柱建物、土坑、溝状遺構、水田面、堰跡などである。

2）遺構と遺物

① 掘立柱建物（SB）（Fig.45）

北側から中央部にかけて広がる微高地上で検出した。調査時に確認、その後図上復元出来た建物は合計35棟であるが、第7次調査区まで含めると合計56棟となる。他にも柱根や礎盤が残る柱穴があるが、建物として復元出来なかった。建物の規模や柱・礎板の概要についてはFig.58～61、Tab.3・4を参照のこと。

SB1248（Fig.49、PL.49・53）

E-11・F-11区で検出した主軸を北西方向に取る柱間1×2の建物で、SB1402と重複する。SB1402よりは柱は深く、切り合いから、SB1402より新しいか。平面形はほぼ円形で、直径0.5～0.6mを測る。各柱穴には、板状の礎板と柱が残っていた。

出土遺物（Fig.58、PL.96） 各柱穴から弥生時代後期頃の複合口縁壺土器片や、黒曜石剥片などが少量出土している。

SB1249（Fig.49、PL.50・53）

H-17区で検出した主軸を北西方向に取る柱間1×2の建物で、SB1250を切る。平面形はほぼ楕円形で、直径0.5～0.8mを測る。一部の柱穴には、柱痕跡と柱根が残っていた。

出土遺物（Fig.57） 各柱穴から弥生時代前期～後期頃の土器片や、黒曜石剥片、磨製石斧片が少量出土している。

1は弥生時代後期の甕胴頸部。調整は内外面ハケ目。

SB1250（Fig.49、PL.50）

H・I-17区で検出した主軸を東西方向に取る柱間1×2の建物で、SB1249に切られる。平面形は楕円形から不整形で、直径0.5～0.9mを測る。底面の深さはほぼ揃う。一部の柱穴には、柱痕跡が残っていた。

出土遺物（Fig.57） 弥生時代前期以降の土器細片や、黒曜石剥片が少量出土している。

2は弥生時代前期の円盤貼付けの底部片。底径8.2cmを測る。底部は若干上げ底で、調整は板ナデ。3は壺型の鉢口縁部。調整はナデと細かいハケ目。

SB1251（Fig.50、PL.50・53・54）

H・I-14・15区で検出した主軸を東西方向に取る柱間1×2の大型建物。柱穴は大きく深い。柱穴平面形は隅丸方形、長方形で、直径0.8～1.3m、深さも0.4～0.5mを測る。一部の柱穴には、柱痕跡や礎板が残っていた。

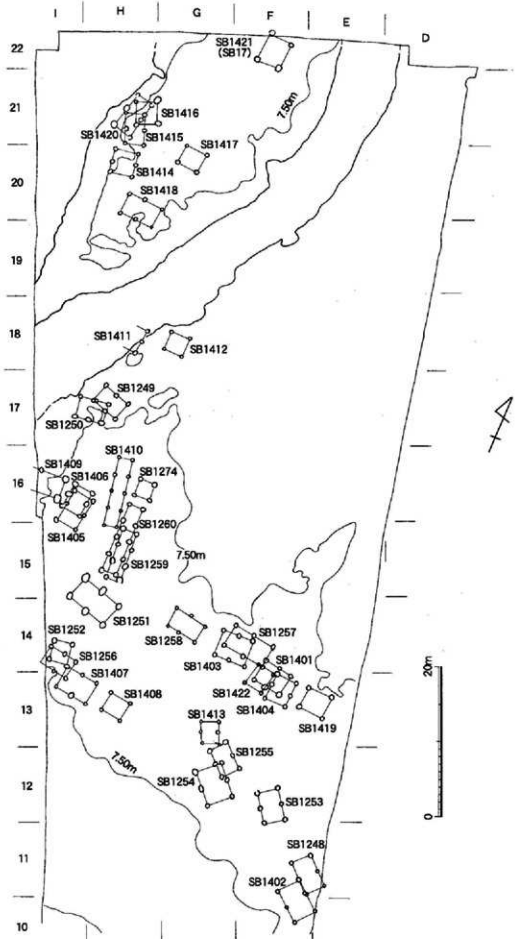


Fig.45　掘立柱建物配置図（1/500）

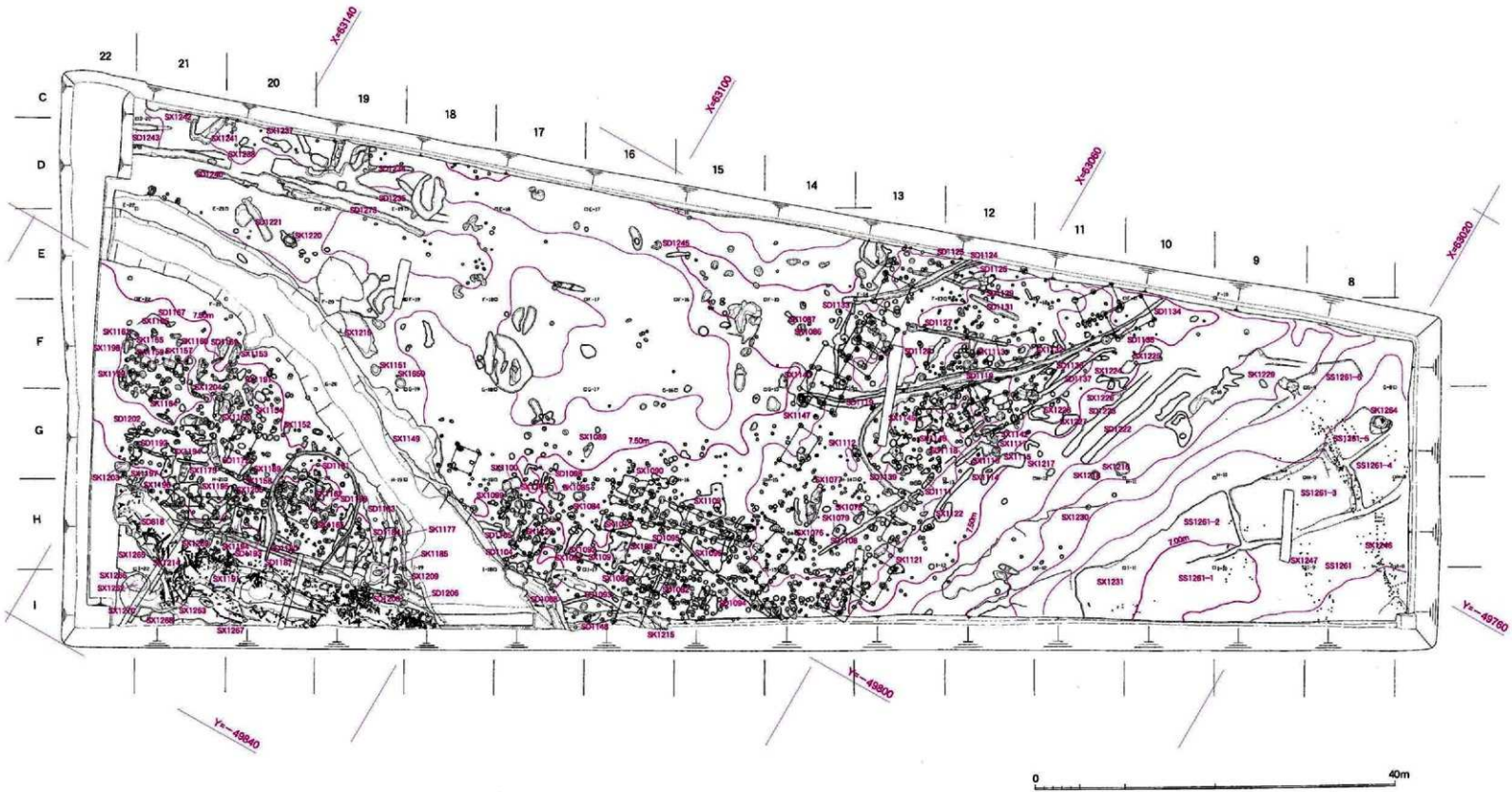
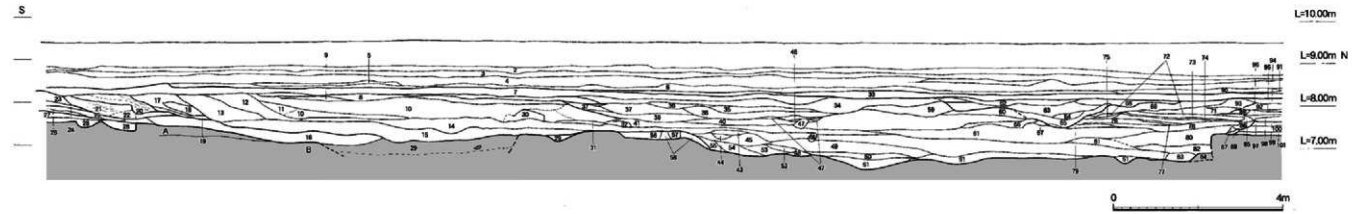
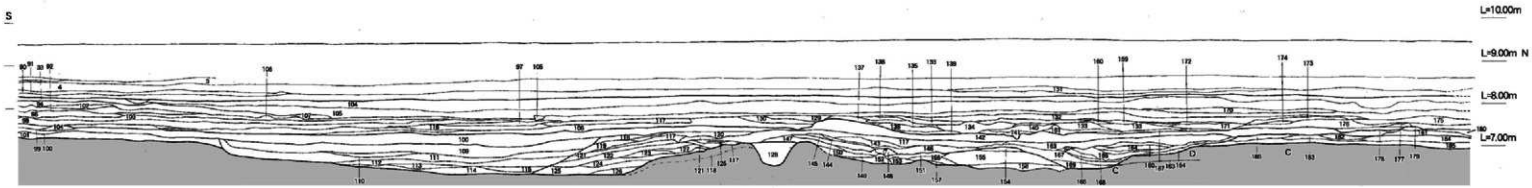


Fig.46 第Ⅲ面遺構全体図（1/400）





調査区西壁土層

1. 表土(草土)
2. 現代水田耕作土
3. 水系砂土
4. 黒褐色粘砂質じり砂質土
5. 暗灰黄色粘砂
6. 黄灰色砂砂
7. 灰色砂質粘土
8. 灰黄色砂砂で砂状に薄く7を挟む
9. 明黄褐色粘砂(緑化跡分含む)
10. 灰白色砂砂で流黄色小粘砂を間に薄く挟む(右下がりのラミナ)
11. 灰黄色砂砂で白化の間に7を薄く挟む
12. 灰黄色砂砂で灰白粘質砂砂を互層状に薄く挟む
13. 灰黄色砂砂で黄灰色粘質砂砂を薄く層状に挟む
14. 黄褐色粘砂と灰白粘質砂の混合
15. 黄褐色砂(上面に酸化鉄分が生滞)
16. 黄褐色砂で下部にオリーブ黒色粘土ブロック混入
17. オリーブ黒色粘質砂(薄く層状に灰黄色粘砂を挟む)
18. オリーブ褐色粘砂(灰黄色粘砂と黒褐色粘土ブロック混入)
19. 灰白粘砂と黄い黄色砂の混合
20. オリーブ黒色粘質砂で灰黄色粘砂を層状に挟む
21. 灰黄色砂砂で流黄色粘砂を互層状に挟む
22. 黄褐色砂で下部にオリーブ黒色粘土ブロック混入
23. 灰黄色粘質砂で薄く灰黄色粘砂を層状に挟む
24. 黄灰色粘砂と灰黄色粘砂の互層
25. 灰白粘質砂砂に灰黄色粘砂混入
26. 黄い黄色粘砂と灰色粘質砂砂の混合
27. 灰色シルト粘土
28. 黄褐色粘砂と灰色粘質砂の混合
29. 黄い黄色粘砂
30. 灰色粘砂に流黄色粘砂混入
31. 明黄褐色粘砂
32. 暗灰色粘砂ブロック
33. 黄白粘砂質シルト
34. オリーブ黒色粘質シルト
35. 暗灰黄色砂質シルトに灰黄色粘砂シルト少量混入
36. オリーブ黒色粘質粘砂に灰黄色粘砂混入
37. 黄白色粘砂砂
38. 明黄色粘砂と灰色粘土の混合
39. 灰オリーブ粘砂
40. 黄い黄色中粘砂
41. オリーブ褐色粘砂
42. 黒灰色粘砂ブロック
43. 暗灰色砂質粘土
44. オリーブ灰色粘砂
45. 暗灰色粘土で灰オリーブ粘砂細混入
46. 黄灰色粘砂にオリーブ黒色粘土混入
47. 明黄褐色粘砂
48. オリーブ黒色粘土ブロック
49. 黄い黄色粘砂で褐色鉄分層が開層で入る
50. 黄褐色粘砂
51. 灰色粘砂(オリーブ黒色粘土をブロック状に含む)
52. 暗灰色砂質粘土
53. 灰色砂
54. 灰色砂で暗灰色砂質粘土混入
55. 灰黄色砂と40ブロックの混合
56. 褐鉄色粘砂混じり粘土
57. オリーブ黒色砂混じり粘土
58. 黒色粘土
59. 黄い黄色粘砂
60. 灰黄色粘砂
61. 黄い黄色粘砂
62. 黄白色粘砂に灰黄色粘砂混入
63. 黒褐色シルト粘土
64. 灰色粘砂で60ブロック混入
65. 灰色粘砂
66. 黄褐色粘砂で65ブロック混入
67. 灰黄色粘砂
68. 暗灰黄色粘砂と60の混合
69. 63に灰色粘砂混入
70. 黄灰色と暗灰黄色粘砂
71. 流黄色粘砂
72. 71で71の後に黄灰色粘砂が見層で入る
73. 暗灰オリーブ粘質砂
74. 黄い黄褐色粘砂混じり粘土
75. 流黄色粘砂
76. 黄い黄褐色粘砂
77. 灰色粘砂
78. 黄褐色粘砂と黄い黄褐色粘砂の混合
79. 流黄色粘砂
80. 灰黄色砂(右下がりの堆積)
81. 灰黄色粘砂と黄褐色粘砂の互層
82. 灰色粘砂で灰オリーブ粘砂混入
83. 黒色粘砂ブロック
84. 黒灰色砂質粘土
85. 流黄色粘砂
86. 灰色粘質粘砂
87. 灰オリーブ粘質粘砂
88. 暗灰黄色粘砂砂で砂ブロック混入
89. 灰色粘砂と黄褐色粘砂の混合
90. 灰黄色粘砂混じり砂質土
91. 灰色粘砂と黄褐色粘砂の混合
92. 黄い黄褐色粘砂混じり土
93. 黒灰色と暗灰黄色粘砂
94. 灰色粘砂と黄褐色粘砂の混合
95. 暗灰色粘土
96. 灰色粘質粘砂とオリーブ灰粘砂の混合
97. 灰色粘質砂
98. 灰色粘砂混じり粘質土
99. オリーブ黒色粘土
100. 黒色粘土
101. 黒褐色粘質土
102. 流黄色粘砂
103. 灰色粘砂質粘質土
104. 暗オリーブ褐色粘砂
105. オリーブ黒色粘質シルト
106. 灰色粘砂に薄く褐灰色粘土を挟む
107. 灰色シルト質粘土
108. オリーブ黒色シルト粘土
109. オリーブ黒色粘土
110. 黒褐色粘砂流黄色粘砂の混合
111. 暗灰黄色粘砂
112. 暗灰黄色粘砂
113. 黒色粘質砂
114. オリーブ黒色粘砂礫
115. オリーブ黄色砂
116. オリーブ黒色シルト粘土
117. 黒褐色粘質シルト
118. 明褐色粘砂に黒褐色粘質シルト混入
119. 暗褐色粘砂でオリーブ黒色粘土ブロック混入
120. 黒褐色粘砂混じり粘質シルト
121. 暗褐色粘砂
122. オリーブ褐色砂で117を混入
123. 黄褐色粘砂
124. 黒褐色粘土で黄褐色砂を間に挟む
125. 灰色粘砂と暗灰黄色粘砂砂の互層
126. 灰オリーブ砂質土
127. 明褐色粘砂
128. 黒褐色粘砂混じり粘土
129. 灰オリーブ砂質粘土
130. 129に流黄色粘砂ブロック混入
131. 骨色～明灰黄色粘砂
132. オリーブ黒色粘質シルト
133. オリーブ黒色シルト質粘砂
134. 黄褐色砂に132ブロック混入
135. 黄い黄色砂
136. 流黄色粘砂
137. 暗灰黄色粘質砂砂で138少量混入
138. オリーブ黒色シルト質粘砂(やや粘性あり)
139. 黒色粘土
140. 灰色粘砂
141. 黄い黄色粘砂に142ブロック少量混入
142. 黒褐色粘質土(細化鉄分・マンガン沈着・砂か)
143. 明オリーブ黒色粘砂
144. 117で若干砂質が強い
145. 明色粘砂
146. 117と黒褐色粘砂の混合
147. 黒色粘砂混じり粘土
148. 流黄色粘砂
149. 黒色粘土(植物含む)
150. 明色砂
151. 黒色粘土
152. 黄褐色粘砂礫
153. 黄褐色砂に黒色粘土ブロック混入
154. 黒褐色砂質土と155の混合
155. 黄い黄褐色粘砂
156. 明黄褐色粘砂礫
157. 暗灰黄色砂
158. 明褐色粘砂礫
159. 明オリーブ黒色粘砂
160. オリーブ黒色粘質シルト
161. 黄灰色粘砂に灰黄色砂混入
162. 黄い黄色砂に117ブロック混入
163. 黒褐色粘土に砂ブロック状に混入
164. オリーブ褐色砂
165. オリーブ褐色粘砂礫
166. 黄い黄色砂と黒褐色粘土の混合
167. 黒褐色粘土と黄い黄褐色砂の混合
168. 160で灰化現象入
169. オリーブ褐色粘砂礫
170. 暗灰黄色シルト質粘土で粘砂を若干含む
171. 黄い黄色砂
172. 暗オリーブ褐色粘砂
173. 中褐い黄灰色砂混じり粘質シルト
174. オリーブ黒色粘質砂にオリーブ褐色粘砂ブロック混入
175. 黄褐色砂に暗灰色砂質シルト混入
176. 黄い黄色砂
177. 灰色粘砂
178. 灰白色砂と黒色粘土の混合
179. オリーブ黒色粘土に淡黄色砂混入
180. 黒色粘土(砂混じり)
181. 黒褐色粘質砂
182. 黄い黄色砂とオリーブ黒色粘土の混合
183. 灰白色砂と黒色粘土の混合
184. オリーブ褐色砂に黄色粘土少量混入
185. 黒色粘質砂質土
186. 暗灰黄色粘砂礫
187. 灰色粘砂と灰オリーブ粘砂の互層

A. 明灰黄色粘土
B. 黒灰色粘砂質土
C. 黒灰色粘砂混じり粘質土
D. 黄褐色粘砂

Fig.47 調査区西壁土層（1/80）

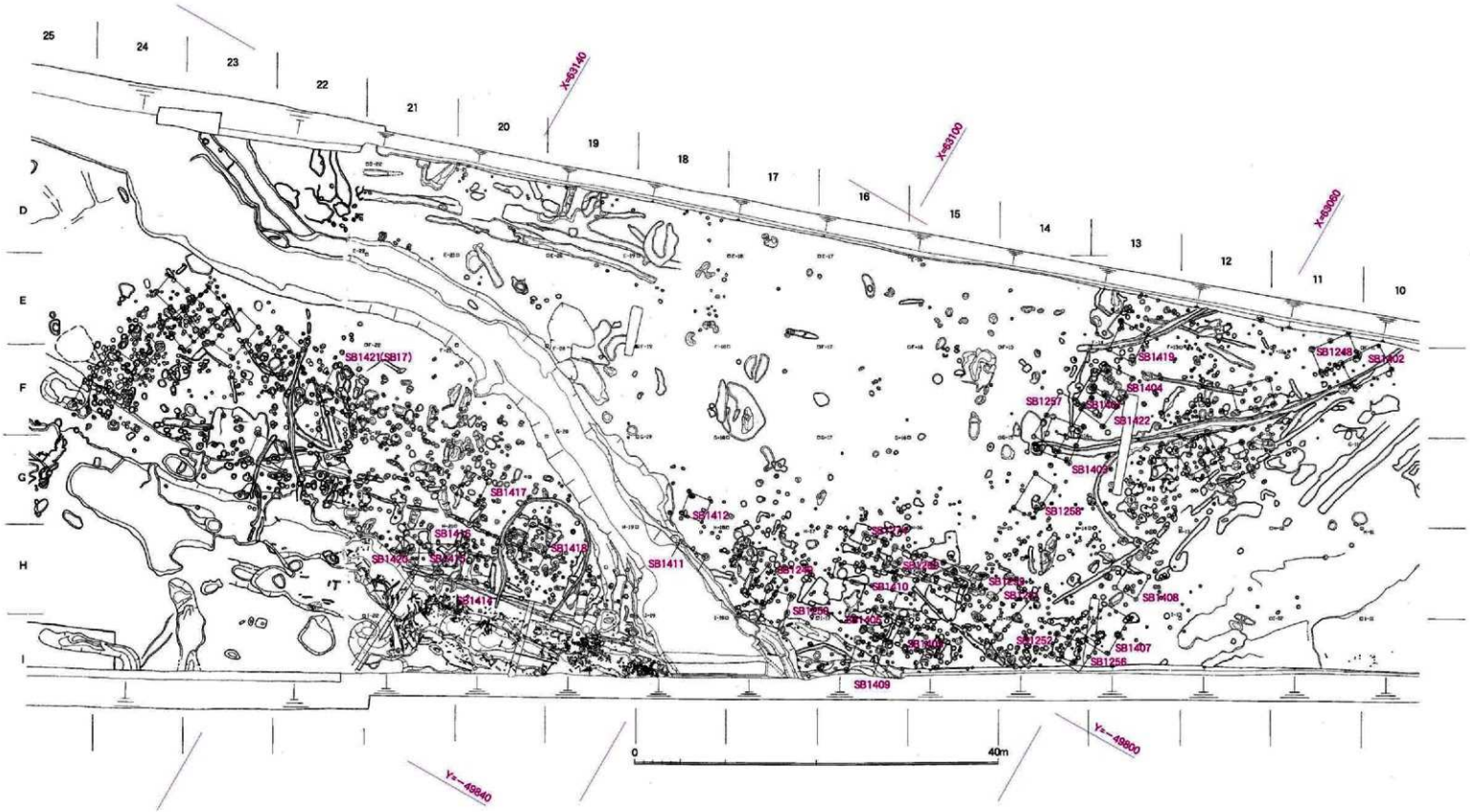


Fig.48　台地部遺構配置図（1/400）

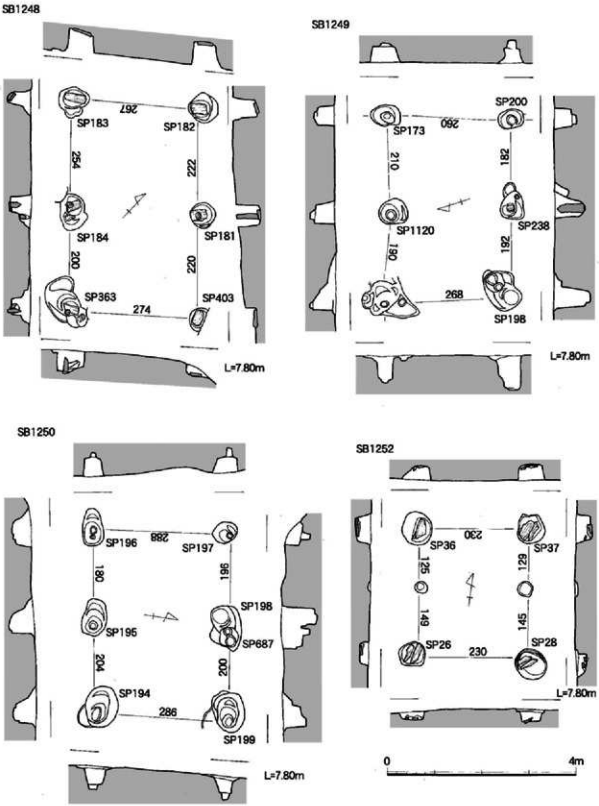


Fig.49 掘立柱建物１（1/80）

出土遺物（Fig.57・58、PL.81・96） 弥生時代後期頃の土器片や、黒曜石剥片などが少量出土している。4は小型の壺で、1/2程の残存である。口縁部が肥厚し、口縁端部には沈線が巡る。復元口径11.8㎝、

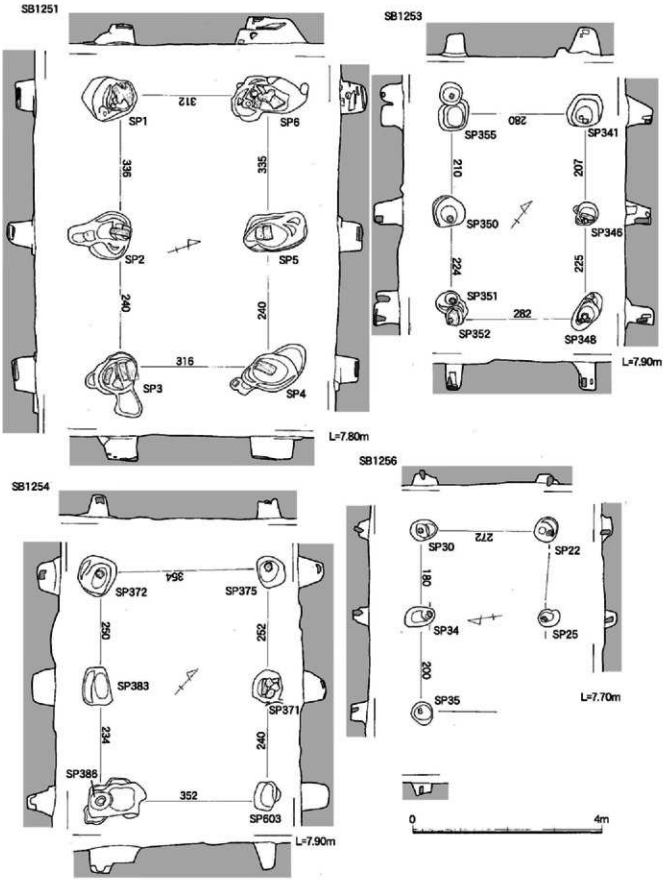


Fig.50　掘立柱建物 2 (1/80)

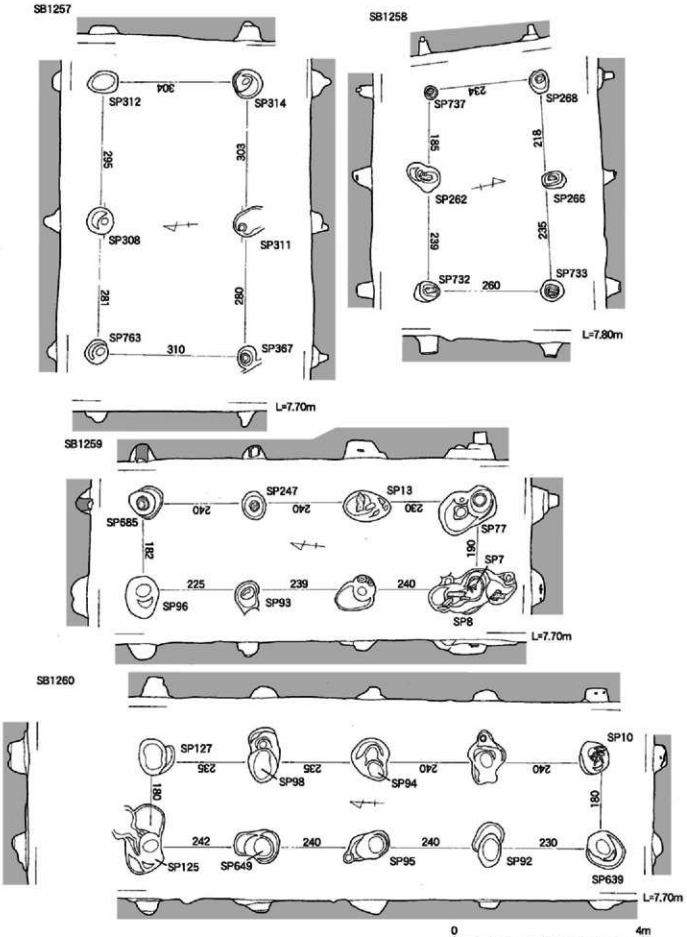


Fig.51 掘立柱建物 3 (1/80)

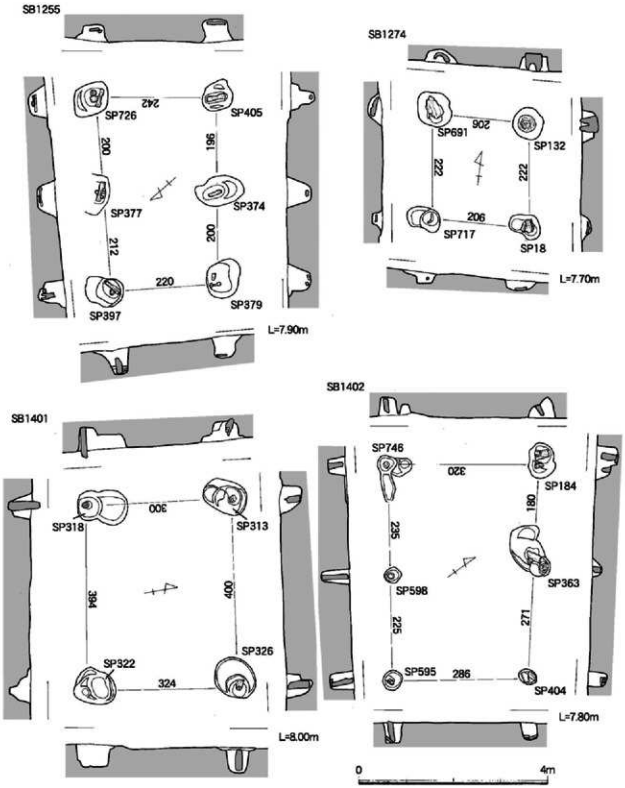


Fig.52 掘立柱建物 4 (1/80)

最大器高12.4cmを測る。調整は内外面ナデで、胴部外面にはヘラによる刻線がある。外底部一部黒斑がある。

SB1252（Fig.49、PL.50）

I-14区調査区際で検出した主軸を東西方向に取る柱間1×1間以上と思われる建物。柱穴は大きく深い。柱穴平面形は隅丸方形、略円形を呈す。直径0.5～0.7m、深さは0.2～0.35mを測る。各柱穴には、割板を2枚並べた礎板があった。**出土遺物**は弥生時代前期～後期の土器片が少量出土している。

SB1253（Fig.50、PL.50）

F-12区で検出した主軸を北西方向に取る柱間1×2間の建物。柱穴平面形は楕円形、略方形を呈す。柱穴直径は0.4～0.9m、深さは0.6m程を測る。一部の柱穴には、割板を1枚置いた礎板があった。

出土遺物（Fig.57・58、PL.97） 弥生時代後期後半頃の土器細片や黒曜石剥片が少量出土。

5は器台の底部1/8片。調整は外面タタキ後タテハケ目、内面はハケ目で、底部端部にはナナメハケ目、縁辺は雑な仕上げである。

SB1254（Fig.50、PL.50・54）

G-12区で検出した主軸を北西方向に取る柱間1×2間の建物。柱穴平面形は不整円形、略方又は長方形を呈す。直径は0.6～0.8m、深さは0.5～0.65m程を測る。一部の柱穴には、割板を何枚か敷いたものと、柱根が残るものがある。

出土遺物（Fig.57・59、PL.81・97） 各柱穴から弥生時代後期後半頃の土器細片と黒曜石剥片が少量出土している。

6は胴部が丸みを持つ小型の甕で、ほぼ完形。調整は、胴部外面上半はハケ目、下半がケズリで黒斑がある。内面は板ナデ、口縁部は外面ヨコナデ、内面はハケ目後ナデ。7・8は甕。7は「く」字状に口縁部が外反する小片。内外面ハケ目、口縁端部周辺はヨコナデ。8は胴部片で下半に三角突帯が巡る。調整は外面ハケ目、内面下半は板ナデ、上半はヨコハケ目である。9は手捏のミニチュア土器鉢。1/4片で復元口径7.8cm、器高5.8cmを測る。

SB1255（Fig.52・59、PL.52・54・97）

G-12・13区で検出した主軸を北西方向に取る、柱間1×2間の建物。柱穴は一部SD1119に切られる。柱穴平面形は楕円形から、略方又は長方形を呈す。直径は0.6～1m、深さは0.4～0.6m程を測る。各柱穴には、割板と柱根が残っていた。**出土遺物**は各柱穴から弥生土器細片と黒曜石剥片が少量出土している。

SB1256（Fig.50）

I-13・14区で検出した主軸を東西方向に取る柱間1×2間と思われる建物。SB1252と重複する。柱穴平面形は楕円形か不整円形を呈す。直径は0.4～0.6m、深さは0.2～0.4m程を測る。各柱穴には、割板と柱根が残っていた。

出土遺物（Fig.57） 弥生時代後期頃の土器細片が少量出土している。

10は器台底部小片。復元底径12.6cmを測る。調整は体部外面タテハケ目後ナデ、内面はハケ目後ナデで、底部はヨコナデである。

SB1257（Fig.51、PL.52）

F・G-14区で検出した主軸を北西方向に取る柱間1×2間と思われる建物。SB1403と重複する。柱穴平面形は楕円形か不整円形を呈す。柱穴直径は0.5～0.6m、深さは0.2～0.4m程を測る。各柱穴には割板と柱根が残っていた。

出土遺物（Fig.57） 弥生後期頃の土器細片が少量出土している。

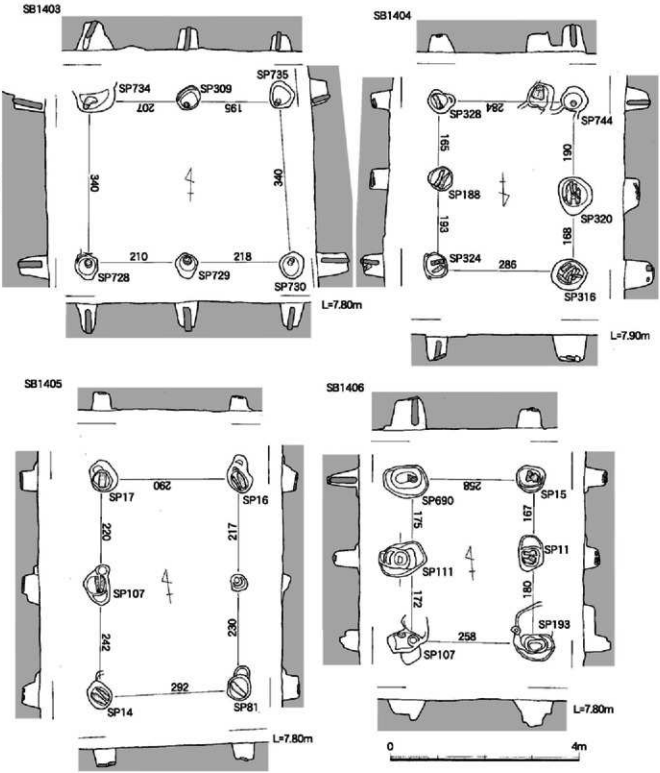


Fig.53　掘立柱建物５（1/80）

11は甕口縁部小片。調整は外面ナデ、内面はヨコハケ目である。12は高坏脚部１/10片。調整は外面ナデ、内面はヨコハケ目後ナデ。

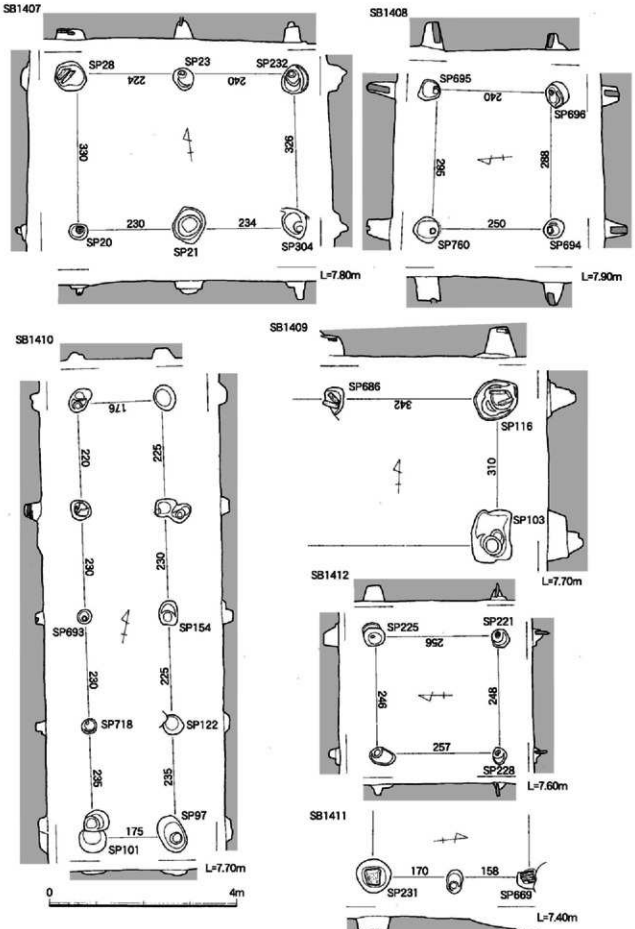


Fig.54 掘立柱建物 6 (1/80)

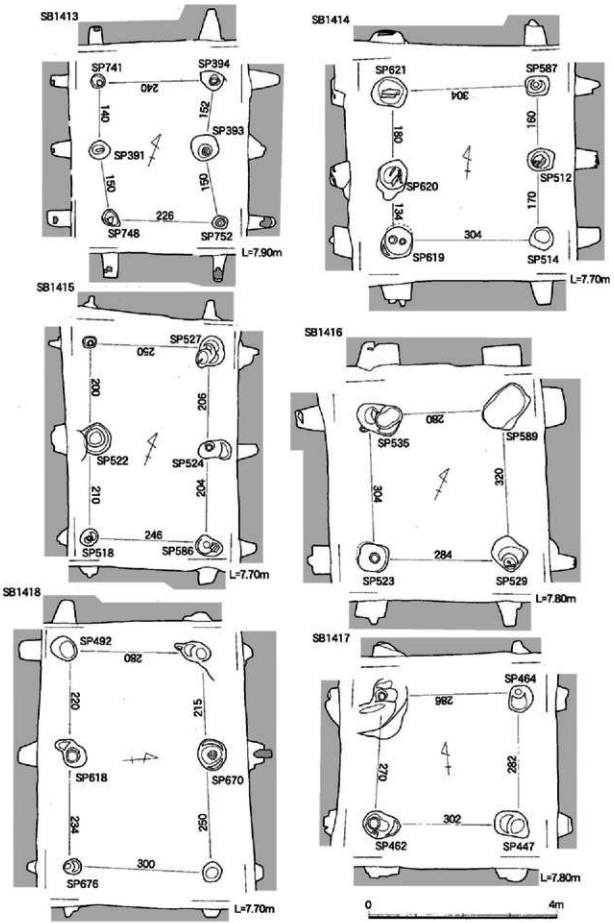


Fig.55　掘立柱建物７（1/80）

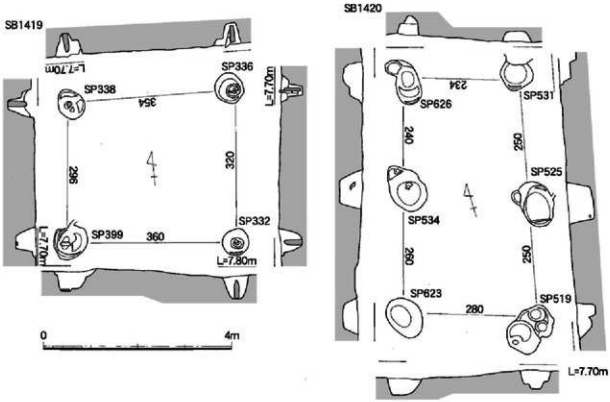


Fig.56 掘立柱建物8 (1/80)

SB1258 (Fig.51、PL.52・54)

G-14区で検出した主軸を北西方向に取る柱間1×2間の建物。柱穴平面形は楕円形か不整円形を呈す。直径は0.3～0.6m、深さは0.3～0.4m程を測る。一部の柱穴には柱根や礎板が残っていた。

出土遺物 (Fig.57) 弥生時代中期頃の土器細片が少量出土している。

13は高坏脚部小片。調整は内面は摩滅するが、外面はヨコナデで丹塗り。

SB1259 (Fig.51、PL.51・54・55)

H-15区で検出した主軸を南北方向に取る柱間1×3間の建物。SB1260と重複する。柱穴平面形は楕円形か不整円形を呈す。直径は0.5～1.0m、深さは0.2～0.6m程を測る。一部の柱穴には直径30cm近い柱根が残る。

出土遺物 (Fig.57・59) 各柱穴から弥生時代前期初頭の土器片や黒曜石剥片が少量出土している。

14・15は突帯文土器甕口縁部細片。14は内面条痕で口縁端部に突帯が付き、ヘラによる刻目が入る。15は口縁直下の突帯に棒状工具による刻目が付く。調整はナデ。

SB1260 (Fig.51、PL.51・55)

H-15・16区で検出した主軸を南北方向に取る柱間1×4間の建物。SB1259と重複し、ほぼ同一主軸を取るが、やや東に振れる。柱穴平面形は楕円形か不整円形を呈す。直径は0.5～0.9m、深さは0.2～0.45m程を測る。一部の柱穴には板切れなどを何枚か底に置いた礎板状のものもあった。

出土遺物 (Fig.57・125、PL.81) 各柱穴から弥生時代前半の土器片や黒曜石剥片が少量出土している。

16は突帯文土器甕口縁部細片。外面ハケ目でススが付着する。内面はハケ目でナデ消し。口縁直下の突帯にはヘラによる刻目が付く。17は底部1/4片。底部はやや上げ底で器表は摩滅するが、調整は内面ナデで、指押さえ痕が残る。535は土製紡錘車。直径6.2cm、孔径0.7cmを測る。調整は丁寧なナデ。

SB1274（Fig.52、PL.51・55）

H-16区で検出した主軸を東西方向に取る柱間1×1間の建物。これ以外、外に延びる柱穴がなかったのでこの規模とした。柱穴平面形は楕円形か不整円形を呈すが、柱を立てるために掘り込んだテラスがある。直径は0.7～0.8m、深さは0.2～0.3m程を測る。柱穴には直径30cm近い柱根が残るものもあった。**出土遺物**は弥生時代前期の刻目突帯土器片などが少量出土している。

SB1401（Fig.52、PL.55）

H-13区で検出した主軸を東西方向に取る柱間1×1間の建物。柱穴平面形は楕円形か不整円形・方形を呈す。直径は0.5～1.2m、深さは0.3～0.5m程を測る。柱穴には直径15cm、残存長0.65m近い柱根が残るものもあった。

出土遺物（Fig.57） 弥生時代後期頃の土器片が出土している。

18～20は弥生時代後期の甕口縁部。18・19は細片。18の調整は内外面ハケ目、19は内面ナデ、外面ハケ目。20の調整は外面摩滅、内面はヨコハケ目。

SB1402（Fig.52）

F-10・11区で検出した主軸を北西方向に取る柱間1×2間の建物。SB1248と同一方向で、重複する。柱穴平面形は楕円形か不整円形を呈す。直径は0.35～0.6m、深さは0.2～0.6m程を測る。各柱穴内には礎板、柱根が残る。

出土遺物（Fig.60、PL.98） 各柱穴から弥生土器細片が少量出土している。

SB1403（Fig.53、PL.55・56）

F・G-14区で検出した主軸を東西方向に取る柱間1×2間の建物。SK1147とSD1119に切られ、SB1257と重複する。柱穴平面形は不整円形を呈す。直径は0.5～0.8m、深さは0.4～0.7m程を測る。各柱穴には柱根が残る。

出土遺物（Fig.59、PL.98） 各柱穴から弥生土器細片が少量出土している。

SB1404（Fig.53）

F-13・14区で検出した主軸を南北方向に取る柱間1×2間の建物。SB1401と重複する。柱穴平面形は楕円形又は不整円形を呈す。柱穴の直径は0.5～0.8m、深さは0.3～0.6m程を測る。各柱穴内には礎板や柱根が残る。

出土遺物（Fig.57・60、PL.95・98） 各柱穴から弥生時代前期から後期頃の土器細片や黒曜石剥片が少量出土している。

21は甕口縁部細片。調整は外面ナデ、内面はナナメハケ目。22は高坏坏部1/10片。表面は摩滅するが、内面ヘラによる暗文風のタテヘラミガキでハケ目。23は鉢口縁部細片。調整は内外面ハケ目。弥生時代後期のもの。

SB1405（Fig.53）

I-15・16区で検出した主軸を南北方向に取る柱間1×2間の建物。SB1406と重複する。柱穴平面形は不整楕円形又は不整円形を呈す。直径は0.35～0.6m、深さは0.15～0.4m程を測る。各柱穴には礎板が残る。

出土遺物（Fig.57） 弥生時代後期頃土器細片や、黒曜石剥片が少量出土している。

24は突帯文土器甕底部1/3片。外底部は板ナデからケズリ、内面板ナデ。

SB1406（Fig.53、PL.56）

I-16区で検出した主軸を南北方向に取る柱間1×2間の建物。SB1405と重複するが、規模はやや小さい。柱穴平面形は不整楕円形又は略長方形を呈す。直径は0.6～1.0m、深さは0.3～0.7m程を測る。

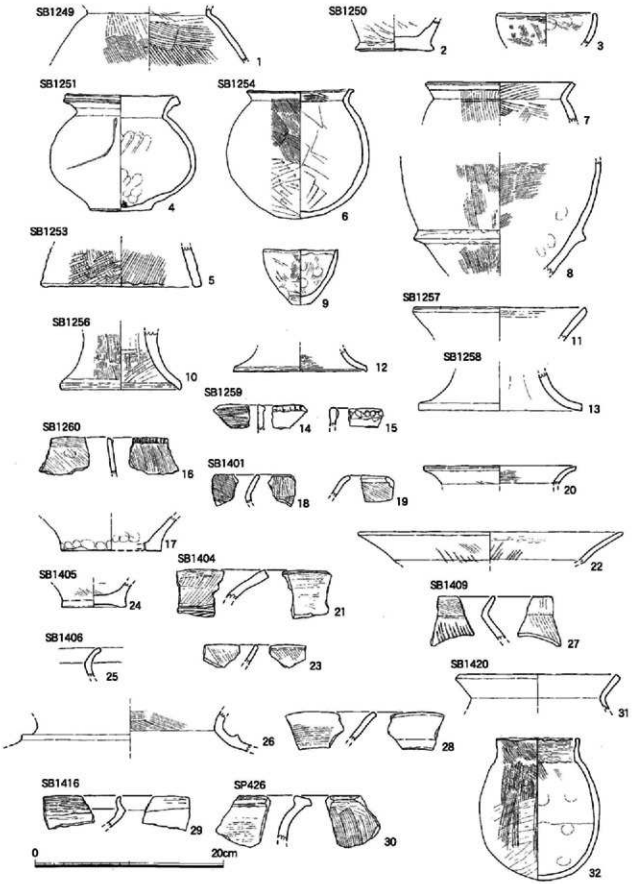


Fig.57　掘立柱建物出土土器（1/4）

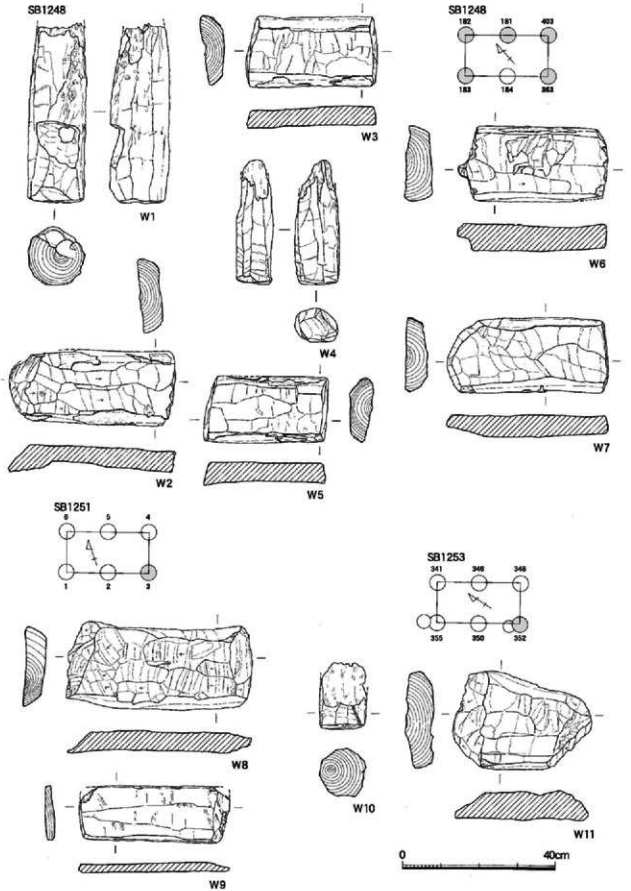


Fig.58　掘立柱建物柱穴出土柱・礎板 1 (1/10)

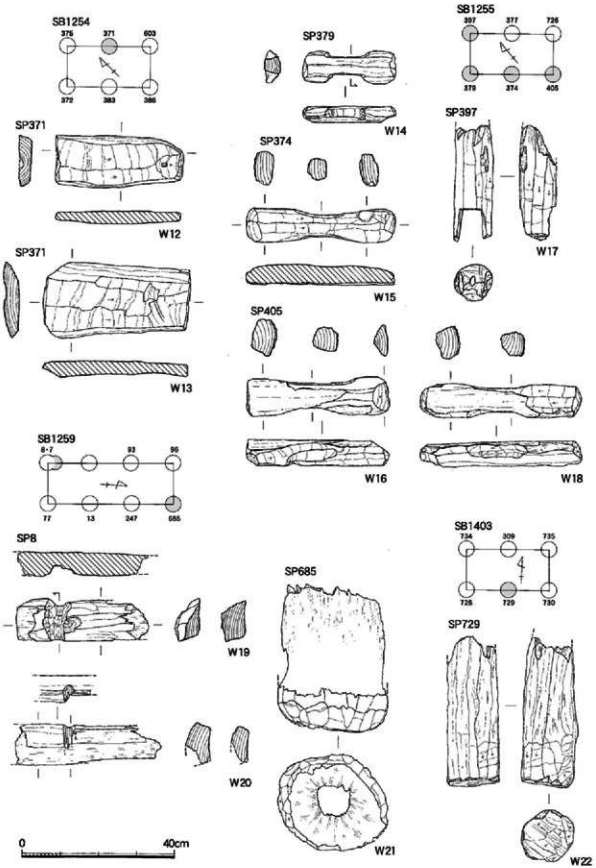


Fig.59 掘立柱建物柱穴出土柱・礎板 2 (1/10)

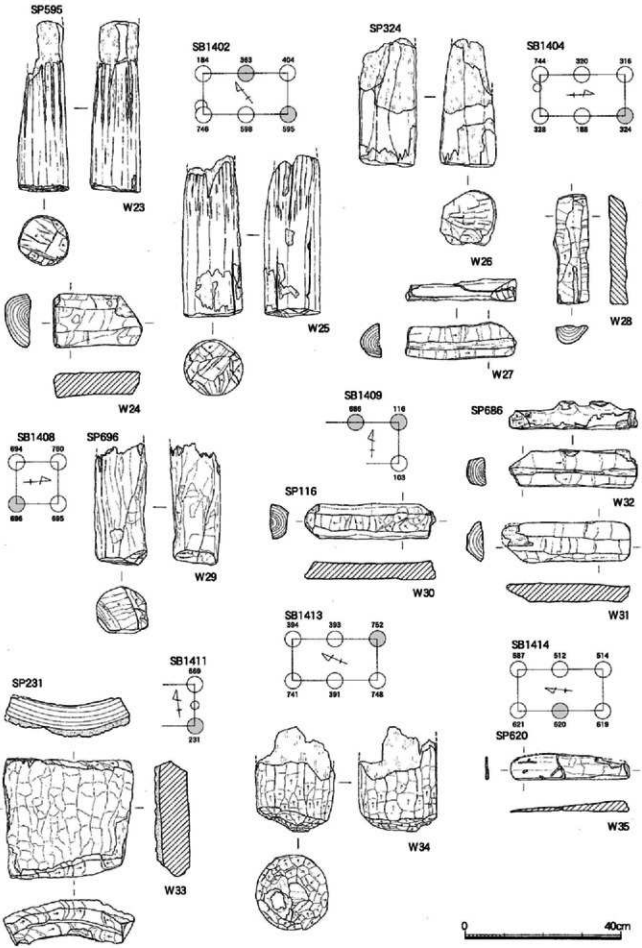


Fig.60　掘立柱建物柱穴出土柱・礎板 3 (1/10)

各柱穴には礎板や柱根が残る。

出土遺物（Fig.57・125） 各柱穴から弥生土器片が少量と、黒曜石剥片が1点出土している。

25は甕口縁部細片。調整はナデで、外面ススが付着する。弥生時代後期。26は頸部に突帯を巡らす壺頸部片。調整は外面ナデ、内面はハケ目と板ナデ。523は鉢。小型壺の口縁部を打ち欠く。調整は老面摩滅するが、ナデでハケ目が残る。

SB1407（Fig.54）

I-13・14区で検出した主軸を東西方向に取る柱間1×2間の建物。SB1252と柱穴を一部重複する。柱穴平面形は不整楕円形又は略円形を呈す。直径は0.4～0.8m、深さは0.2～0.4m程を測る。柱穴には礎板や柱根が残るものもある。

出土遺物は各柱穴から弥生時代後期頃の土器片が少量と砥石片が1点出土している。

SB1408（Fig.54、PL.56）

H-13区で検出した主軸を東西方向に取る柱間1×1間の建物。SB1406と主軸は同方向である。柱穴平面形は略円形を呈す。直径は0.45～0.55m、深さは0.35～0.5m程を測る。各柱穴には柱根が残っていた。

出土遺物（Fig.60、PL.98） 柱穴から弥生土器細片がわずかに出土している。

SB1409（Fig.54、PL.56）

I-16区西壁沿いで検出した主軸を東西方向に取る柱間1×1間＋αの建物。柱穴平面形は略円形を又は長方形を呈す。柱穴は大型で直径は0.9～1.1m、深さは0.6～0.7m程を測る。各柱穴内には板や木枝を利用した礎板の一部が残っていた。

出土遺物（Fig.57・60・119、PL.99） 弥生時代中期～後期頃の土器片が少量出土している。

27・28は弥生時代後期甕口縁部細片。調整は、27は内外面ハケ目。28は内面ナデとハケ目、内面はナデでススが付着する。S30はSP103出土の石鏃。鏃身長1.8cmを測る。白味を帯びた黒曜石。

SB1410（Fig.54、PL.57）

H-15・16区で検出した主軸を南北方向に取る柱間1×4間の建物。SB1259と主軸はほぼ同方向で、規模もほぼ同規模である。柱穴は一般的に小さく浅く、平面形は略円形又は楕円形を呈す。直径は0.3～0.8m、深さは0.1～0.35m程を測る。柱穴の一部には礎板や礎石が残っていた。出土遺物は各柱穴から弥生土器片が少量出土している。

SB1411（Fig.54、PL.57）

H-18区で検出した柱間1間の建物。SD735に切られ、規模は不明。柱穴平面形は略円形又は楕円形を呈す。直径は0.75m、深さは0.4m程を測る。柱穴内には礎板が残っていた。

出土遺物（Fig.60、PL.99） 弥生土器細片が少量出土している。

SB1412（Fig.54）

H-18区で検出した主軸を南北方向に取る柱間1×1間の建物。SB1253と主軸はほぼ同方向であるが、柱筋は通らない。柱穴平面形は略円形又は楕円形を呈す。直径は0.3～0.5m、深さは0.2～0.25m程を測る。柱穴内には杭状に打ち込まれた柱根が残っていた。

出土遺物は各柱穴から弥生時代後期後半頃土器細片が小量出土している。

SB1413（Fig.55）

G-13区で検出した主軸を北北西方向に取る柱間1×2間の建物。SB1411と主軸はほぼ同方向である。柱筋はやや歪である。柱穴平面形は略円形又は不整楕円形を呈す。直径は0.3～0.6m、深さは0.3～0.65m程を測る。柱穴の一部には柱根が残っていた。

出土遺物（Fig.60・124） 各柱穴から弥生時代土器細片が少量出土している。

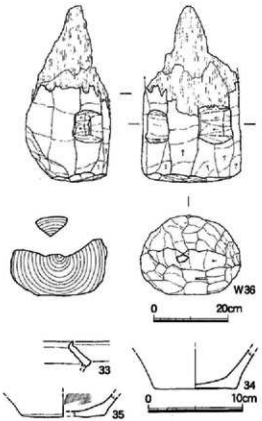


Fig.61 SB1421 柱穴出土柱と土器（1/10・1/4）

513は甕口縁部1/12片。調整は内外面ハケ目。514は甕頸部細片。調整は外面粗いハケ目かヘラミガキ、内面はハケ目後ナデ消し。

SB1414（Fig.55、PL.57）

H-20区で検出した主軸を略北方向に取る、柱間1×2間の建物。SB1410と主軸はほぼ同方向である。柱穴平面形は略円形又は略方形を呈す。直径は0.5～0.8m、深さは0.3～0.6m程を測る。柱穴の一部には何枚か板切れを敷いた礎板が残っていた。

出土遺物（Fig.60・119、PL.99） 各柱穴から弥生時代後期頃の土器細片が少量出土している。

S29はSP512出土。打製の打ち欠き石鏃。扁平な粗い割石の4側辺を粗くノッチ状に打ち欠いて紐かけ部分としている。長軸長7.9cm、短軸幅5.9cm、最大厚1.2cmを測る。

SB1415（Fig.55）

H-21区で検出した主軸を略北北西方向に取る柱間1×2間の建物。SB1411と主軸はほぼ同方向である。柱間は北側梁間が狭まる。柱穴平面形は略円形又は楕円形を呈す。直径0.3～0.7m、深さは0.2～0.45m程を測る。一部柱穴には直径約10cmの柱痕跡が残る。**出土遺物**は弥生時代中期頃の土器細片が少量出土している。

SB1416（Fig.55）

H-21区で検出した柱間1×1間の建物。SB1415と主軸はほぼ同方向で重複する。柱間は北側梁間が狭まる。柱穴平面形は略方形又は長方形を呈す。柱穴は規模が大きく、直径は0.65～1.0m、深さは0.5～0.6m程を測る。柱穴の一部には礎板の一部が残っていた。

出土遺物（Fig.57） 弥生時代後期頃の土器細片が少量出土している。

29は突帯文土器の鉢口縁部細片。外面は摩滅するが、内面の調整はミガキ。

SB1417（Fig.55）

G-20区で検出した柱間1×1間の建物。SB1418と主軸はほぼ同方向を取る。柱筋はやや歪む。柱穴平面形は隅丸長方形又は不整楕円形状で、直径は0.55～0.7m、深さは0.25～0.3m程を測る。柱根は残っていないが、柱痕跡が残る。

出土遺物 各柱穴から弥生時代中期以降の土器細片や黒曜石剥片などが少量出土している。

SB1418（Fig.55、PL.57）

H-19・20区の溝SD1181内で検出した主軸を東西方向に取る柱間1×2間の建物。柱穴平面形は略円形又は楕円形で、直径は0.4～0.7m、深さは0.2～0.5m程を測る。一部柱穴には柱根が残る。

出土遺物 各柱穴から弥生時代土器片が少量出土している。

SB1419（Fig.56）

E・F-13区で検出した主軸を東西方向に取る、柱間1×1間の建物。柱穴平面形は略円形又は楕円

Tab. 3　第Ⅲ面掘立柱建物一覧表

遺構番号	規　模	梁間長(m)	桁行長(m)	建物面積(㎡)	主軸方向	礎板形態	
SB1248	1×2	2.71	4.48	12.14	N-47°30′-W	B	
SB1249	1×2	2.64	3.87	10.22	N-75°-W	D	
SB1250	1×2	2.87	3.90	11.19	N-83°-E	なし	
SB1251	1×2	3.14	5.76	18.09	N-70°-W	C	
SB1252	1×1＋α	2.74	2.30＋α	6.3以上	N-8°-W	C	
SB1253	1×2	2.82	4.33	12.21	N-35°-W	C・D	
SB1254	1×2	3.53	4.88	17.23	N-41°-W	C	
SB1255	1×2	2.31	4.04	9.33	N-48°30′-W	A	
SB1256	1×2	2.72	3.80	6.52	N-80°-W	D	
SB1257	1×2	3.07	5.78	17.74	N-82°-W	なし	
SB1258	1×2	2.47	4.39	10.84		B・D	
SB1259	1×3	1.86	7.07	13.15	N-5°-W	C・D	
SB1260	1×4	1.80	9.51	17.12	磁　北	C	
SB1274	1×1	2.06	2.22	4.57	N-7°-W	B・D	
SB1401	1×2	3.16	3.97	12.55	N-83°-W	D	
SB1402	1×2	3.03	4.58	13.88	N-48°-W	B・C・D	
SB1403	1×2	3.40	4.15	14.11	N-90°-W	D	
SB1404	1×2	2.85	3.58	10.20	N-3°-E	C・D	
SB1405	1×2	2.91	4.55	13.24	N-9°-E	B・C	
SB1406	1×2	2.58	3.46	8.93	N-8°-E	B・C・D	
SB1407	1×2	3.28	4.64	15.22	N-84°-W	C・D	
SB1408	1×1	2.45	2.92	7.15	N-83°-W	D	
SB1409	1×1＋α	3.10	3.42	10.60	N-87°-E	C	
SB1410	1×4	1.76	9.24	16.24	N-11°-W	C	
SB1411	2×1＋α	3.28			磁　北	B・C	
SB1412	1×1	2.47	2.57	6.35	N-24°-W	D	
SB1413	1×2	2.33	2.96	6.90	N-25°-W	B・D	
SB1414	1×2	3.04	3.22	9.79	N-23°-W	C	
SB1415	1×2	2.48	4.10	10.17	N-6°-W	なし	
SB1416	1×1	2.82	3.12	8.80	N-29°-W	B	
SB1417	1×1	2.76	2.94	8.11	N-84°-W	なし	
SB1418	1×2	2.90	4.60	13.34	N-87°-W	D	
SB1419	1×1	3.08	3.57	11.00	N-87°-W	B・D	
SB1420	1×2	2.42	5.00	12.10	N-15°-E	なし	
SB1421	1×1	3.39	3.8	12.88		D	第7次SB11と同じ
SB1422	1×1	2.58	3.02	7.75	N-13°-E	D	

注1　梁間、桁行長は両側の平均値

注2　面積は梁間長×桁行長

注3　礎板A：組合せ式、礎板B：板1枚、礎板C：複数の板材、礎板D：柱のみ

形で、直径は0.55～0.75m、深さは0.4～0.6m程を測る。各柱穴には柱根又は礎板が残る。

出土遺物　各柱穴から弥生時代後期後半から終末頃の土器細片が少量出土している。

SB1420（Fig.56）

H-20区で検出した主軸を南北方向に取る柱間１×２間の建物。北側梁間の間隔がやや南に比べて狭い。柱穴平面形は楕円形又は不整円形で、直径は0.7～1.1m、深さは0.2～0.5m程を測る。各柱穴には柱根や礎板は残っていない。

出土遺物（Fig.57、PL.81）　各柱穴から弥生時代後期後半頃の土器細片が少量出土している。

31は甕口縁部１/５片。表面は摩滅するが、内面にススが付着している。弥生時代後期。32は小型の甕１/２片。調整は外面タタキ後ハケ目、下半はケズリ、内面はナデとハケ目。弥生時代終末頃。

SB1421柱穴出土遺物（Fig.61・119、PL.57・95・99）

SK1161として取り上げたが、第７次調査でのSB17の柱穴である。柱根と土器が出土している。33は複合口縁壺細片。弥生時代後期後半。34・35は甕底部。１/３片と１/６片。調整は34が摩滅するが、35は底部と内面はハケ目。

B4・B5はガラス小玉。直径は0.2cm・0.85cm、厚さ0.1cm・0.35cm、孔径0.75mm・0.3cmを測る。色調は濃紺色を呈す。

SB1422　図示していないが、F-13・14区で検出した柱間１×１間の建物。各柱穴には柱根が残っていた。**出土遺物**は弥生土器片が少量出土している。

②　溝状遺構

SD818（Fig.62～64、PL.58～60・68）

微高地西側谷部の台地縁辺を南北に貫流する溝で、第７次調査区から続くものである。調査時はSR1200としたが、ここではSD818で報告する。この溝の延長は第９次調査区の第３区でも確認したが、第４・５次調査区、第９次調査区の第２区では延長は確認出来ていない。この溝上面には、弥生時代後期終末から古墳時代初め頃の土器を含む包含層があり、その包含層下で弥生時代後期後半から終末頃の土器群SX1186が検出されている。この溝は第７次調査区でも確認していたが、２時期の流路があり、古期流路をSD1210（第７次ではSD921）としている。SD1210はSD818より流れが西側にずれる。埋土は上層が暗灰色砂質土で、中層が黒色粘土、下層が暗灰色粘土で、植物や流木などを多く含んでいた。溝底は流れによるのか、凹凸がある。H・I-21区では堰状遺構と思われるSX1269が検出されている。堰の南側には、水による浸食を防ぐためか、護岸と思われる杭が打ち込まれている。SX1269手前から西側には北西に湾曲して延びる落ち込みが広がり、それを遮断する土堤状遺構SX1262がある。この溝西側谷部はこの溝以前にもたびたび流路が変わったようで、流路の痕跡が確認出来た。

出土遺物（Fig.65～71・73・76、PL.81～83・93・99・100）　主に弥生時代後期から古墳時代前期初め頃の土器が出土した。木製品は下層から出土している。遺物は土層ベルトを基準に、９～11区（調査時は１～３区）として遺物を取り上げたので、各区毎に報告する。上層には古墳時代前期の遺物を含む。

35～59は９区出土。36～39は上層出土。36は終末期頃の甕１/４片。調整は口縁部ナデ、胴部外面はハケ目、内面はハケ目後ナデ。外面下半と内底に黒斑がある。37は布留式の甕１/２程残存。調整は口縁部ヨコナデ、胴部はハケ目、内面上半はヘラケズリ、下半は板ナデ上げ。胴部外面ススが付着。38は小型の手捏の鉢。口縁部が外折する１/９片。調整は口縁内外面ナデ、体部外面はハケ目、内面は指押さえ後ナデ。39は壺口縁部１/５片。調整は口縁部ハケ目後ナデ、胴部はハケ目。39～44は中・下層出土で、弥生時代後期のものである。40は弥生時代後期終末期の複合口縁壺口頸部１/３片。

調整は頸部ハケ目、口縁部外面はタテハケ目後ナデ消し、内面はヨコナデ。頸部には三角突帯が付くが、突帯と口縁端部には木口の刻目が付く。41は壺口縁部1/4片。調整は口縁部ヨコナデ、胴部外面はナデ、内面はハケ目後ナデで、外面ススが付く。42は高坏脚部。脚外面はヘラミガキでハケ目を加え、内面はナデ。径約1㎝の円孔が2カ所空く。43は大型の鉢か。調整は内外面ヘラミガキ。44・45は口縁部が外折する鉢。44は1/5片。調整は胴部ハケ目、口縁部外面ハケ目後ナデ、内面はハケ目。45は大型の鉢1/10片。調整は胴部が工具ナデ、口縁部ヨコナデ。46・47は下層出土。46は小型壺口縁1/6片。調整はナデで、やや摩滅する。47は頸部1/3片で、頸部にわずかな高まりの三角突帯が二条付く。調整は頸部外面ハケ目後ナデ、内面はナデ、胴部内外面はハケ目である。48～52は最下層から下部砂礫出土。48は後期後半の壺1/4片。調整は内外面ハケ目。49は甕口縁部1/4片。調整は内外面ハケ目で外面ススが付着する。50は高坏脚部1/4片。調整は外面摩滅するが、内面はハケ目。51はミニチュアの手捏の鉢。外面黒斑がある。52は鉢などの脚台3/4片。器表には指押さえ痕が残る。53～59は番号で取り上げたもの。53は複合口縁壺1/4片。調整はハケ目であるが、口縁部内面は指ナデ。54は上層出土か。丸底の底部で外面ヘラミガキ、内面底は板ナデ、胴部はケズリである。外面ススが付着。55はミニチュアの手捏土器。ほぼ完形。外面指押さえ痕が残るが、内面はナデ。56は弥生時代後期前半の鉢か。1/2片で、調整は胴部外面ハケ目で、その他はナデ。57・58は器台。いずれも頸部を上部に持つ形態。57は1/2片、58は体部残存。調整は外面上部ハケ目、下部はタタキ、内面は57が指ナデ、58はハケ目。59は蓋口の支脚頂部。頂部に1×1.3㎝の楕円形孔がある。調整は外面タタキ、内面ハケ目が残る。蓋口部は指押さえ。

60～92は10区出土。60～64は壺。60は土師器で中・下層出土。口縁から胴部2/3片。調整は口縁部ヨコナデ、胴部外面はハケ目、内面は頸部ハケ目、胴内面ヘラケズリ。外面にはススが付着する。61・62は窄まった頸部から口縁が短く外に開き、丸い胴部を持つ形態。61の調整は口縁部ヨコナデ、胴部はハケ目で、外面ナデ消す。黒斑があり、二次的に被熱を受ける。62は1/4片。調整は口縁部ヨコナデ、胴部はハケ目である。63は複合口縁壺口縁部1/4片。調整は内外面ハケ目後ヨコナデ。64・65は頸部に三角突帯を持つ壺口縁部で、いずれも1/4片。64の調整は内外面ハケ目、胴部外面はハケ目後ナデ。頸部突帯にはヘラの刻目が付く。65は口縁部が大きく開く。調整は外面ハケ目とナデ、内面も摩滅があるが、ハケ目とナデ。66～75は甕。66は弥生時代終末期の甕。調整は胴部内面から口縁部外面までナデ、胴部外面はハケ目後ナデ。外面下半にはススが付着する。口縁内面黒斑がある。67は土師器の布留式土器甕1/6～1/8片。調整は口縁部ヨコナデ、胴部外面はハケ目、内面はヘラケズリ。胴部上半に櫛歯による波状文が付く。68は土師器甕底部。調整は外面粗いハケ目、内面はヘラケズリである。底部黒斑がある。69は中・下層出土。口縁部1/4片で、調整は口縁部ヨコナデ、胴部外面はナデ、内面はハケ目である。70は弥生時代後期末の長胴の甕1/4片。調整は、胴部外面はタタキ、内面は板ナデかナデである。口縁部外面にはススが付着する。71は口縁が胴部より広がる甕1/3片。口縁部はヨコナデ、胴部はハケ目である。外面被熱を受けススが付着する。72は丸味のある胴部の甕。1/2～1/8片。調整は口縁部ナデ、胴部外面はハケ目、内面は不明。外面黒斑がある。73・74はく字状に外折する甕。73・74は1/6片・1/3片。73・74ともに調整は内外面ハケ目、73の口縁部はヨコナデ。いずれも外面ススが付着する。75は大型の甕口縁部1/6片。調整は外面タタキ後ナデ、内面はハケ目後板ナデ。76～78は弥生後期後半～末の高坏。76・77は坏部1/7片。調整はいずれも内外面ハケ目後ヘラミガキで、ハケ目を消す。78は脚筒部から坏底部片。調整は外面ハケ目後ヘラミガキ、脚内面はハケ目、坏部はハケ目。79は器台1/4片。調整は外面ハケ目後板ナデ、口縁部外面から内面はナデで、ハケ目が残る。80は低脚の完形の蓋口支脚。調整は体部外面ハケ目、

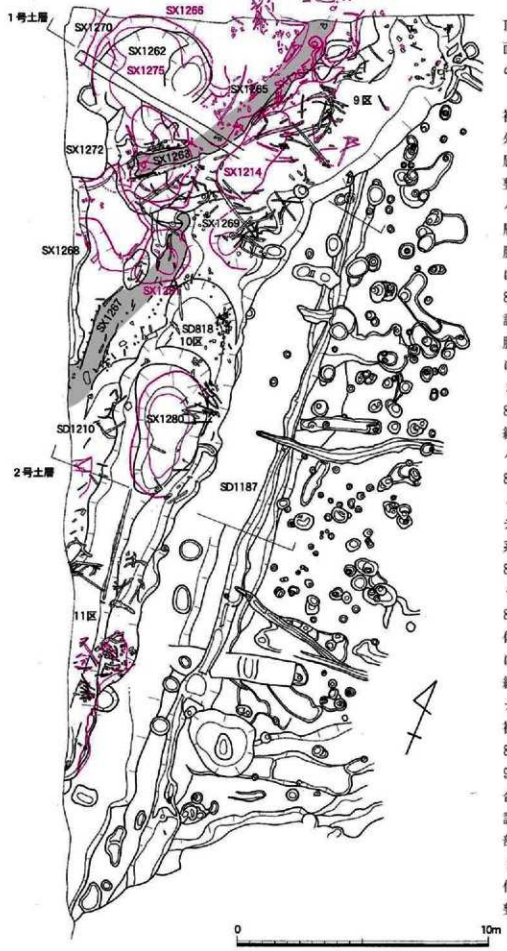


Fig.62　SD818・1210（1/150）

頂部突出部は指押さえ、内面はナデ。頂部に径約1㎝の円孔が空く。

81～88は下層出土。81は複合口縁壺1/8片。口縁外面は何条かの沈線が巡る。屈曲部には刻目が付く。調整はナデであるが、外面はハケ目後ナデ。82は甕で下層出土。口縁部1/4片で胴部外面はハケ目、口縁部はヨコナデ。83・84は高坏。83は土師器高坏1/2片。調整は坏部はヘラミガキで、脚部はハケ目後ナデ。脚裾には円孔が入る。84は1/5片。調整はハケ目後ナデ。85・86は鉢。85は椀型の口縁部1/8片。調整は外面ハケ目後ナデ、内面はナデ。86は短く外折する口縁1/4片。調整は口縁部ヨコナデ、体部はナデ。朝鮮半島系土器の可能性あり。87・88は器台。いずれも頸部のくびれが上部にくる形態。87は口縁部1/5片。88は体・底部1/2片で、調整は体部外面タタキ、87の口縁部はヨコナデ、内面は板ナデ。88は体部内面指ナデ、裾部はヨコハケ目とナデ。89～93は最下層出土。89・90は弥生時代後期末頃の複合口縁壺。89は1/4片で、調整は口縁部ヨコナデ、頸部はハケ目。90は頸部1/2片で頸部には三角突帯が付く。内外面丹塗りで、調整は外面ハケ目でタテヘラ

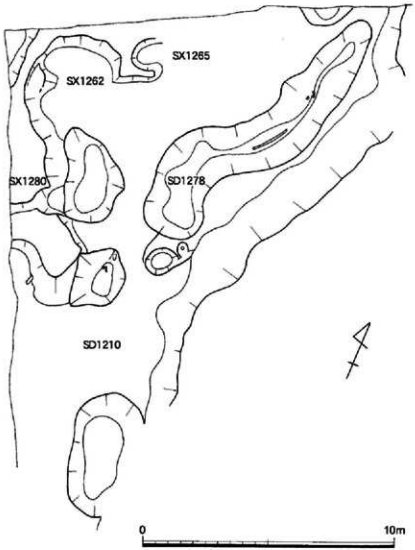


Fig.63　SD818・1210 北西側下層遺構（1/150）

ミガキ、内面はハケ目後ナデ。91は甕で頸部に突帯を持つ口縁1/7片。口縁端部に棒状工具による刻目が付く。調整はハケ目。突帯はヨコナデ。92は高坏で、皿状の坏部1/12片。調整は外面ナデ、内面はハケ目。93は開く高坏脚部1/6片。調整は外面ヘラミガキ、内面はハケ目。

94～104は11区出土。94・95は壺。94は直口の口縁部1/2片。調整はヨコナデで、内面ハケ目。胴部外面はハケ目後ナデ。95は複合口縁壺の口縁部小片。口縁部外面には二段に円盤状に粘土を貼付け、内面には二段の波状文を施す。調整はヨコナデ。96・97は弥生時代後期後半の甕。96は頸部に突帯を持つ口縁から胴部2/3片。調整は内外面ハケ目、口縁端部と突帯にヘラによる刻目が付く。全体に歪みが大きく、外面にはススが厚く付着する。97は底部1/6片。胴下部に突帯が付き、ヘラ状工具による刻目が付く。調整は内外面ハケ目で、底部にかけてはナデを行う。98は口縁部を欠く小型甕。調整はハケ目とナデ。99～103は鉢。99はほぼ完存。やや外開きの口縁で、調整は口縁部から体部外面中央までハケ目、下半から底部はヘラケズリ、体部内面は板ナデ。外面ススが付着する。100は深底の鉢口縁1/6片。調整は外面ハケ目、内面は板ナデ。101はミニチュア土器の鉢。調整はナデ。102は体部に突帯を持つ鉢か。口縁部1/6片で、復元口径25.6cmを測る。内外面ハケ目調整。103は大きく開く形態。約1/10片。調整は外面摩滅・剥離が著しいがナデ・ヨコナデ、内面はヨコナデ後タテヘラミガキ。104は支脚か。頂部は欠損の可能性がある。調整は内外面ナデ。105～110は下層出土。

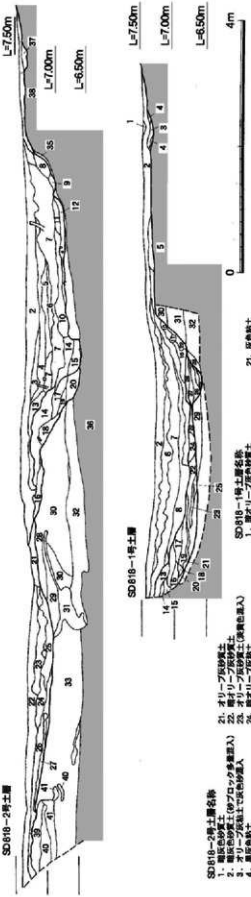


Fig.64　SD818 土層 (1/60)

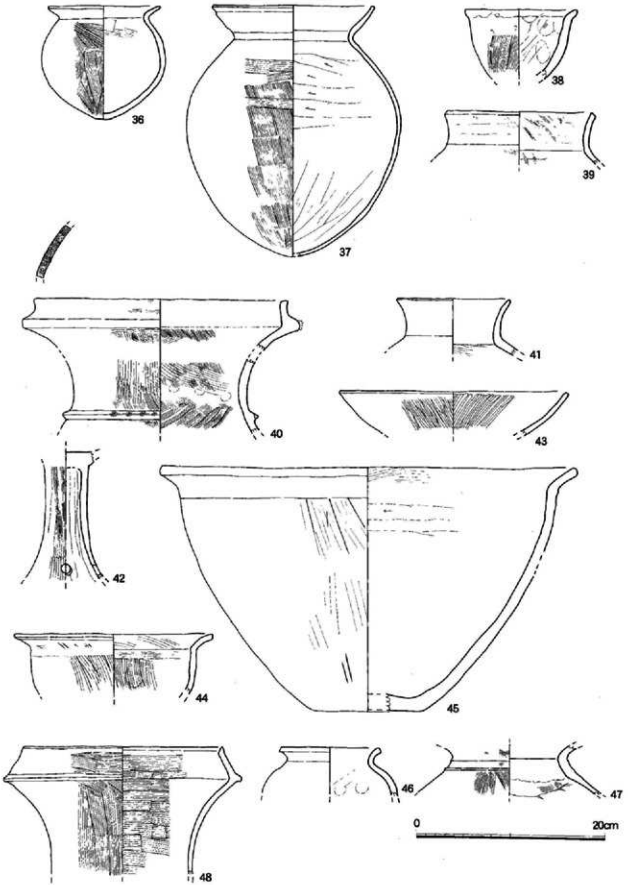


Fig.65 SD818 出土土器① (1/4)

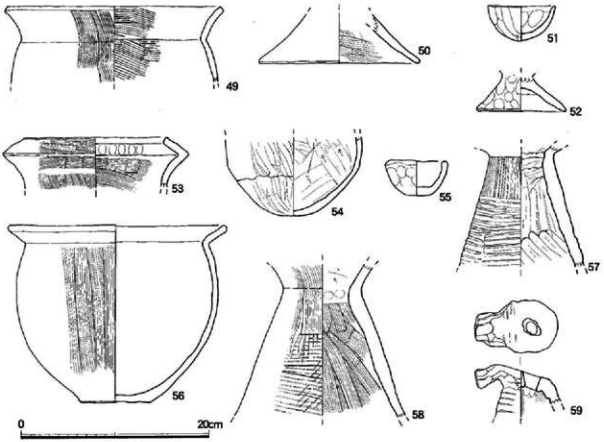


Fig.66　SD818 出土土器②（1/4）

105・106はいずれも頸部に突帯を持つ大型の甕。口縁部１/10片・１/３片。調整は内外面ハケ目で、105の口縁端部と突帯にはヘラによる刻目が付く。106の口縁内面は板ナデで、突帯にはハケ目工具の木口による刻目が付く。106の外面には黒斑がある。107はレンズ状を呈す大型甕の底部。調整は内外面ハケ目で、外面下半はケズリに近い板ナデ。108は高坏坏部１/７片。外面は摩滅するが、調整はハケ目、内面はナデとかすかにタテヘラミガキ痕が残る。109は椀型の鉢口縁部１/４片。口縁から内底はナデ、外底部はヘラケズリ。110は器台１/２片。。調整は体部外面ハケ目後ナデ、口縁部から体内面はナデ、下半はハケ目後ナデ。口縁端部にヘラによる刻目が付く。

111～116は重要、又は時期がずれる遺物。111は瓦質の楽浪系土器筒型坏細片。調整は回転ナデ。112～116は弥生時代前期の底部片。調整はナデや条痕であるが、112・114・116には外底部に広葉樹の木の葉圧痕が残る。111・114は上層、112・113・116は中～下層出土。

125～130は土製品サジ把手。調整はいずれも指押さえ仕上げである。小型のもの126、把手断面が扁平なもの125・127、円形を呈すもの126・128・129・130に分かれる。

Ｓ１は扁平片刃石斧。調整は粗く、ケンマ調整面が部分的である。長軸長7.2㎝、最大幅5.1㎝、厚み1.1㎝を測る。石材は粘板岩か泥岩。Ｓ２・Ｓ３は石包丁半損品。いずれも外湾刃半月形の形態である。残存長5.5㎝・5.7㎝を測る。表面は研磨調整であるが、剥離・荒れがひどい。Ｓ４は大型の方柱状の砥石。全長38.0㎝、最大幅9.9㎝、最大厚10.9㎝を測る。上面と両側面が使用面で、工具痕が残る。色調は暗緑灰色を呈し、石材は頁岩か。Ｓ４が11区出土以外は９区出土。

W37は杓子状木製品。杓子端部は欠損する。残存長21.6㎝を測る。全体に傷みは激しいが、丁寧なケズリ仕上げ。W38は農耕具で、方形の柄壺部分。W39～42は不明木製品。W39は板状の木製品。全

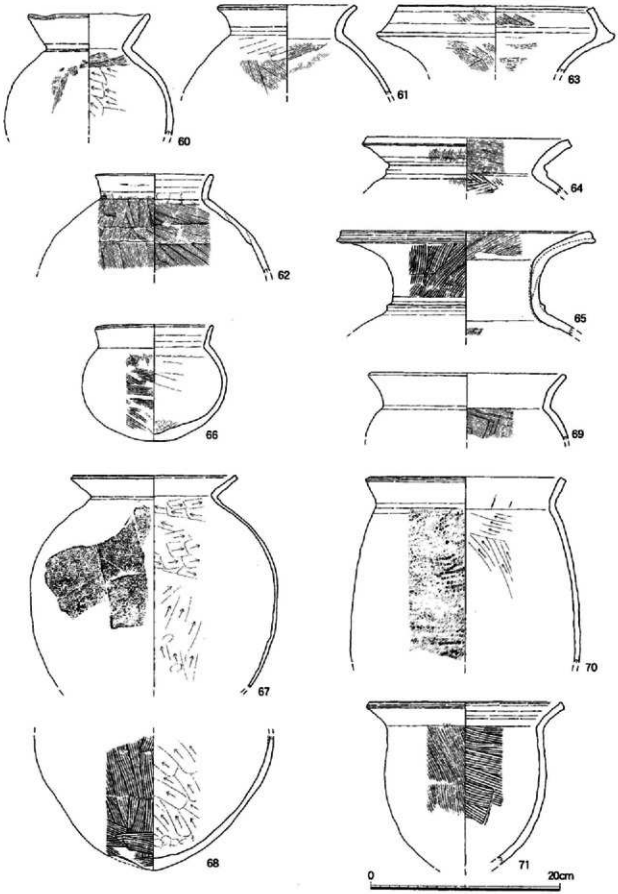


Fig.67 SD818 出土土器③ (1/4)

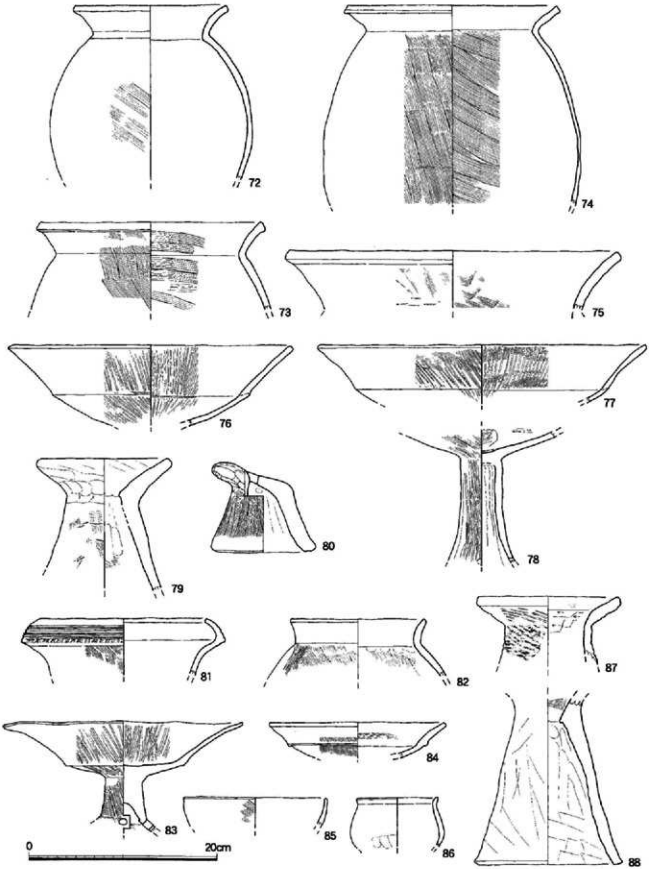


Fig.68　SD818 出土土器④（1/4）

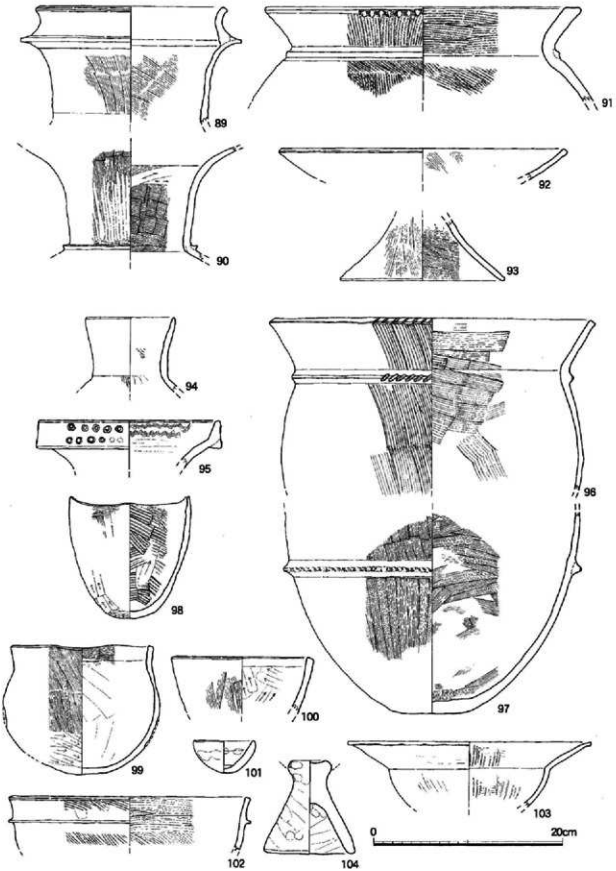


Fig.69 SD818 出土土器⑤ (1/4)

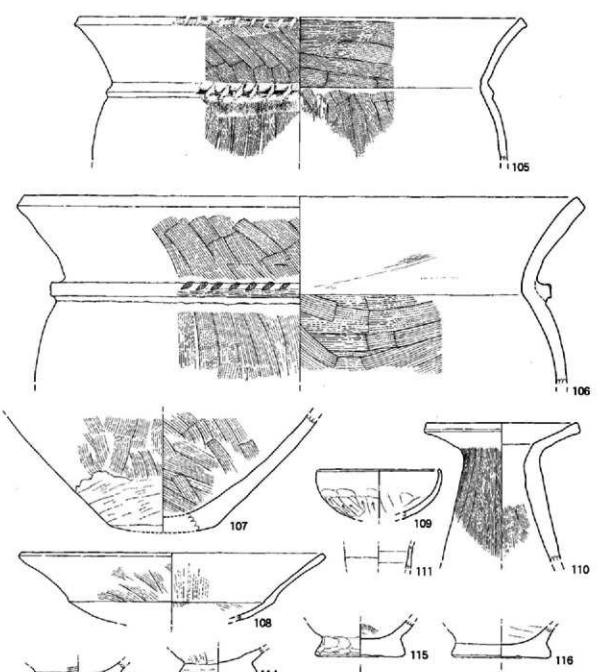


Fig.70　SD818 出土土器⑥（1/4）

長40cm、最大幅8.1cmを測る。上部に抉り加工を加えるが、表面は傷みが激しいが、ケズリ加工。W40は下半がカーブを持つ形態。材種がアカガシであることから農耕具の可能性がある。残存長27.7cmを測る。全体に傷みは激しい。中央部に直径0.4cmの円孔がある。W41は下半部を斜めにケズリ出した板状木製品で残存長21.9cmを測る。上部に直径１cmの円孔と右側面に直径0.3mmの円孔がある。W42は板状の製品。残存長37.4cmを測る。上端は欠損する。乾燥によるのかひびが多く入っており、表面は

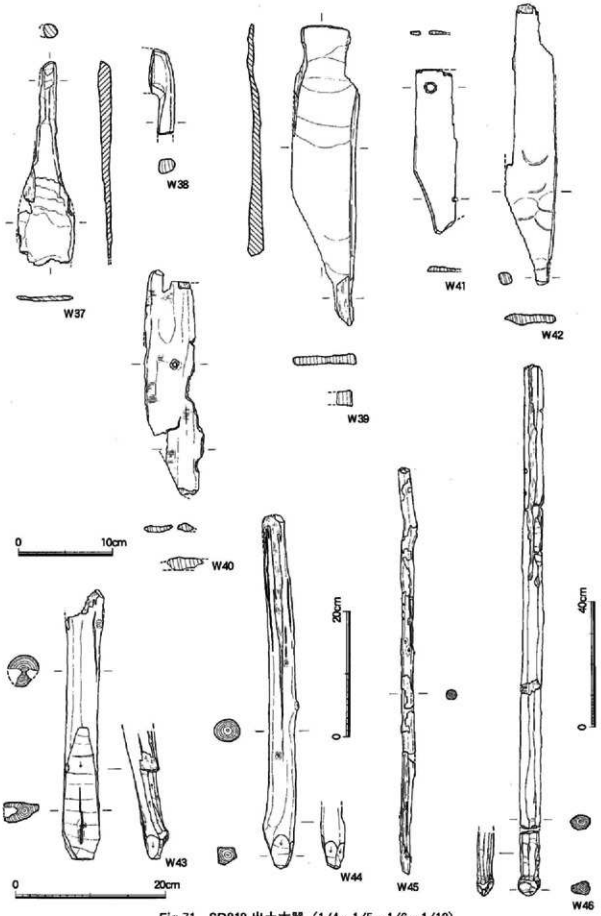


Fig.71 SD818 出土木器（1/4・1/5・1/6・1/12）

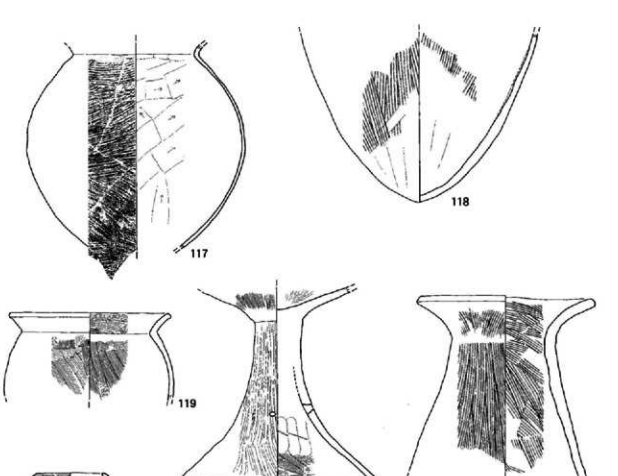


Fig.72 第7次調査 SD818 出土土器追加土器（1/4）

傷みも進み、加工調整も明瞭でない。W46は建築材。残存長169.0cm、直径6.6×4.8cmを測る。下端は周囲を丁寧にケズリ込んで、先端を三角状に作り出す。W43～W45は杭材。W43は先端を3方向から斜めに削った杭の一部で、端部は潰れる。残存長35.9cm、直径5.0cmを測る。W44は残存長56.7cmで、先端は4方向のケズリで端部は潰れる。樹皮をざっと削り取っている。W45は全長108.8cmを測る。先端は削って尖らし、上端は粗く削っている。表面には樹皮が残る。

SD818第7次調査分未報告遺物（Fig.72、PL.83）

第7次調査報告の中で報告漏れ遺物があったので報告する。117は5区出土。古墳時代初頭の甕胴部1/2片。調整は外面タタキで下半はナデ上げ。内面はヘラケズリ。外面ススが付着する。筑前型庄内甕。118は甕で、4区上層出土。尖底で調整は内外面粗いハケ目と板ナデ。二次被熱を受けたか。119は7区下層出土の甕。1/6片で、調製は胴部ハケ目、口縁部は外面ヨコナデ、内面ハケ目。120は5区下層出土。高坏脚端が一部欠ける。坏部は外面ハケ目、内面ヘラミガキ、脚部は外面ヘラミガキ、内面ハケ目。裾部には円形透孔がある。121は5区上層の器台。底部欠損をする。調整は内外面ハケ目。122～124は鉢。122は丸い胴部の1/5片。調整は外面ナデ、内面ハケ目。123は7区下層砂層出

土。細片で外面ナデ、内面指押さえ。124はミニチュア鉢1/4残存。調整はナデで、板ナデ。

SD1210 (Fig.62～64、PL.60)

SD818に先行する流路であるが、流れは西側にずれる。この溝の西側にある土堤を伴う杭列SX1267はこの溝に伴うものと思われる。出土遺物は古墳時代の遺物は含まず、後期後半までであり、SD818より古くなる。

出土遺物 (Fig.74～76・78・79、PL.83・93・95・100) 弥生時代前期から後期の土器や、木製品、石器などが出土している。

遺物はSD818と同じ土層ベルトを基準に3ブロック、南側から1～3区として取り上げが、図示出来る遺物が少ないので、各区まとめて器種毎一括して行う。

132～135は壺。132・133は複合口縁の口縁部1/6片。132の調整はヨコナデとハケ目であるが、口縁部外面にハケ目工具の木口による刻目と、粘土紐を楕円形状に扁平にはりつけた装飾を施している。133は口縁部外面に三角突帯を一条巡らす。器壁は薄く、調整はハケ目後ミガキ。134・135は三角突帯を持つ頸部1/4片。いずれも調整はハケ目とナデ。136～138は甕。136は「く」字状口縁甕の口縁部1/6片。調整は口縁部外面がヨコナデ以外はハケ目。137は大型甕で、頸部に断面台形の突帯を巡らす。口縁部1/8片。調整はヨコナデ後ハケ目。頸部突帯には木口による刻目が付く。138は長胴気味の胴部。調整は内外面ハケ目。突帯は扁平な粘土紐を雑に貼付け、上面にヘラによる刻目が付く。139～142は高坏。139・140は坏部。139は口縁部1/6片。調整は内面ハケ目後ナナメの暗文風ヘラケズリで、外面はヘラミガキがナナメに入る。140は坏の底部との境に段を有す。調整は外面ナデでハケ目が僅かに残る。141は脚部。外面タテヘラミガキ、内面奥にはシボリ痕が残り、裾部はハケ目。直径0.5cmの円孔が3か所残る。142は裾部1/4片で、調整は外面ハケ目後ヘラミガキ、内面はハケ目。直径0.8cmの円孔が1か所残る。143は小型の甑胴底部1/6片で、底部に直径2cmの円孔が空く。調整はナデで、外面ハケ目がある。144～147は鉢。144は小型で1/6残存。調整は外面平滑なナデ、内面はハケ目。145・146は1/6片で、体部が丸味を持つ形態。145は調整はハケ目後ヨコナデ。146は大型で調整は口縁部ヨコナデ、底部はハケ目？。147は外折する口縁の1/8片で、調整は口縁部ヨコナデ、体部はハケ目、外面下半はケズリ。148は鉢の脚部か。1/8片で調整は内外面ハケ目。149～153はいずれも筒型の器台。149・150は頸部のくびれが上部にくるもの。149は口縁1/4片。口縁端部にハケ目工具の木口による刻目が付く。調整は外面から口縁内部までハケ目、内面はナデ。150は調整は外面タタキのちハケ目、口縁部ヨコナデ、内面はナデ。151の調整は外面タタキ後ハケ目、内面もハケ目とナデ。152の調整はハケ目。153はくびれが中央にくる。復元底径16.4cmを測る。調整はナデで、直径0.5cmの円孔がある。154は楽浪系土器の瓦質の筒型杯底部1/4片。調整は体部回転ヨコナデ、外底部は静止糸切り。155～157は弥生時代前期の土器。155・156は突帯文土器口縁部細片。調整は外面条痕、内面は板ナデ。刻目はヘラによる。157は底径7.3cmを測る。調整はナデとハケ目。内底にはススが付着する。131は土製のサジなどの把手。指押え仕上げである。

S5は楕円形状を呈す石包丁。長さ10.5cm、幅4.0cm、孔間距離は2.5cmを測る。表面は研磨調整で、刃部は両側から研ぎ出す。上端に紐通し孔が2か所ある。使用痕が残る。石材は安山岩質凝灰岩ホルンフェルス。S6は磨石片。残存長7.5cm、最大幅3.4cm、厚さ1.4cmを測る。表面は磨られ滑らかであり、側面は敲打調整痕が残る。石材は砂岩。S7は敲石。全長6.4cm、最大幅4.2cmを測る。表面は磨られるが、下端部には使用痕が残る。石材は砂岩。S8は部分的に剥離調整面を残す磨製の石斧か石鍬。全長12.2cm、最大幅5.2cm、厚さ1.2cmを測る。石材は火成岩か。S9は両端を欠損するが、断面長方形を呈す砥石。残存長13.3cm、最大幅14.9cm、厚み3.2cmを測る。上面と両側面が砥石として使用され、底面は

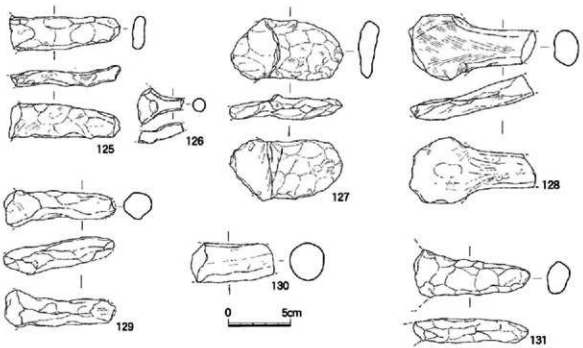


Fig.73 SD818 出土土製品（1/3）

雑に磨られる。石材は砂岩。S17は大型の扁平な砥石で、残存長25.1cm、最大幅14.4cm、最大厚3.3cmを測る。表面は風化・摩滅するが、上下、各側面は使用で磨られており、下面には敲打痕が残る。泥岩系の水成岩。

M１は袋状の鉄斧。残存長15.35cm、最大幅5.9を測る。表面は全体に錆が進むが重い。

132・136・139・142・143・144・145・149・155は下層、156・S６は最下層、133・135・137・140・157・S９はSD818底下出土。

W47・W48は農耕具か。W47は残存長30.2cm、残存幅7.50cmを測る。表面は丁寧なケズリ加工で左側面は円弧状に作り出し、右側面中央部に方形状の抉りがある。W48は薄い板材の左側面を斜めに削って尖らし、上端は鼓上に作り出す。残存長28.9cm、残存幅6.4cmを測る。W49は板状の木製品で、下端部は斜めに削り出す。表面は丁寧なケズリ仕上げ。全長29.2cm、最大幅9.0cmを測る。W48・W49とも樹種はアカガシである。

SD1201出土遺物（Fig.75、PL.83） 158はSD818の西側を流れる流路のSD1201出土の高坏。口縁が大きく開く坏部１／３片。調整は内外面ヘラミガキ仕上げ。

SD818・SD1210に伴う遺構（Fig.80・81、PL.63～68）

H-21～I-22区一帯で検出した遺構である。SX1262・1263・1267・1269などは関連する遺構と思われるので、一括して報告する。

SX1269は堰状遺構である。確認規模は幅3.6mを測る。直径８cm前後、長さ約3.4mの横材とそれに直交する縦材や斜材などが検出されたが、全体に残りは悪い。構築に使用された部材は周辺で伐採された自然木である。この堰南側から北西側にL形に湾曲して延びる落込みSX1262があり、その中間部にSX1262を横断して構築されたSX1263がある。

SX1262はSD818から北西方向にL形に張り出す落込みである。確認長８m、最大幅５m、最大深さ0.3mを測る。先端は丸く膨れ、付け根よりは深くなる。埋土は上層が砂質土淡黄色から暗灰オリーブ砂質土、下層は暗灰オリーブ色粘土である。この遺構の付け根部を直交する土堤SX1263がある。こ

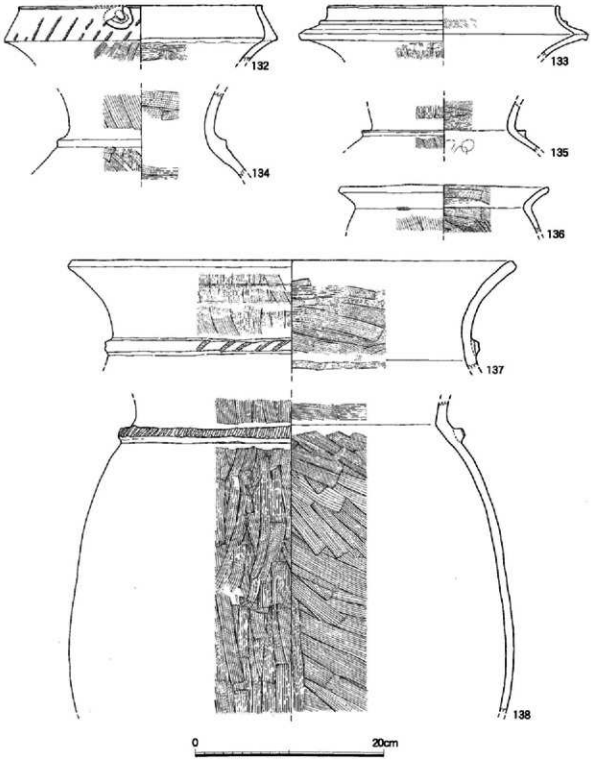


Fig.74　SD1210 出土土器①（1/4）

の遺構の壁から底面はオリーブ灰色粗砂（5GY 6/1）であるが、この堆積層には遺物を含んでおり、その堆積土を基盤面まで掘り下げたSX1262下部の遺構がSX1275となる。SX1275はSD818・1210の西岸まで広がる。

SX1263はSX1262の中央部を遮断する土堤。両側に横部材と杭を0.1～0.4m間隔で打ち、そこ杭材を横材で繋いでいる。二列の杭材間には粗砂混じりの黄灰色土粘質土をいれて構築している。この盛土

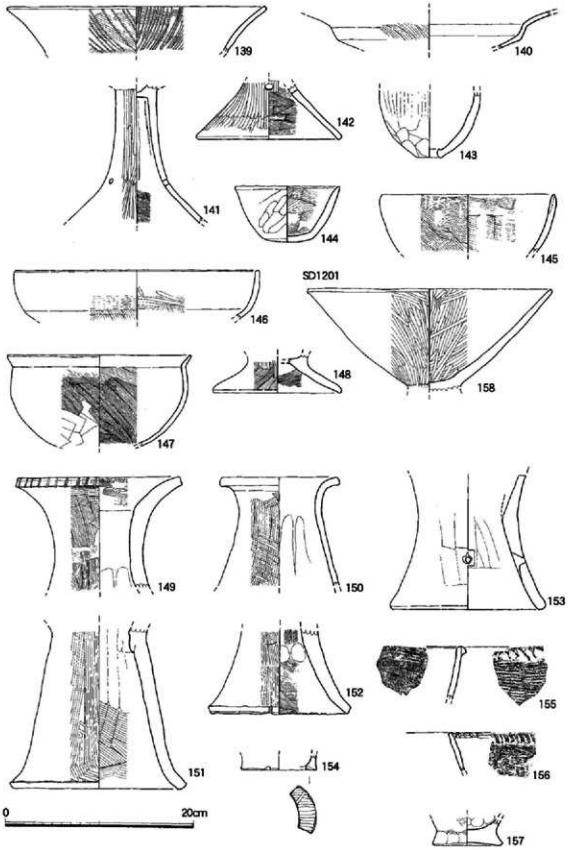


Fig.75　SD1210 出土土器② (1/4)

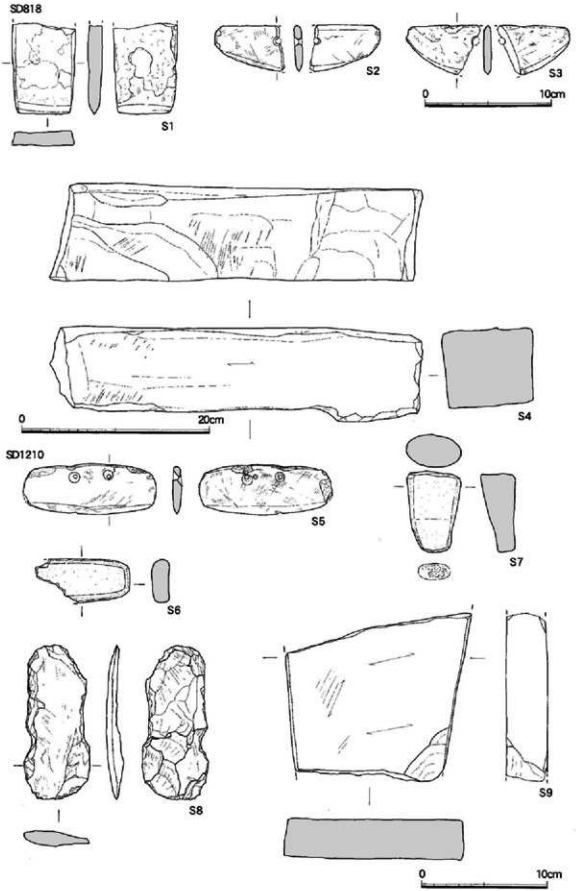


Fig.76 SD818・1210 出土石器（1/3・1/4）

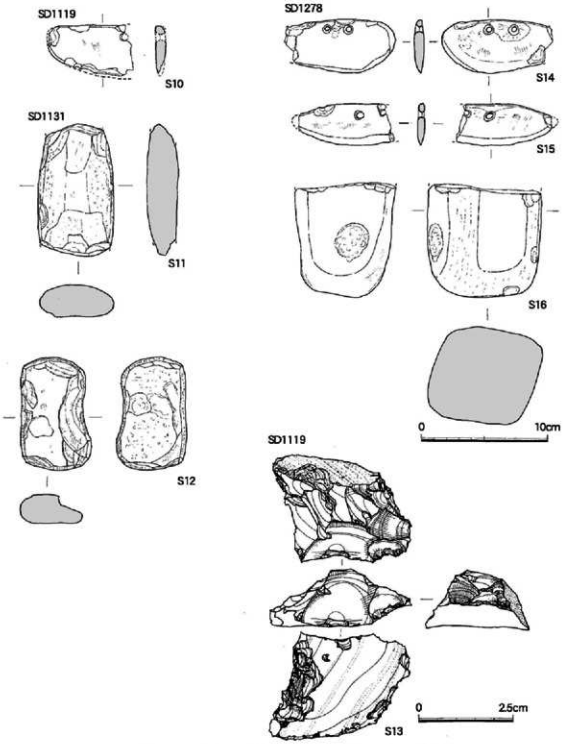


Fig.77　SD1119・1131・1278 出土石器（1/3・1/1）

の基底にはワラと思われるものを敷き込んでいた。北側にも全体規模は幅1.2m、長さは3.6m、高さ0.4～0.5mを測る。この土堤の西端は南側で幅0.6m程開いている。この空間は北側が広がることから北側のSX1262へ導水する水口と考える。この土堤は堰と直交する位置関係にあり、堰から取水した水を土堤の北側で一度貯水するなど、水量調節を行うための施設と考える。この遺構の北側SD818の西岸上にも二列の杭列が検出されていることから、土堤はSD818の北側にも続いていく。

SX1267はSD818の西側に構築されていた土堤である。SX1262部分で途切れている。二列の並行す

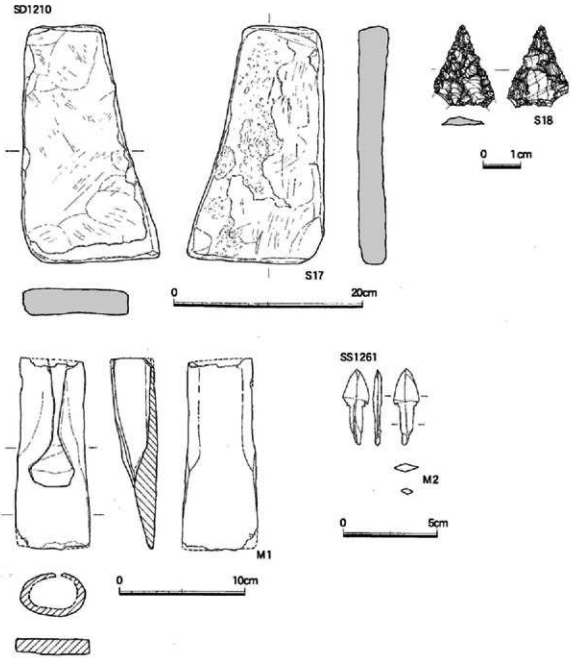


Fig.78 SD1210 出土石器、鉄器・銅鏃（1/4・1/1・1/3・1/2）

る杭列であるが、本来はSX1263と同じように間に盛土していたと思われる。

SX1269出土遺物（Fig.82・84、PL.100・101） 遺構内、周辺出土の遺物を報告する。SD818内にあるため、遺物の時期はほぼ同じである。

159・160は複合口縁壺1/6片・1/5片。調整はハケ目とナデ。161は小型の甕1/3片。調整は内外面ハケ目で、外面にはススが付着する。162・163は甕。162は口縁部1/10片。調整は口縁部はヨコナデ、胴部はハケ目で、外面ナデを加える。163は頸部に突帯を持つ1/7片。調整は内外面ハケ目である。突帯にはハケ目工具の木口による刻目が付く。164～169は高坏。164は坏部1/10片。調整は内外面ハケ目後ヘラミガキを加える。165は脚部片。坏部内面と脚外面はヘラミガキ、脚内面はナデ。

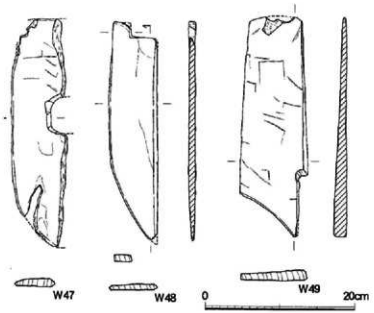


Fig.79 SD1210 出土木器（1/5）

166～169は脚部。それぞれ1/2片・1/4片・1/6片・1/10片。調整は外面ヘラミガキ。内面はハケ目。169は摩滅し調整不明。170は鉢の底部か。調整は内外面ハケ目。171～173は突帯文土器。171は口縁部1/6片。口縁下に突帯が刻目付く。調整は外面条痕、内面板ナデ。外面ススが付着する。172・173は刻目突帯が付く屈曲部細片。調整はいずれも外面条痕、内面はナデ。

W54は枝の湾曲部を加工した木製品。表面は樹皮を丁寧に剥いて、端部は丁寧なケズリ加工を行う。W55は建築材で、全長129.8cmを測る。一端を尖らし、一端は欠き込みを行っている。表面には樹皮が残る。

SX1262出土遺物（Fig.83・84、PL.84・100） 174は1区出土。壺頸胴部1/6片。頸部に突帯が巡る。調整は胴部ハケ目、頸部内面はナデ、外面はハケ目でナデ。175は甕口縁部1/7片。調整は外面ハケ目後ヨコナデ、内面は口縁部ヨコナデ、胴部はナデ。176は甕口縁部1/8片。調整は外面ハケ目後ヨコナデ、内面はヨコナデ。177・178は鉢。177は手捏の浅い鉢1/9片。指押さえ痕が内外面残る。178は1/10片で、調整は内外面ハケ目。1区出土。179は高坏坏底脚部。調整は外面ハケ目後ヘラミガキ、坏内底はヘラミガキ。1区出土。

W51は杭。全長34.0cmを測る。全体に粗いケズリで先端を尖らす。

SX1263出土遺物（Fig.83・84、PL.84・100） 180～182は壺。180は長頸壺の胴部1/4片。偏球の胴部中央に刻目突帯が巡る。調整は外面突帯上部はヘラミガキ、下半はナデ。内面はナデとハケ目。181は複合口縁1/5片。調整は口縁部ヨコナデ、頸部内外面はハケ目。182は複合口縁の長頸壺か。1/8片で調整はヨコナデ。183・184は甕。183は口縁部1/8片。調整は胴部ハケ目、口縁部外面ヨコナデ、内面はハケ目。外面にはススが付着する。184は1/8片。頸部には低い三角突帯が付く。調整は内外面ハケ目。185は甕底部1/4片。調整は胴部外面ハケ目、底部と内面はナデ。186は高坏口縁部1/10片。調整は内外面ハケ目後ヘラミガキ。187は器台で脚部を欠損する。調整は口縁部から内面はナデ。体部外面ハケ目。188は体部が丸い鉢1/8片。調整は内外面ハケ目。

W52は刃先が丸い広鍬。全長43.0cmを測る。表面は丁寧なケズリ加工であるが、傷みが激しい。方

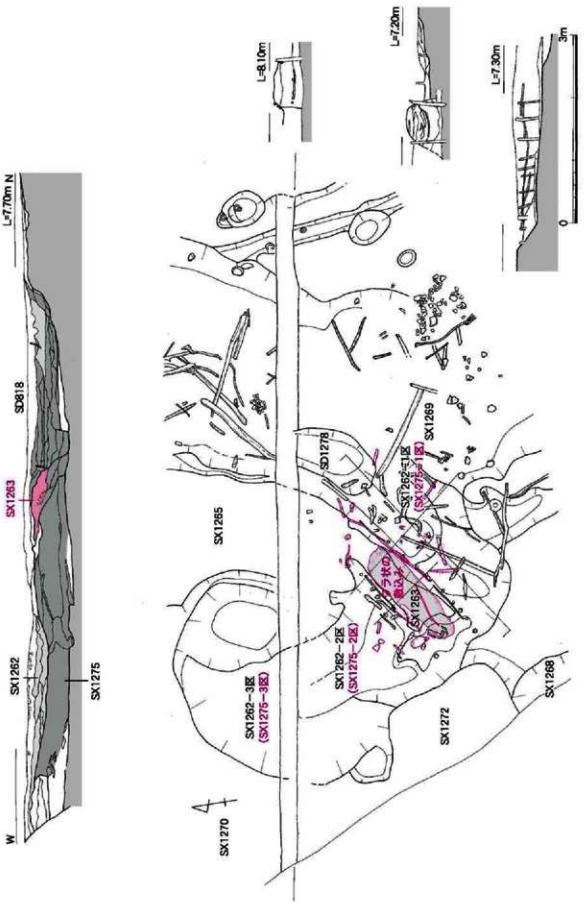


Fig.80 SD818・1210 内出土 SX1262・1263・1269 (1/60)

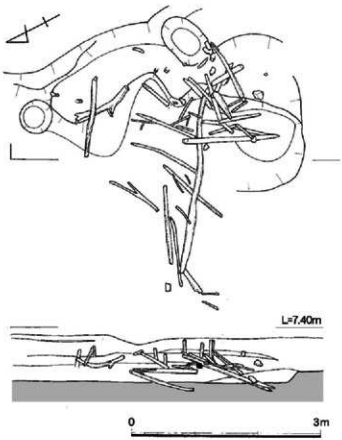


Fig.81 壇 SX1269 (1/60)

形の柄壺は3.3×4.7cmを測る。W53は杭。残存長97.4cmを測る。樹皮が残る自然木の先端を粗いケズリで細く尖らすもの。

SX1267出土遺物 (Fig.85、PL.84) 189は偏球な胴部の壺1/10片。胴部の屈曲部にヘラによる刻目が付く。精緻な作りで調整は外面ヘラミガキ、内面は丁寧なナデ。190・191は甕口縁部1/8片・1/8片。調整は内外面ハケ目。192～194は高坏。192は口縁が内傾する形態。1/3片で調整は内外面ハケ目後ヘラミガキかナデ。底部との屈曲部に刻目が付く。193は坏部1/10片。表面やや摩滅するが、調整は内外面タテヘラミガキで、外面ハケ目が残る。194は口縁が直立するが193とほぼ同形態か、鉢か。1/5片で調整は内外面ヘラミガキ。外面黒塗りか。195～197は鉢。195は口縁部が外折する鉢。口縁から体部1/4片。調整は口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケ目、内面は板ナデ。196は1/3片で、調整は口縁部ヨコナデ、体部はハケ目。197は浅い鉢1/10片。調整は丁寧なナデ。198は器台1/4片。口縁部には刻目が付く。調整はハケ目、内面はナデ、ハケ目。199は土製円板。前期土器底部片利用で直径は7.35cmを測る。調整は摩滅し不明。

SX1213・SX1214出土遺物 (Fig.86、PL.93) 200はH-22区のSX1213出土。壺の底部。調整は内外面ハケ目後ナデ。外面ススが付着する。201～203はSD818内で検出したもの。201は複合口縁壺口縁1/12片。調整はナデで外面ハケ目が残る。202は高坏脚部1/3片。調整は外面ヘラミガキとハケ目、内面はハケ目。脚裾にはススが付着する。203は器台1/4片。調整は内外面ハケ目で、内面には円形

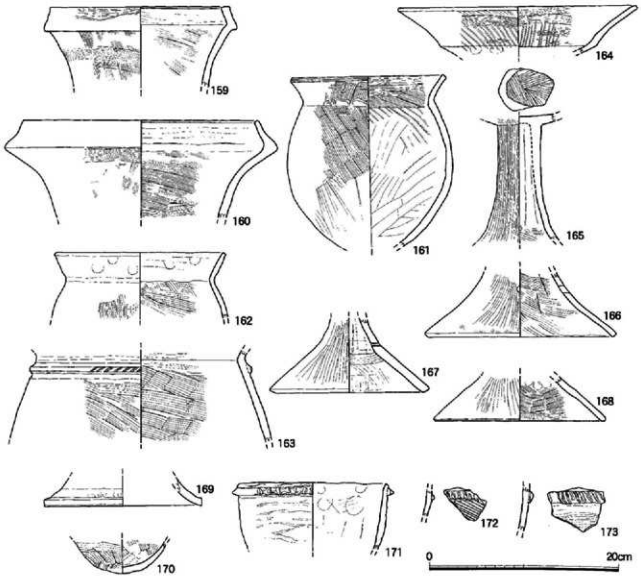


Fig.82　SX1269 出土土器（1/4）

の剥離痕があり、ナデを加えている。

SX1270出土遺物（Fig.86）　調査区北西隅I-22区をSX1270として遺物を取上げたもの。204は甕口縁部1/7片。復元口径12.7cmを測る。調整は外面やや摩滅するが、口縁部ヨコナデ、内面はヨコハケメ後ナデ。205は甕口縁部1/8片で、復元口径19.6cmを測る。調整は内外面ヨコハケ目。206は高坏脚部。表面やや摩滅するが、調整はハケメ、脚内面はナデ。

SX1272出土遺物（Fig.86）　調査区北西隅SX1262西側で出土した遺物をSX1272として取り上げた。207は鉢1/7片で、復元口径26.0cmを測る。調整は内外面ハケ目、外面黒斑がある。208は器台体部1/3片。調整は内外面ハケ目とナデ。

SX1275出土遺物（Fig.84・86、PL.84・100）　209は小型壺1/4片。調整は内外面ナデで、外面は丁寧なナデ。口縁部内面はハケ目。210は複合口縁壺1/8片。調整はハケ目。211～214は甕。211～213は口縁端部が上方へ摘み上げる形態。残存率はそれぞれ1/4・1/6・1/6片。調整はいずれも

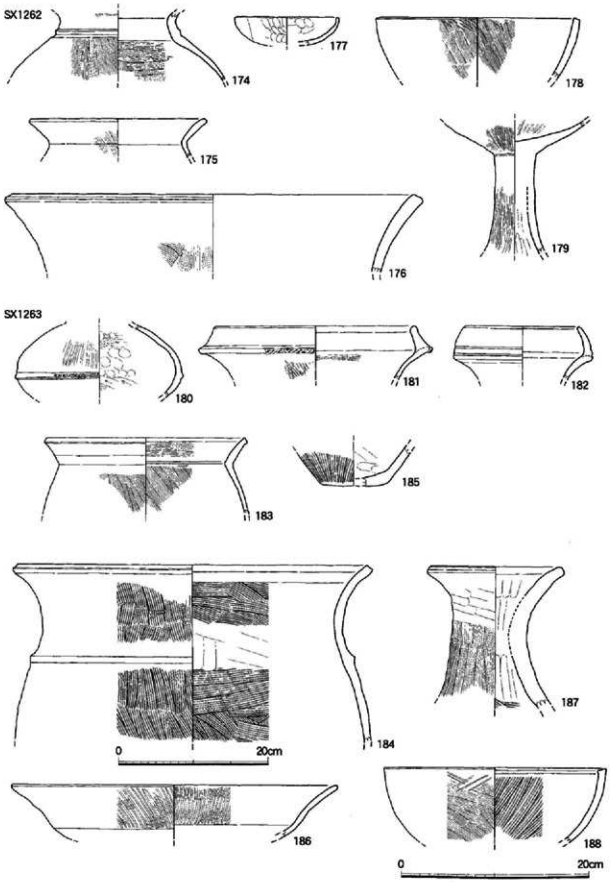


Fig.83　SX1262・1263 出土土器（1/4・1/5）

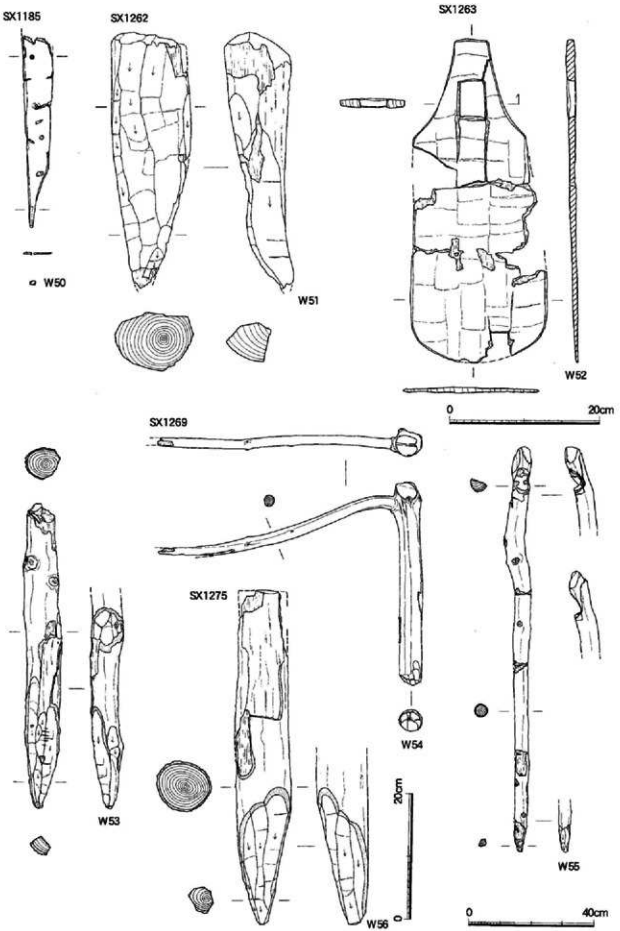


Fig.84 SK1185・1262・1263・1269・1275 出土木器（1/5・1/6・1/12）

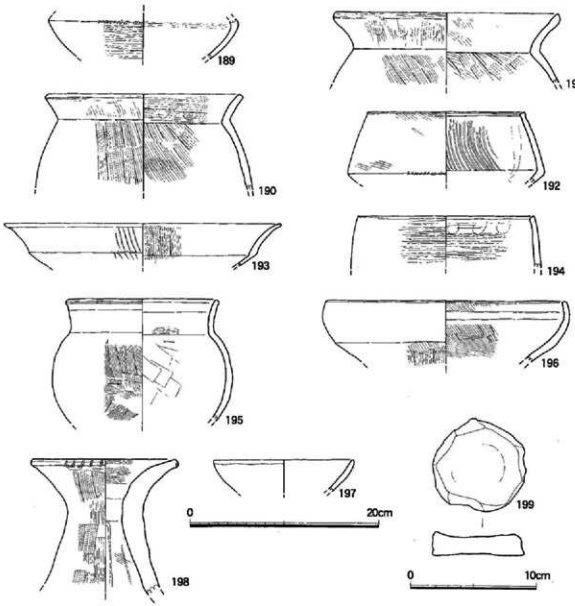


Fig.85 SX1267 出土土器（1/4・1/3）

内外面ハケ目。211の外面にはススが付着する。214は1/4片で、調整は内外面ハケ目。215は前期の壺か鉢の底部1/4片。調整は丁寧なナデ。216は器台で底部を欠く。調整は体部タタキ後ナデ、内面はハケ目と指ナデ。217は土器片利用の円板。直径3.5cm、縁辺を打ち欠きし、調整はナデ。

W56は杭材。全長53.4cmを測る。表面には樹皮が残り、端部は削って尖らす。樹皮が残る。

SX1276出土遺物（Fig.87、PL.83） 218は小型甕1/6片で、調整は口縁部ヨコナデ、胴部はハケ目。219・220は甕の底部。219は丸底気味で、調整は内外面ハケ目。内底部はナデを加える。220は3/4片で、調整は外面ヘラミガキ、内面はハケ目。外底部はナデ。221・222は器台。221は口縁部1/4片。調整は外面ハケ目、内面はハケ目とナデ。口縁端部には刻目が付く。222は体部1/2片。調整は外面タタキ、内面はナデとハケ目。

SX1277出土遺物（Fig.87） 223は小型壺胴部1/6片。調整は外面摩滅し不明、内面はナデ。224は

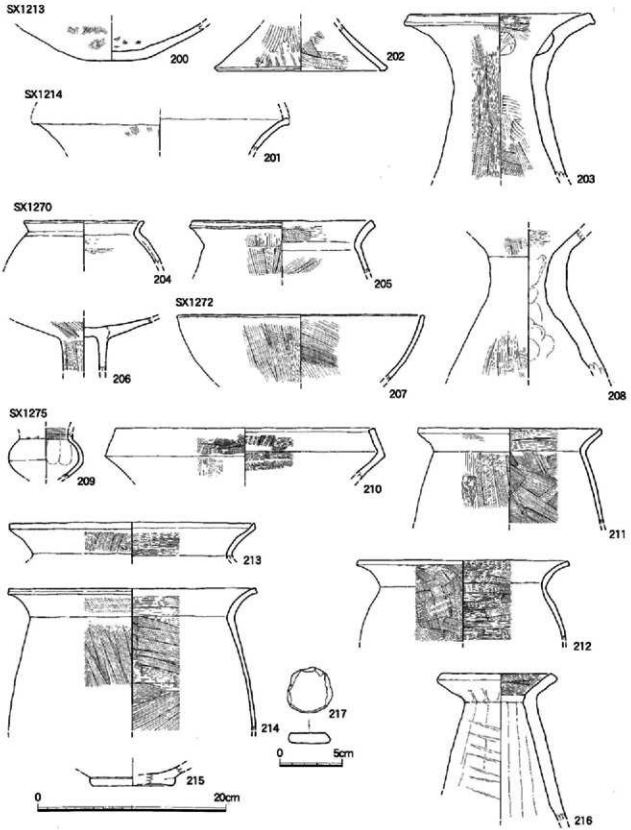


Fig.86 SX1213・1214・1270・1272・1275 出土土器（1/4・1/3）

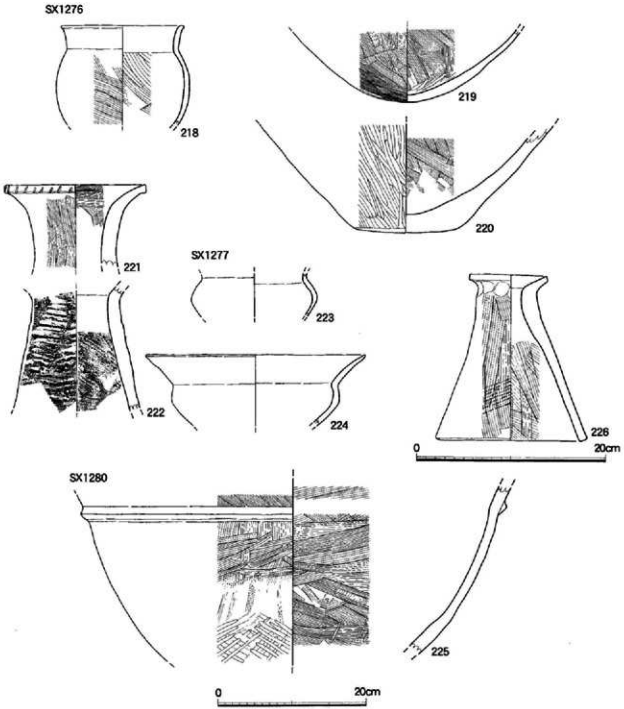


Fig.87 SX1276・1277・1280 出土土器（1/4・1/5）

鉢1/4～1/6片で、復元口径23.2cmを測る。器表は摩滅がひどく不明。

SX1280出土遺物（Fig.87、PL.84） 225は大型の甕下胴部片で、突帯が付く。調整は内外面ハケ目で、外部下半にはタタキ痕が残る。226は器台で、口縁と底部を部分的に欠く。調整は口縁部ナデ、体部はハケ目で、外面下半かすかにタタキ痕が残る。

SD1088（Fig.88、PL.61）

I-17区で検出した西壁から湾曲して北に流れる溝で、SD735に切られる溝。確認長は7mで、溝幅は1.7～2.3m、深さ0.3mを測る。底面は草が生えていたのか凹凸が激しい。埋土はオリーブ黒色粘土で、暗灰黄色砂質土を混入する。

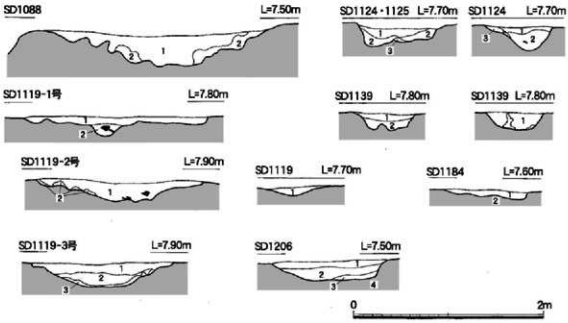


Fig.88 SD1088・1119・1124・1139・1184・1206 土層（1/40）

出土遺物（Fig.90） 弥生時代初頭から前期を中心とした土器が少量出土している。

227は前期の壺口縁部細片。調整は内外面ヘラミガキで、外面から内面上半丹塗りである。228～230は刻目突帯の口縁部細片。いずれも口縁端部突帯が巡る。調整は器表面はやや摩滅するがナデ、刻目はヘラによる。

SD1093

I-16区から17区で検出した小溝。溝は浅く、残りは悪い。埋土は黒色粘質土である。

出土遺物（Fig.90、PL.84） 弥生時代後期の土器が少量出土している。

231は短頸壺口縁1/3片。調整は外面ハケ目、内面はナデ。232は手捏のミニチュア土器鉢。ほぼ完形で、口径7～7.2cm、器高4.4cmを測る。指押さえ後外面ハケ目、内面はナデ。

SD1094

I-14区から15区に南北に延びる小溝。確認規模は7m、幅は0.5m、最大深さ5cm程を測る。埋土は黒色粘質土に青灰色から灰色地山粘土ブロックを混入する。北側のSD1095と溝幅、埋土、出土遺物などが同じであり、また出土遺物もほぼ同時期であるので本来は同じ溝であったと考える。

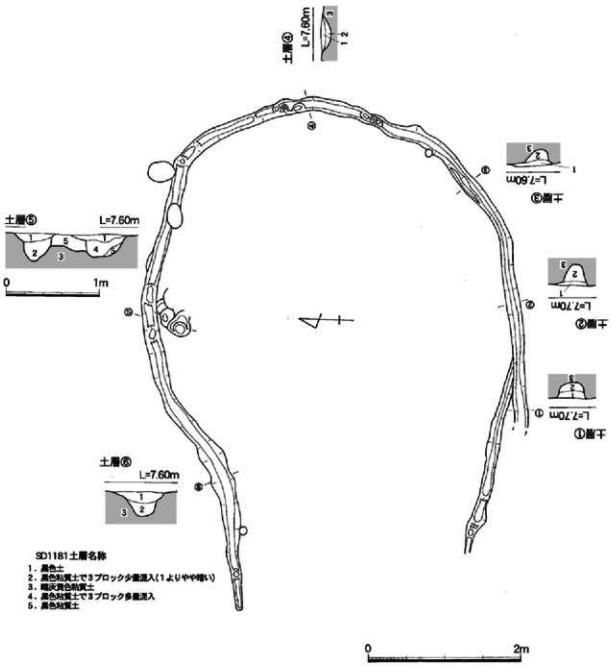


Fig.89 SD1181（1/50・1/40）

出土遺物（Fig.90、PL.84） 弥生時代初頭頃の刻目突帯文土器が出土している。

233は小型の壺胴部片。胴部外面頸部に3条、胴部中央には1条の沈線を巡らし、その間に3重の円弧状沈線を加える。調整は外面ヘラミガキ、内面はヨコハケ目。234は刻目突帯甕口縁部細片。調整は板ナデ。

SD1104

H-17区で検出した小溝。確認長3,4cm、最大幅0.7m、最大深さ0.15mほどを測る。SB1249の柱穴な

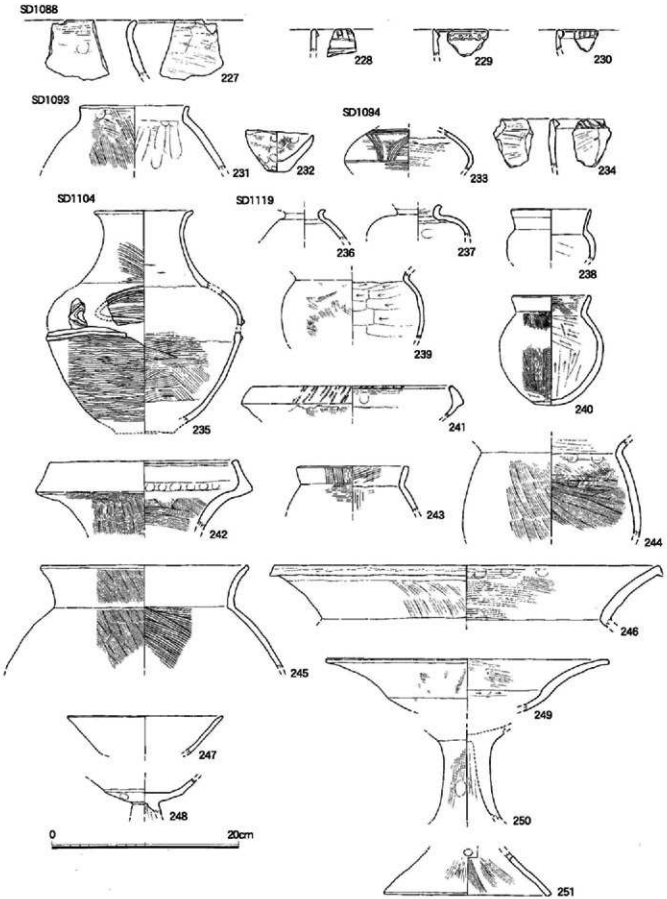


Fig.90 各溝出土土器① (1/4)

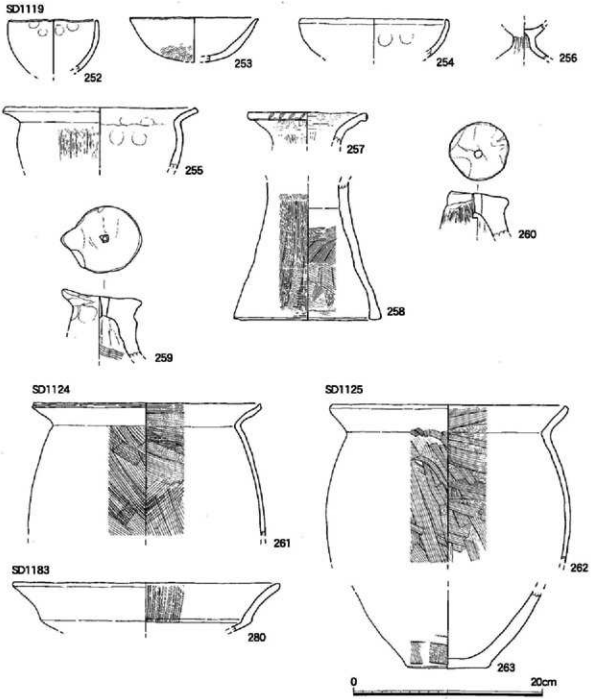


Fig.91　各溝出土土器②（1/4）

どと重複し、形状は不成形を呈す。埋土は黒褐色粘質土に地山粘土ブロック混入。

出土遺物（Fig.90、PL.84）　弥生時代前期の丹塗り土器などが少量出土している。

235は壺で破片から復元した。類例を見ないが、形態から前期のものと考える、復元口径10.6cm、復元高23.5cmを測る。胴部上半に三角突帯が巡り、その上部に貼付け突帯文様が付く。調整は外面ヘラミガキ、口縁部は摩滅が進むが内面はナデで、下半はハケ目。

SD1108

H-13区から14区で検出した北西方向に延びる小溝。確認長約13m、幅0.5～0.6m、深さ5cm程を測る。SD1139を切る。埋土は黒褐色粘質土である。**出土遺物**は弥生時代後期頃の土器片が少量出土している。

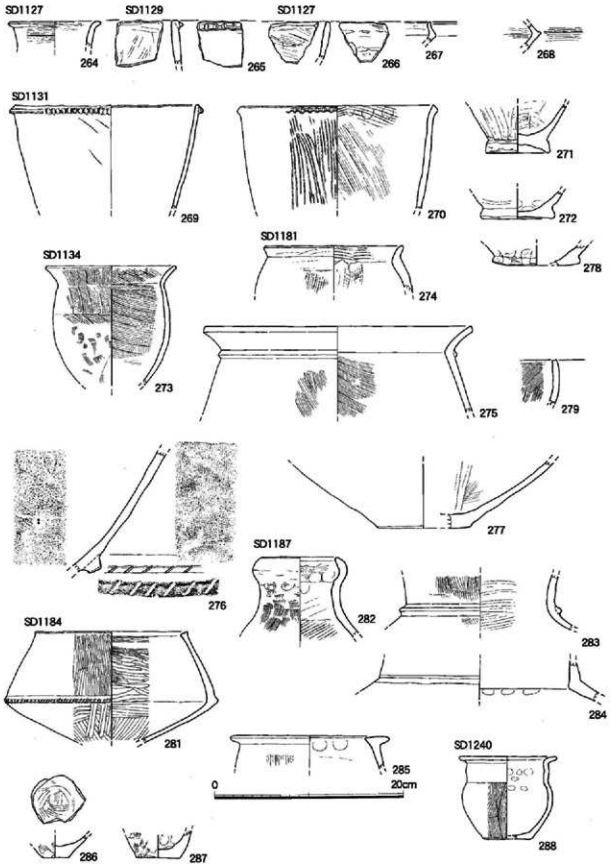


Fig.92 各溝出土土器③ (1/4)

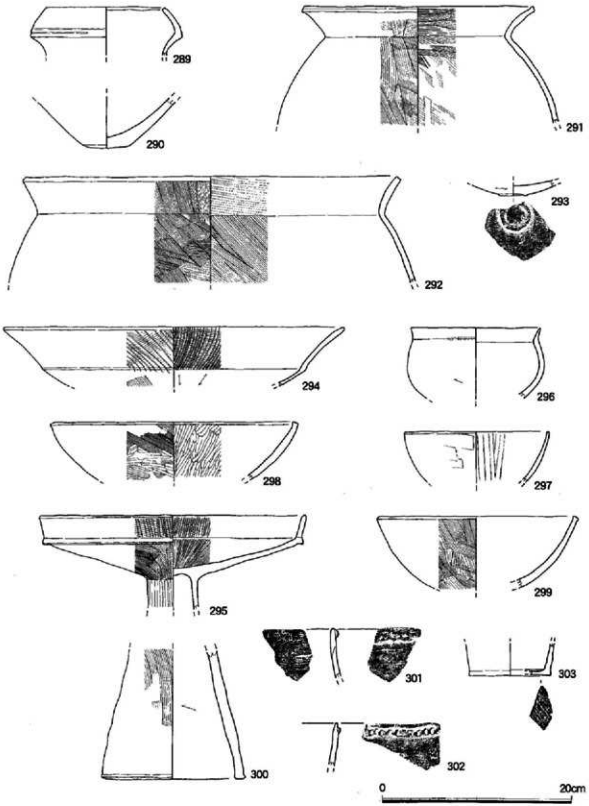


Fig.93　SD1278 出土土器（1/4）

SD1119（Fig.88、PL.61）

F-11区からG-14区にかけてSK1147まで延びる主軸を北北西方向に取る小溝。溝幅0.5～2m、深さ0.2m程で南側が狭くなる。埋土は暗灰オリーブ粘質土である。溝北側を中心に多量の土器片が廃棄

されていた。溝自体北側の標高が高く、南が低いことから、井戸と考えられるSK1147から水を流した溝と考えるが、出土遺物が土坑より時期が新しく、機能が停止した後に土器が廃棄された可能性ある。

出土遺物（Fig.77・90・91、PL.84・85・93）弥生時代後期から古墳時代初め頃の土器が多量出土している。

236～240は古墳時代初め頃の土器。236～238は壺。236は二重口縁壺片か、調整はナデ。237は丸く肩が張る体部。調整は板ナデ。238は小型丸底壺。口縁から胴部1/8片で、調整は口縁部ヨコナデ、胴部はナデ。239・240は甕。239は小型の甕胴部1/5片。調整は外面細かいハケ目、内面ヘラケズリ。240は小型の甕で復元完形。底部は平底気味。調整は外面ハケ目で、底はケズリ、内面は内底ヘラケズリ、上半はナデ、口縁部はヨコハケ。241～246は弥生時代後期後半のもの。241・242は複合口縁壺。241は1/6片で、調整はヨコナデとハケ目で、口縁外面に工具の木口による刻目が付く。242は1/6片。調整はヨコナデ、頸部はハケ目。243～246は甕。243は小型の甕。口縁部1/7片で、調整はハケ目で、口縁端部にもハケ目。244は頸胴部1/6片。調整は胴部内外面ハケ目。外面に斑状に黒斑がある。245は丸味のある胴部を持つ1/8片。調整はハケ目であるが、口縁部内面はハケ目後ナデ消す。二次的火熱を受けるか。246は大型甕口縁部1/12片。調整はハケ目とヨコナデ。247～251は高坏。247・248は古墳時代前期土師器。247は坏部小片。器表は摩滅し調整は不明。248は坏体部と底部の境に段を有す。器表面は摩滅し調整は不明。249は弥生時代後期後半の坏部1/7片。器表面はやや摩滅するが、ハケ目とヨコナデ、内面はヘラミガキ。250は高坏脚部。調整は外面ハケ目、内面シボリ痕が残る。251は脚裾部1/4片。調整は外面ハケ目後ヘラミガキ、内面はハケ目後ヨコナデ。裾部中央には直径0.9cmの円孔がある。252～255は鉢。252～254は椀形。252は1/5片で、器表面は摩滅し調整は不明。253は1/6片で、調整はナデで、外底部は粗いハケ目。254は1/8片で、調整はナデである。255は口縁が外折する形態。調整は体部外面ハケ目、口縁から内面はナデで、外面ススが付着する。256は脚台か高坏脚部。調整は丁寧なナデ。257・258は器台。257は口縁部1/3片。調整はハケ目で、口縁端部にはヘラによる刻目が付く。258は体部から底部1/4片。調整は内外面ハケ目で、外面にはタタキ痕が残る。259・260は支脚の頂部で259は窟口。いずれも頂部中央に径0.5cm、0.8cmの円孔がある。調整はナデとハケ目で、内天井部にはシボリ痕が残る。

S10は石包丁 1/2片。残存長6.7cm、残存幅4.0cm、厚み0.8cmを測る。研磨仕上げであるが、剥離・欠損が著しい。紐孔が1か所残る。石材は粘板岩である。S13は黒曜石の石核。最大幅3.73cmを測る。

SD1124（Fig.88、PL.62）

E-12区からF-14区に延びるやや蛇行して流れる小溝。SD1125を切る溝である。溝幅は0.5m前後、深さ0.25m程測る。埋土はオリーブ灰色粘質土で、下層は青灰色地山粘土を含む。

出土遺物（Fig.91）弥生時代後期頃の土器が少量出土している。

261は甕口縁部1/4片で、口縁端部はやや跳ね上がる。調整はハケ目で、口縁部外面ヨコナデ。

SD1125（Fig.88、PL.62）

SD1124とほぼ重複し、かつ先行する溝である。溝幅もあまり変わらない。深さも0.2m程である。埋土はオリーブ灰色粘質土に青灰色地山粘土ブロックを混入する。

出土遺物（Fig.91、PL.85）弥生時代後期後半頃の土器が出土している。

262は甕口縁部1/4片。調整はハケ目で、口縁部外面はヨコナデ。263は甕底部。調整は外面ハケ目後ナデ、内面はナデ。

SD1127

F-12区からF-13区にかけて延びる溝。確認長は約11m、幅は0.3m、深さ0.15mを測る。埋土は暗オリーブ灰色粘土である。

出土遺物（Fig.92） 弥生時代前期初頭の土器が出土している。

264・266・267は弥生時代前期初頭の土器である。264は壺口縁部1/6片。調整はヨコヘラミガキ。266は鉢細片。調整は外面ナデ、内面は板ナデ。267は浅鉢口縁部細片。調整はナデ。

SD1129

E-12区から13区で検出した小溝。SD1124・1125に切られる。確認長は12.5m、幅0.3～0.5m、最大深さ0.1mを測る。埋土は黒色粘土に地山ブロック混入。

出土遺物（Fig.92） 弥生時代前期初頭頃の土器が出土している。

265は刻目突帯甕の口縁部細片。調整は板ナデ。

SD1131

F-12区で検出した南北方向の溝。確認長は6m、幅0.9m、深さ0.1mを測る。埋土は灰オリーブ粘質土である。

出土遺物（Fig.77・92・105、PL.85・93） 弥生時代前期初頭の土器が出土している。

269～270は刻目突帯文土器甕口縁から胴部。いずれも口縁外面に幅広の棒状工具の刻目が付く。268は屈曲部細片。調整はヘラミガキ。269は1/3片。調整は板ナデ。270は1/6片。調整は粗いハケ目。271・272は底部。271は1/2片。やや上げ底。調整は板状工具ナデ。272はわずかに上げ底。1/2片で、調整はナデ。

S11は磨製石斧の欠損品。残存長10.5cm、最大幅6.05cmを測る。表面は研磨調整で、敲打調整痕が残る。S12は石斧を転用した敲石か。全長9.2cm、最大幅5.6cm、厚み2.3cmを測る。表裏面は雑な研磨仕上げで、敲打調整痕が残る。

SD1133

G・F-14区で検出した東西方向に断続的に続く小溝。SD1119に切られる。幅は0.2～0.3m、深さは最大5cm程を測り、埋土は黒色粘質土である。**出土遺物**はない。

SD1134

F-11区～12区で検出した小溝。SD1119の南側の延長上で検出した溝。確認長は8m、幅0.3m、深さは5～10cmを測る。埋土は黒褐色粘質土と青灰色地山粘土ブロックの混合である。

出土遺物（Fig.92） 弥生時代中期から後期の土器や黒曜石剥片などが少量出土している。

273は小型甕1/4片。調整は内外面ハケ目で、外面はススが付着する。

SD1139（PL.62）

G-13区～H-13区にかけて弧状に広がる小溝。H-13区でSD1111に切られる溝。埋土は黒色粘質土で、下層には地山粘土ブロックを混入する。幅は0.4～0.65m、深さは0.15mを測る。**出土遺物**は弥生土器が少量出土している。

SD1181（Fig.89、PL.62）

G-19区～H-20区で検出した鍵孔形を呈す溝。西側はSD1187を切る。西側先端での間隔は6m、東側では9.5mを測る。南側は溝の付け替えがある。溝幅は0.25～0.55m、深さは0.1～0.2mを測る。埋土は黒色土から黒色粘質土である。

出土遺物（Fig.92） 弥生時代後期頃の土器が出土している。

274は小型甕口縁部1/9片。調整は内外面ハケ目とナデであるが、胴部内面粘土を撫でつけたような痕跡が残る。275は頸部に三角突帯が付く甕口縁1/10片。口縁部は摩滅するが、胴部の調整はハケ目である。276は大型甕胴部下半片。断面台形の突帯が巡る。ヘラによる刻目が付き、調整はハケ目。277は壺の底部1/3片。調整はナデである。278は底部1/5片で広葉樹の葉脈痕が残る。279は口縁がやや内傾する鉢細片。調整は外面ナデ、内面はハケ目。

SD1183出土遺物（Fig.91） SD1184から続く溝状の浅い遺構である。弥生時代後期頃の土器が少量出土している。

280は高坏坏部1/10片。調整は外面摩滅するが、内面はヘラミガキ。

SD1184

H-18区で検出したSK1185に切られる溝。SD735に切られ残りは良くない。確認規模は4.5m、幅0.9m、深さ0.1mを測る。埋土は黒色粘質土で地山ブロック混入。

出土遺物（Fig.92、PL.85） 弥生時代後期頃の土器が出土している。

281は弥生時代後期後半の高坏坏部1/3片。形態は体部と底部が張り、その境に突帯を有し、ヘラによる刻目が付く。調整はヘラミガキ。

SD1187（Fig.62・64、PL.58）

調査区北西側微高地縁辺SD818の東側を南北に延びる溝で、北側ではSD818に切られる。溝幅は0.4～0.7m、最大深さ0.1m程を測る。この溝は台地下上層を薄く覆っていた遺物を含む暗オリーブ灰色粘質土下で検出した。埋土は上層より暗い暗オリーブ灰色粘質土である。

出土遺物（Fig.92） 弥生時代中期後半以降の土器が出土している。

282は中期末頃の袋状口縁壺1/2片。調整は内外面ハケ目であるが、口縁部内面は指押さえと細かいハケ目。283・284は壺の頸部。283は1/8片で、頸部にはM角突帯が付く。調整はハケ目。284は1/6片で調整はナデ。285は弥生時代中期中頃の甕口縁部1/10片。調整はヨコナデで外面ハケ目。286・287は小型の底部。286の調整は内面螺旋状のハケ目、外面はヨコナデとハケ目。287の調整はナデとハケ目。

SD1192

SD1187から6～6.5mの間隔を空けて並行して断続的に延びる小溝。溝幅約0.3m、最大深さ0.1m程を測る。埋土は黒褐色粘質土である。**出土遺物**は弥生時代後期頃の土器が少量出土している。

SD1240出土遺物（Fig.92）

本溝とSD1234・1235・1239・1273は、第Ⅱ面から第Ⅲ面迄の掘削時に使用したバックホーのキャタピラ跡と思われるものである。288は小型の壺1/4片。調整は外面ハケ目、口縁部から内面はナデ。弥生時代後期前半のもの。

SD1222出土遺物（Fig.78）

SD1278（Fig.63、PL.66）

H-21区のSD818・SD1210底で検出したS字状に蛇行する溝状の落ち込み。確認規模は長さ12m、幅2～2.3m、深さは、0.2～0.3mを測る。別番号を付けたが、SD818・1210に関連するものであろう。

出土遺物（Fig.77・93、PL.93） 弥生時代後期後半から古墳時代初めの土器などが出土している。

289は複合口縁壺1/6片。調整はナデ。290は底部。調整はやや摩滅するがハケ目。291は甕口縁部1/4片。調整はハケ目である。292は大型の甕口縁部1/10片。調整は内外面ハケ目。293は高台状の平底底部である。胴部の広がりから壺か。調整はナデ。終末頃のものか。294・295は高坏。294は坏部1/3片。調整は口縁から体部はハケ目後ヘラによる暗文が入り、底部は外面ハケ目、内面はヘラミガキ。295は山陽系の特徴を持つ坏部1/2～1/3片。調整は坏部外面から内面細かいハケ目に暗文風放射線状ヘラミガキ、坏底部はハケ目後ヘラミガキ、脚部はヘラミガキ。中期末から後期前半頃か。296～299は鉢。296は土師器の鉢1/6片。調整は外面上半ハケ目後ナデ、下半はヘラケズリ、内面は丁寧なナデ。297・298は体部が丸い椀形のもの。297は1/8片で、調整は内外面板ナデで、工具痕が残る。298は広口1/6片。調整は外面上半がハケ目、下半と内面はヘラミガキ。299は大型で底が深い1/4片。調整は外面ハケ目、内面はナデ。300は器台1/3片。調整は外面ハケ目とナデ、内面は

ナデ。301・302は刻目突帯文土器口縁部細片。調整は301が条痕、302がナデ。303は楽浪系土器の筒坏底部1/5片。調整は体部はヨコナデ、外底部は静止糸切り。

S14・15は石包丁。S14は残存長8.7cm、残存幅4.2cm、厚み0.8cmを測る。丁寧な研磨仕上げであるが、欠損が著しい。S15は残存長7.6cm。幅3.25cm、最大厚0.55cmを測る。表面は欠損が著しい。S16は磨石片。残存長9.0cm、最大幅8.9cm、最大厚7.9cmを測る。各面使用の擦り痕跡が残り、左側面には敲き使用痕も残る。

③ 土器群（SX）

SX1156（Fig.94・105、PL.70・85・92・94）

I-19区の西壁沿いで検出した土器群。SX1186の上面で検出しており、時期もほぼ同時期ものであることから、同一遺構と考えるが、別遺構として番号を付し取り上げたので、それで報告する。

304～306は複合口縁壺。304・305は口縁部片でそれぞれ1/6片・1/4片。調整は内外面ハケ目で、304の口縁部はヨコナデ。306は胴上部2/3片で肩に突帯を巡らす。調整はハケ目で、口縁部内外面はヨコナデ、肩部内面はナデを加える。307は豊前系の高坏口縁部1/8片。摩滅がひどく調整は不明。308は鉢1/4片。調整は内外面ヘラミガキで外面はハケ目が残る。309～311は器台。1/4片・1/4片・1/3片で、調整は309・310は外面タタキ後ハケ目、内面はナデとハケ目。いずれも口縁部に刻目が付く。312は蓋の頂部。径5.4cmを測る。調整は外面ハケ目、内面はナデ。313は土器片を再利用した円板。直径5.6cm、厚さ1.0cmを測る。

S19はスクレパーで、全長4.1cm、幅3.3cmを測る。石材は古銅輝石安山岩。

SX1186（Fig.95～105、PL.69・71～73・85～90・94）

調査区北西側段落ち部沿いI-19区からH-21区にかけて検出した土器群である。一部はSD818上面に流れ込んだものもあった。またこの土器群には部分的に炭化物が伴っていた。土器群は大きくA～Eの5ブロックに分かれ、調査時、出土土器は遺構面より20cm上面のものと、遺構面に密着して出土するものに分けて取り上げた。遺物の時期は弥生時代後期後半から終末期のもので、時期幅がある。上層と下層遺物の時期差であろうか。遺物の時期からSD818とほぼ同時期である。

314～336はA群の土器。314～321は壺。314・315は下膨れの広口の小壺。314は器壁は薄く精緻で、調整は外底部と口縁部内面が細かいハケ目、その他はナデ。315は口縁部が外反する。底部を欠損する。器壁は摩滅するが、かろうじて櫛描の連続同心円文が確認できた。316は手捏の小型壺1/2片。内面指押さえ痕が残り、外面は板ナデなどである。317は短頸の口縁から胴部1/6片と底部から復元した。調整は外面ハケ目と下半はヘラナデや板ナデ、口縁部内面はハケ目、内面は板ナデ。318は丸く胴が張る壺1/4片程。調整は口縁部ヨコナデ、胴部はハケ目、下胴部はナデで胴部中央に細い黒斑がある。319は口縁から胴部1/4片で、破片から推定した。口縁端部の両側にはヘラによる刻目が付く。口頸部から胴部の調整はハケ目で、外面タタキ痕が残る。320・321は複合口縁壺で、頸部と胴部に突帯が付く形態。胴部の突帯には刻目が付く。320は全体1/2以上残る。器形はやや歪む。調整は胴部から頸部内外面はハケ目、底部と口縁部はナデ。321は破片復元。調整は胴部外面やや摩滅するがハケ目、口縁部と底部はヨコナデ、胴部内面はナデで指押さえ痕やハケ目がある。322～324は甕。322は胴部が丸く、底部が丸底気味の形態。1/3片で、調整はハケ目と内面丁寧なナデで、外面黒斑がある。323・324は長胴の形態で、底部は凸レンズ状を呈す。323の調整は外面ハケ目後タタキ、内面はハケ目。口縁部はヨコナデ、外底部はハケ目。324は口縁・胴部と下胴・底部とから復元した。口縁部はハケ目とヨコナデ、胴部はハケ目である。外面には黒斑がある。325・326は高坏。325は坏部

1/6片。表面は摩滅するが、内外面ハケ目である。黒斑がある。326は1/2片で、調整は坏部の口縁部外面ヨコナデ、底部はハケ目、内面はヨコハケ目後ミガキか丁寧なナデ。脚部は外面タテヘラミガキ、内面はナデとハケ目。脚部には2か所1対の円孔が3カ所あるが、間隔は不規則である。327～331は鉢。327はミニチュアの鉢4/5片。調整は外面板ナデ、内面ナデで指押さえ痕残る。328はほぼ完形。調整はナデ。329・330は外折する口縁部を持つ平底の形態。329は1/3片で、調整は胴部から底部外面ハケ目後ナデ、口縁から内面はヘラミガキと頸部はケズリ。330は復元完形で歪みが大きい。調整は外面ハケ目で、下半がヘラミガキ。内面口縁部ハケ目、内面は丁寧なナデ。胴部には焼成後に穿たれた不定形の孔がある。331は口縁部1/2欠損で、胴部に棒状工具による刻目突帯を持つ。調整は外面上半ハケ目、下半がヘラケズリ、内面上半板ナデ、下半が指ナデ上げ。332～336は上部に頸部を持つ器台。332は底部欠損。口径は13.6cmを測る。333～336は体部～底部。333は3/4片、334は7/8片、335は2/3片、336は1/2片。調整は332は内外面ハケ目、口唇部には刻目が付く。333は内外面ハケ目で外面は後ナデ。334はハケ目、335はハケ目で、外面上半はタタキを加える。336は外面タタキ、内面は指ナデ、裾部はハケ目。

337～357はB群出土土器。337～342は小型壺。337は手捏のミニチュア土器壺。最大胴径8.5cmを測る。指押さえ仕上げで外面板ナデ。338は1/3片で、調整はナデで、胎土は精良。339は胴底部1/2片。調整は外面ハケ目と板ナデ、内面はナデで指押さえ痕残る。340・341は広口壺1/3片。340の調

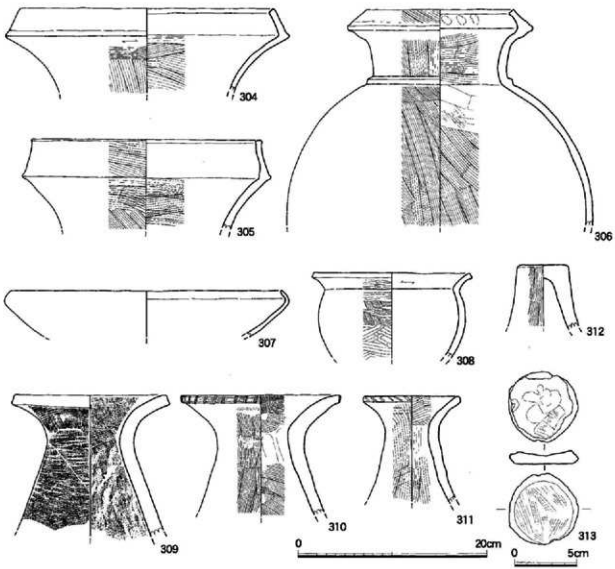


Fig.94 SX1156 出土土器 (1/4・1/3)

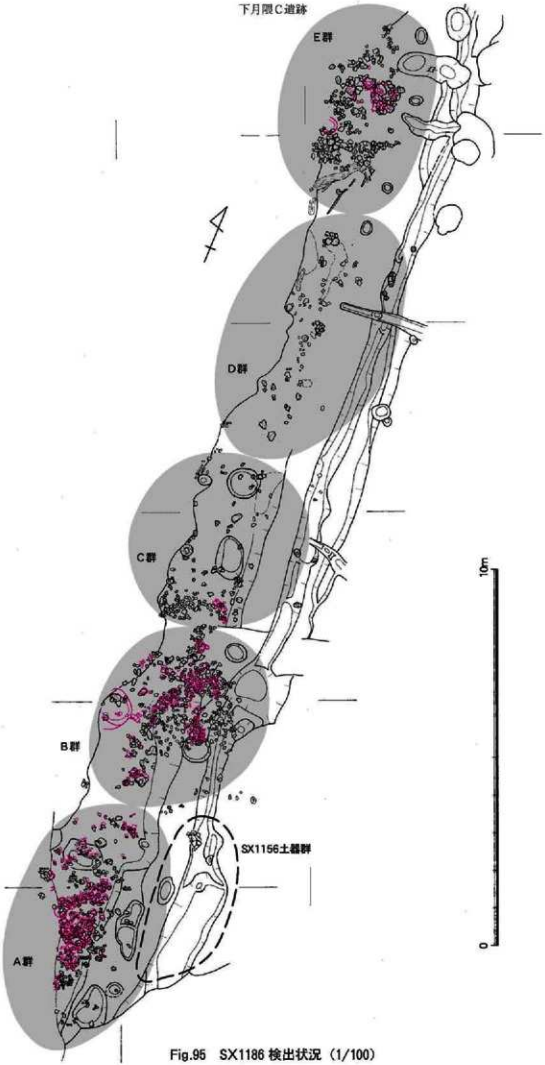


Fig.95　SX1186 検出状況（1/100）

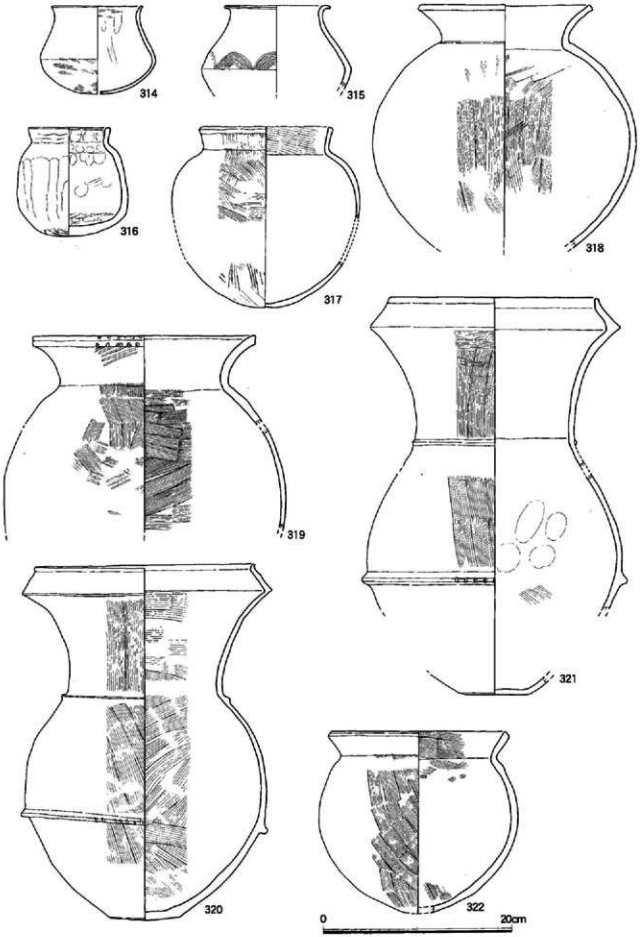


Fig.96 SX1186 出土土器① (1/4)

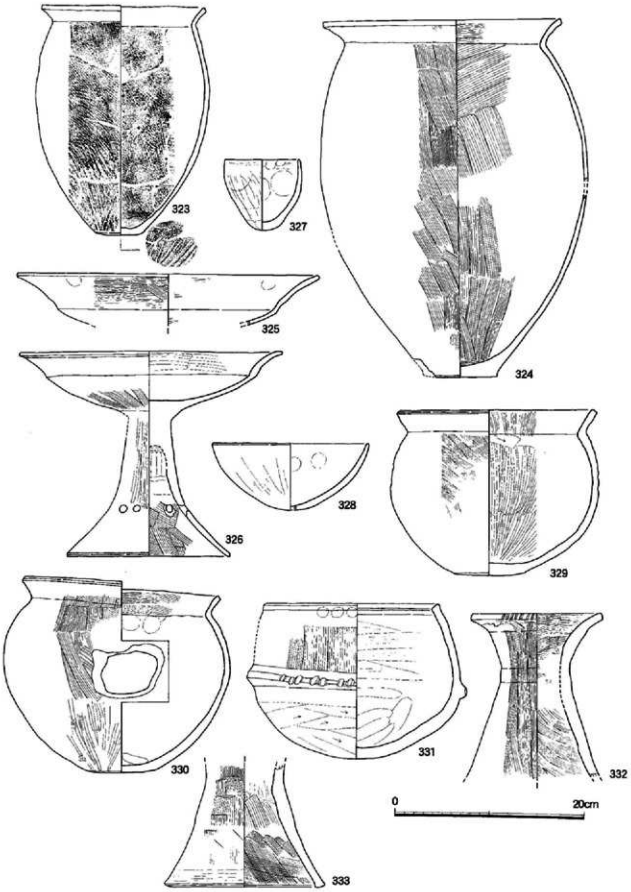


Fig.97　SX1186 出土土器② (1/4)

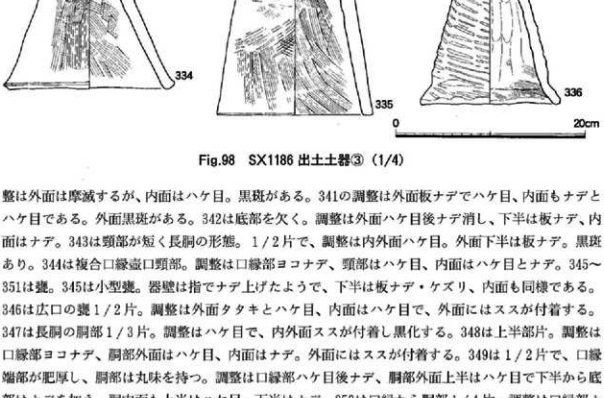


Fig.98 SX1186 出土土器③ (1/4)

整は外面は摩滅するが、内面はハケ目。黒斑がある。341の調整は外面板ナデでハケ目、内面もナデとハケ目である。外面黒斑がある。342は底部を欠く。調整は外面ハケ目後ナデ消し、下半は板ナデ、内面はナデ。343は頸部が短く長胴の形態。1/2片で、調整は内外面ハケ目。外面下半は板ナデ。黒斑あり。344は複合口縁壺口頸部。調整は口縁部ヨコナデ、頸部はハケ目、内面はハケ目とナデ。345～351は甕。345は小型甕。器壁は指でナデ上げたようで、下半は板ナデ・ケズリ、内面も同様である。346は広口の甕1/2片。調整は外面タタキとハケ目、内面はハケ目で、外面にはススが付着する。347は長胴の胴部1/3片。調整はハケ目で、内外面ススが付着し黒化する。348は上半部片。調整は口縁部ヨコナデ、胴部外面はハケ目、内面はナデ。外面にはススが付着する。349は1/2片で、口縁端部が肥厚し、胴部は丸味を持つ。調整は口縁部ハケ目後ナデ、胴部外面上半はハケ目で下半から底部はナデを加え、胴内面も上半はハケ目、下半はナデ。350は口縁から胴部1/4片。調整は口縁部ナデ、胴部はハケ目である。外面はススが付着する。351はほぼ完存。丸味を持つ胴部で、底部は凸レンズ状を呈す。調整は口縁部ヨコナデ、胴部は外面ハケ目、内面と外底部はハケ目後ナデ。352・353は鉢。352はミニチュア土器の鉢1/2片。調整は外面ナデ、内面はナデ後ハケ目。353は鉢2/3片。調整はハケ目とナデ。内面はナデでハケ目が残る。354は鉢脚台。調整は脚部内外面ハケ目、鉢部内面は板ナデ。355・356は器台。355は口縁、356は体部1/2片。調整は内外面ハケ目で、内面は指押さえ痕が残る。357は完存ではないが鐸形の土製品。頂部には摘みが付き、摘みには径0.4cmの棒で空けた円孔があり、紐擦れ痕が残る。調整は外面丁寧なナデ、内面は板ナデで指押さえ痕が残る。

358～369はC群土器。358～360は壺。358は肩の張る直口壺1/2片。調整は外面から口縁内はナデ、胴部内面はハケ目で、内底には工具痕が残る。外面ススが付着する。

359は口縁から胴部片、360は1/2片。359は調整は内外面ハケ目とナデ、360の外面はハケ目とナデ、内面はナデで指押さえ痕が残る。359の外面はススが付着する。361～364は鉢。361は口縁部が「く」字状に外折する形態。体部を2/3程欠く。外面は摩滅するが、調整は外面ナデで口縁内外面はハケ目後ナデ、内面は板ナデでハケ目。362～364は体部から口縁部が外反して大きく開く器形。362は体部はほぼ完存。調整は外面体部上半はハケ目、下半は板ナデ。内面は体部板ナデ、口縁部ヨコナデ。363はほぼ完形。器形はやや歪む。364は底部欠損。363・364の調整は口縁部外面ハケ目、体部から底部外面板ナデで砂粒が動く、内面はハケ目後ナデ。364は厚手で重量がある。365～367は高坏脚部。365は1/2片。調整は外面ヘラミガキ後ナデ、内面はハケ目後ナデ。径0.9cmの円形透孔がある。366は1/2片で、調整は外面ヘラミガキ後ハケ目、ナデ。裾内面はハケ目。非対称の1対の円形透孔

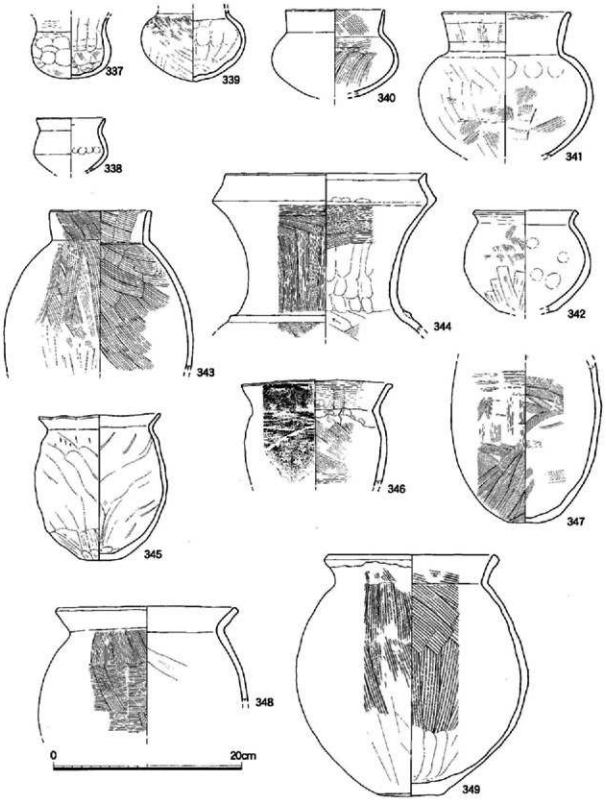


Fig.99　SX1186 出土土器④（1/4）

がある。胎土は精良。367は脚筒部。調整は外面やや摩滅するが、ヘラミガキ、内面はナデ。368・369は頂部の一端が尖った杏形支脚。368は手捏で一部欠損。器高9.3cmを測る。頂部には径2.3～2.4cmの

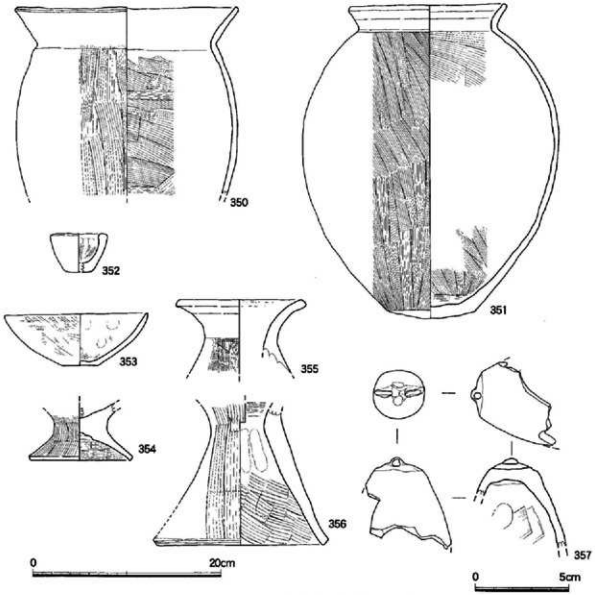


Fig.100　SX1186 出土土器⑤（1/4・1/2）

焼成前穿孔の円孔がある。369はほぼ完形。調整は体部はハケ目、内面はナデ、頂部は板圧痕が残る。尖った部分は指押さえ痕が残る。

370～377はD群出土。370～372は壺。370は下膨れの小壺で破片から復元。調整は内外面ナデで、外面には同心円弧状のスタンプ文が連続して付く。371は長頸の壺1/2片。調整は外面から口縁部内面ハケ目、胴部内面は板ナデ。372は1/3片で、調整は口縁部ヨコナデ、胴部内外面板ナデ。373は甕で、1/2～1/3片から復元。凸レンズの底部で、調整は内外面ハケ目。内面と外底部はハケ目後ナデ。外面下半には黒斑がある。374～376は鉢。374は1/3片で、調整は外面ハケ目と板ナデ、内面も板ナデ。375・376は口縁部が外折する器形。375はほぼ完形。調整は板ナデ後ナデ、内面は工具で暗文風に工具でナデ上げる。376は口縁部の3/4を欠く。調整は外面ハケ目、内面は口縁部ハケ目、体部内面は板ナデ。377は支脚1/2片。頂部には径1.3cmの円孔が空くが、中心がずれる。調整は外面タタキ、内面は指ナデ仕上げ。

378～386はE群出土。378～382は壺。378は偏球の小型壺胴部1/2片。調整は外面上半板ナデ、中央ヘラミガキ、下半はナデ、内面はナデで指押さえ痕が残る。379は口縁部欠損。最大胴径14.8cmを測

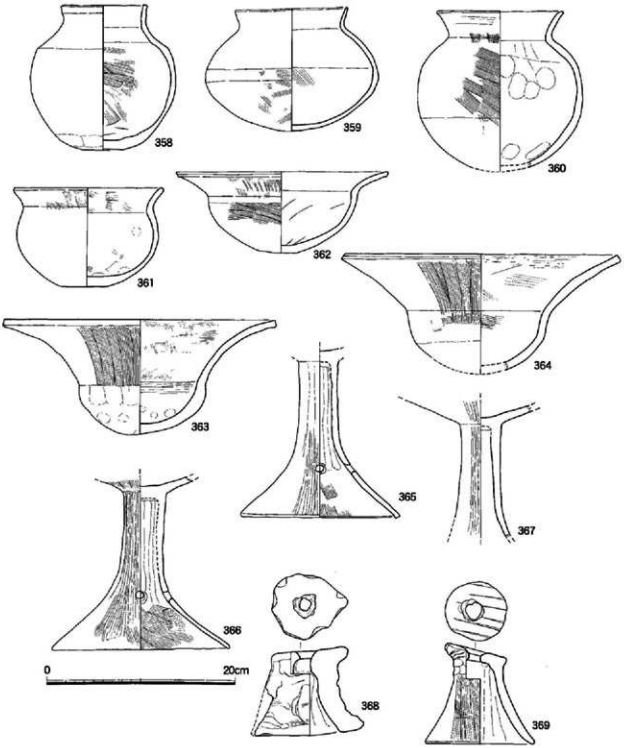


Fig.101　SX1186 出土土器⑥（1/4）

る。調整は外面ハケ目、内面はナデ。380は1/3片で、調整は口縁部ナデ、胴部内外面はハケ目。381は口縁部片と胴部片から復元。調整は内外面ハケ目である。382は全体1/2程残存。口縁内部に段を持ち、頸部には突帯がつき、底部は凸レンズ状を呈す。調整は外面頸部と胴部・底部はハケ目、口縁から頸部内面はナデ、胴部内面はハケ目。口縁端部にはヘラによる刻目が付く。383～385は高坏。

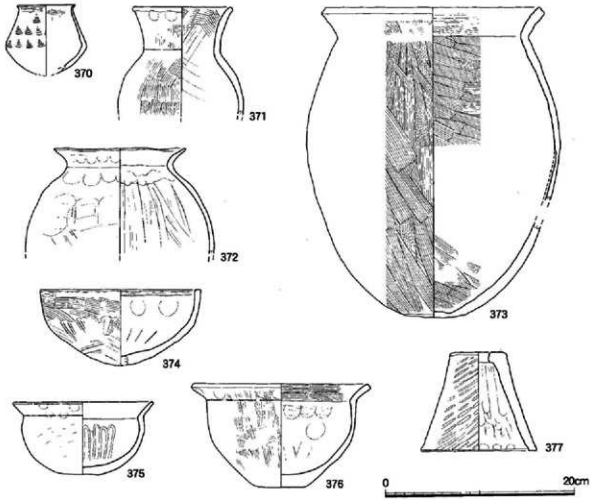


Fig.102　SX1186 出土土器⑦ (1/4)

383は坏部2/3片。口縁部が外反する形態。内外面ナデでヘラによる暗文が入る。384は1/2片で、調整は坏部外面ハケ目、内面口縁部は摩滅するが、底部はヘラミガキ。脚部は外面摩滅するが、裾部は内外面ハケ目。裾部には2か所の円形透孔がある。385は脚端部が内折する脚部3/4片。調整は内外面ハケ目とナデ。386はほぼ完形の器台。調整は口縁部ヨコナデ、上半はハケ目、下半はタタキ。内面はハケ目で、屈曲部は指ナデ。外面黒斑がある。

387～389は出土群不明の甕。387は2/3片で、調整は外面ハケ目で口縁部ヨコナデ、内面は口縁部ハケ目、内面は板ヨコナデ。388は上半部片。長胴で厚く重量感がある。調整は内外面ハケ目で、頸部には連続する径0.5～0.7cmの円形の窪みが付く。389は胴部1/4程欠損。調整は口縁部ヨコナデ、胴部はハケ目、胴部内面は上半ハケ目、下半はハケ目後ナデ上げ。内外面ススが付着する。

S20は礫錐。全長6.9cm、最大幅4.7cm、最大高4.3cmを測る。下端を錐として使用し、上端は敲石として使用する。石材は火成岩系か。S21は磨石か敲石。表面は研磨面と敲打痕が残る。S22は砥石。残存長19.1cm、最大幅10.8cm、最大厚7.9cmを測る。使用面は3面で、石材は砂岩。S23は浮きと思われる軽石製品。全長8.95cm、最大幅5.65cmを測る。各面ケズリと擦りで、左側面にノッチや紐ずれ痕跡が残る。S24・S25は黒曜石の石鏃。鏃身長2.2cm、2.0cmを測る。いずれも両面丁寧な調整を加える。

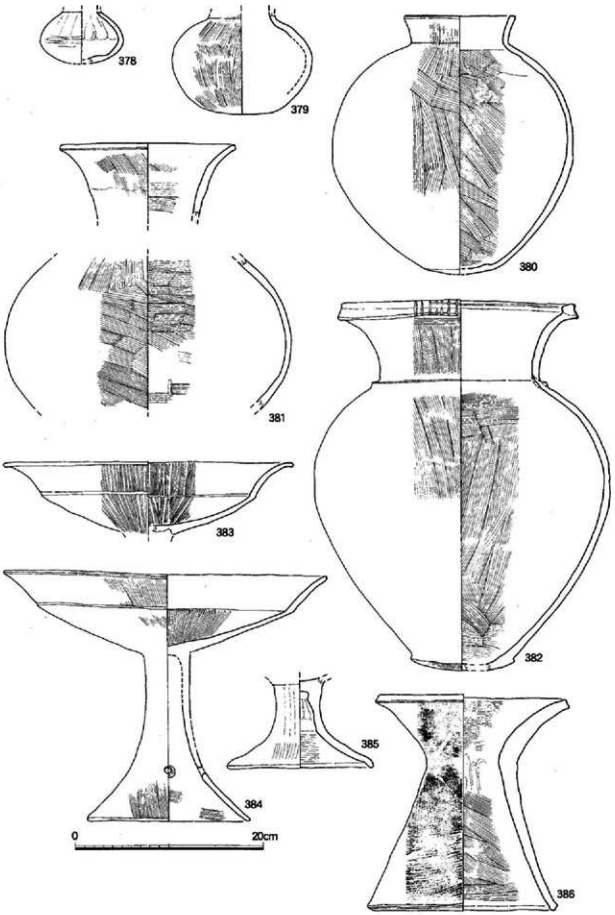


Fig.103　SX1186 出土土器⑧ (1/4)

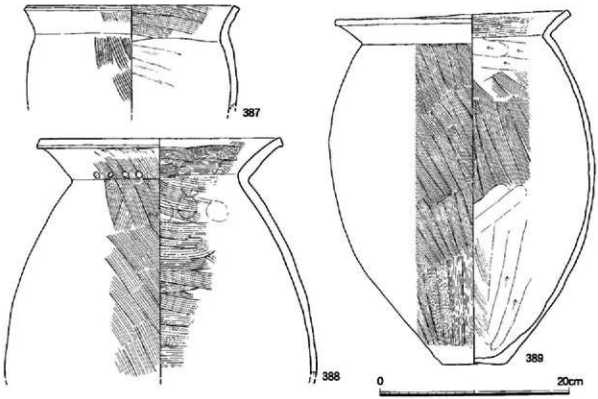


Fig.104　SX1186 出土土器⑨（1/4）

④　土坑（SK）

SK1075（Fig.106、PL.74）

H-16区で検出した不整円形を呈す土坑。規模は長軸長1.19m、短軸長1.05m、深さ0.18mを測る。底面は部分的に掘り過ぎている。埋土は黒色粘土で砂粒を含む。南側隅に突帯文土器が１個体まとまって出土した。貯蔵穴のようなものか。

出土遺物（Fig.111・118、PL.90）　弥生時代前期初頭の土器や、黒曜石剥片が出土している。

390～392は刻目突帯文土器の甕。390は胴部の屈曲部に刻目突帯が付く。調整は胴部外面が条痕で、内面はナデ。外底部はケズリ。391はやや丸味を持つ胴部３／４片。調整は内外面条痕で、内面はナデを加える。392は口縁が直立する。調整は外面条痕、内面はナデ。いずれも板付Ⅰ式古段階相当か。476は棒状の把手。残存3.3cm、幅1.15cmを測る。指押さえ調整である。

SK1078（Fig.106）

H-13区で検出した不定形の土坑。南東側に隣接してピット状の落ち込みがある。規模は長軸長1.1m、短軸長0.65m、深さ0.16mを測る。埋土は黒色粘質土である。**出土遺物**は弥生時代後期の土器が少量出土している。

SK1079（Fig.106、PL.79）

H-14区で検出した不整長方形状の土坑。東側は地山の汚れの下から検出した。規模は長軸長1.42m、短軸長1.02m、深さ0.07mを測る。深さは浅く残りは悪い。埋土は黒色粘土で地山ブロック混入。

出土遺物（Fig.111）　弥生時代後期の土器が出土している。

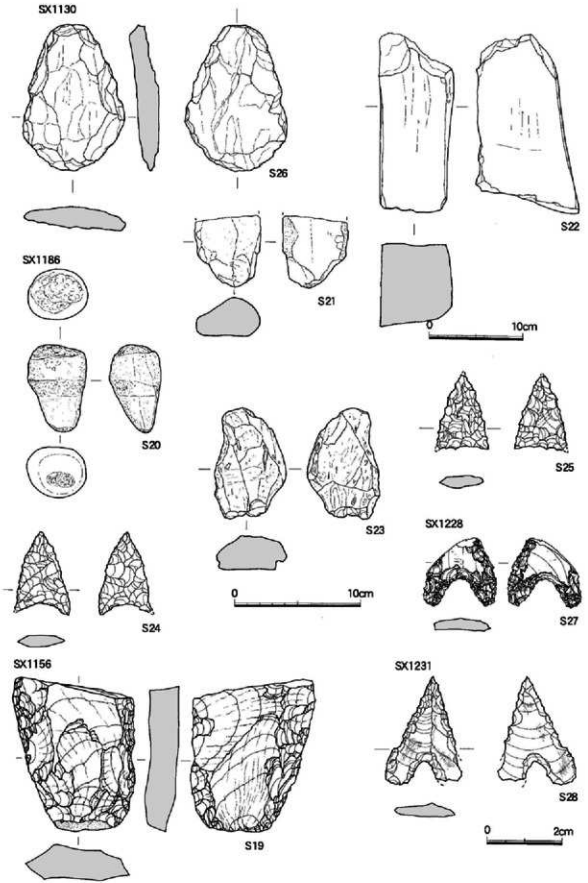


Fig.105　SX1156・1186・1130・1228・1231出土石器（1/3・1/1・1/4）